



門松や砲烟高き北の方  
初日の出韓に連る雪の山  
雜煮餅武裝のまゝに祝ひけり  
冬營の炭焼いて居る兵士哉  
従卒は呼ばれて許り冬籠  
冬籠將基に負けて指角力

狂 迂 漁 暗 紅 珠  
雨 郎 翁 的 國 山

連中、十五六名も有る、聞けば孰れの際にも句會があるさうだ、美人畫や、御馳走話し許りでも日は暮されぬものと見える。

一日の長を以て盲探りに付けてやる○點を萬戸侯の印を得た様に喜ばれる無邪氣な髯面を見ると、予は坐ろに罪深いことを感ずるのである。

▲隣家の屍室を覗いて見る、土間にアンペラを敷いて三人の屍體が寝かしてある、一人は病死二人は第一線で水汲みに行つて敵の砲彈を受けたのださうな、鐘詰の殻に焚いてある線香の烟が立ちなびく、やがて室内に充満して我呼吸を塞めるかと感ぜられる、默禮そこ

そこ戸外に出て仕舞つた。

○一月九日、晴

▲朝零下十度。

▲瓊浦子が牡蠣の一籠を持つて来て呉れる、嚴の如くに凍つて居る、藤南子と二人の寫眞を撮つて貰ふ、予は紀念のためとて病衣のまゝ。

▲左翼師團の水野法官來訪、一昨日此近村處々探したが到頭分らなかつた、今日やうやう尋ね當つたとの事、風呂を湧かさせて置いたから、直に歸らなければならぬといふのを無理に引上げる、法律談が終つてから消閑具の話となる、同子は「僕のは土細工だから手が汚れて可かぬ」と言ふ。

土凍て、美人の像の崩れけり  
冬營や愛兒の像を刻むべく  
相對すモデル寂びしき火鉢哉

〇一月十日、晴。

▲退院の日も近いから少しづつ、外氣に慣れておかなければと醫官の注意に随つて、食後郊外に出づ、酒保の前を通りかゝつた。大きな支那鍋に一杯たぶくと汁子を作つて居る。一椀五錢の定價だが毎日十圓二十圓の賣上があるといふすばらしいものだ。畑の中の墓地に、兵が二三人立つて居る、行つて見ると二個の屍體を横たへてゐる。土人が牛車を曳いて来て薪を卸す、是から火葬を營むのであらう、其處等に樹てゝある墓標が凡そ四五十本許り、皆東南方、故國の天に向けさせてゐる、中には知人の名も見える。

薄墨に墓標書きたる枯野哉

此あたり墓標に盡くる冬木哉

何も手向けるものが無い、馬鹿な事だとは思ひながら、四五本の煙草を墓標の前に駈へて置く。

▲名物の滿洲犬があららこちらに徘徊して居る、聞けば此地方には狼も出る、土人は深く之を恐れるので、夜行をせぬのも一つはそのためだといふ。

跟いて來る喪家の犬や枯野原

其 恣

▲内地から賀狀が來た、嬉しい繪葉書もある、詩を書いたのが三人、和歌が二人、俳句が五人、極まり文句の恭賀新年が七人。

〇一月十一日、晴

▲救仁郷中尉入院、呼吸器病。

同病の薬話しや冬ごもり

夜、同中尉の亞米利加在留中の話など聞く。

▲友人よりの通信に依りて、妻の病褥に在ることを讀る。

湯婆さめて故郷を思ふ寢覺哉

置炬燵さびしかるべき稚二人

おとなしく兄弟遊べ繪双六

病む母に乳なねだりと薄衾

胼の手の兄霜燒の妹かな

○一月十二日、晴、風

▲隣室に高話する兵卒の聲に吾が故郷の訛がある、呼んで尋ねると果して同郷、しかも隣村のものである、誰は戦死した、彼は後送せられたなど、知る人の大方は残つて居ない。

池の鴛鴦嬉ばかりとなりけり

▲諸處の酒保を捜がして晒らし船を得た、餅の残りで汁子を作る、蘇南子と二人久し振りに舌鼓打つ。

○一月十三日、晴

▲午前十一時、攝氏三度に上る、風なく暖か、病衣の上に防寒外套を纏うて、病院の近傍を散歩する、猫や犬の、皮剥がれたのが合計六疋轉がつて居る、牛馬の頭が各二つ、牛の足頭が四足分、其外骸骨になつたのは數へ切れぬ程散らばつてゐる。

冬さるゝ牛骨馬骨罐の殻

▲老翁と老嫗と荒れ畑に踏踏んで頻りに何か拾つて居る、近寄つて何をするのかと問へば、此れと掌を開けて見せる、大豆だ、老翁重ねて曰く、此地は吾が畑であるが、刈取りぬ内

に戦場に爲つたので何もかも踏みつぶされて仕舞つたと、成程一面に大豆が散らばつて居る様だ。

寇去つて島見廻る冬日かな

戦止んで殘んの黍を收めけり

▲附近の土人は寢所が少いので、畑の中に黍がらを積んで其中に潜つて居る。

害住みの煙遠近枯野哉

其 窓

○一月十四日、晴

▲愈二三日中に退院するに就いて、宿舎の方が防寒設備が十分出来て居るか否か、檢分に行く、三十日振りの外出、二千米突許の徒歩に、滿顔汗となつた。

▲昨日來霧が深かつたが、今朝見れば霧が眞白く凍つて居る、地上も白くなつて居る草も埃も皆白くなつて居る。樹の枝に凍り付いて居る景は何ともいへぬ美觀で、どうしても花としか思はれない、宿舎の前で我が將軍の遺遺せらるゝに遭つた、前村の遠望を指して全然隅田川原の景だ、北海道では此の景に接することがあるが、普通内地で見られない絶景

だと賞せられた。

▲歸路、馬に騎る、郵便が着いて居た東京、秋村子よりの状中、一輪の梅花を封じ込で、歌一首。

偲び見よ汝が故郷の汝が友の文机の上の梅の初花

○一月十五日、晴

▲夕方より章江、夕葉、江東、桂州、其窓、蘇南諸子集る、退院の日近ければ名残りの句會を催すのである。題は炭。

炭出すや頬冠りして襟の下	章
猫追へば炭取糺す座右哉	同
唇の頬と乾く炭火哉	蘇
炭呼べば五六顆攫み來り見	同
炭焼の當番卒や頬冠り	夕
炭焼の兵士二人が午餉哉	江
	東

分配の炭貰ひ見空さがます	桂
分配の炭包みけり新聞紙	其
起らざる炭にマツチの箱を焚く	支
消炭や息一杯に火吹竹	同
炭焼の妻も籠れり子も數多	同
	耳
	州

▲句作畢つて汁粉を食ふ、鍋が小さいのに客が多いから、辛うじて飯盒の蓋一杯づゝ。

○一月十七日、晴

▲退院、宿舎に歸つて、壁など貼る。

▲賀狀續々來る、繪葉書は多く同じ様な美人畫許りで甚だ没趣味に感ずる、一體戦地で一番困るのは物事が單調なのである、山も野も村も草木も同じ種類の同じ型だ、住民はどれも同じ無地青色の同じ仕立の衣服だ、食物といへば鐘詰の時は鐘詰ばかり、牛肉が淡るときは日に三度矢張り牛肉、萬事變化の乏しいのに困り切つて居る處に、唯一の慰籍たる内地の便りが又此通り單調責めの加勢をする様では甚だ心細い譯であるなど不平の返事を書

して居ると、夜半は疾うに過ぎて居た。

浴衣着て書中の美人寒からん  
毛蒲團に病後の膝を包み坐す  
毛衣の袖折り曲げて筆すさび

○一月十八日、晴

▲壺川子の句巻を讀む、其中に、

けろりくわんとして下手な歌留多哉  
今宵また歌留太會あり醫師許  
打紐の紫あせて歌留多箱  
歌留多勝て黛に墨を點し見  
裁縫の師に招かれて歌留多哉

鬼 壺 靈 同 鬼  
子 川 林

▲夜、其窓子の宿舍にて、小宴、凍つた刺身をばりくと喰ひ。淨瑠璃始まる、前座は從卒某、眞打は文樂にも出た事のあるといふ軍役夫某、實は攝津大株門下の三代太夫といふ

中々の美聲、三勝半七、壺阪寺など旨い處づくめであつたが、予は從卒が、行きつまり勝の蝶花形に幾行の涙を催した、無理な脚色ではあるが、兎も角義烈な武士道がらみに出来上つて居るので、此時此境に在つて聴くのだから感と惹く事が切なのである、泣いたものは外にも二三人有つた、弱虫豈に予のみならんや。

▲三更、厠に上らんと戸を出づ、前面の銃聲例に依て絶えず、彼方の畑には半死の病馬が展轉反側して居たが聲音を聞いて頭を擡げる、此方の窖の中には、將に屠らるべき數頭の豚が隅の方に寄り添うて寝て居る、風牙えて、月寒し。

○一月十九日、晴

▲日向の作郎子より病氣見舞來る、中に一輪の紅梅を封じて句を添へてある。

病床や君にかしつく美女一人

▲沙水、二六、秋江、翠江諸子つき〜に來訪、

▲午後、風呂に入る、四十日振り。

▲晚餐後、記者僧侶の宿舍を訪ふ、句談を試ひ、甲和尚大に悟つたといふ、他、和尚冷か

す、甲和尚躍氣となつて辯ず、遂に法華經に曰くを擔ぎ出す、大袈裟な俳論となつて仕舞つた、爾後托鉢談を聞く、寺院生活談を聞く、一夏位は僧侶になつて見たい様にする、僧房十句を作つた。

蠟消して佛殿下る寒さかな  
來り參ず善女人あり秋冬花  
鐘搗いて小便放る、落葉哉  
あつものや乾蛙の發句干菜の禪

○一月二十日、晴

▲此程の病馬を土人貰受けて屠る。

▲犯罪ある土人斬らる。

○一月二十一日、晴

▲内地に歸還の某子告別に来る、入時に起床したる事近來珍し。

○一月二十二日、晴、風

▲此數日、内地便はかく敷來ず、大に寂し  
▲弄稚子と碁を圍む、二面勝て頭痛くなる。

▲日暮より雪降る、秋江、翠江子等と火鉢を圍んで、愛兒のノロケ談を始め、秋江子曰く僕のは、父母をカーチャン、オートタンと言ふ、御客があると必ず座蒲團を出すことを己の任務として居る、若し他の人が出さうものなら職權侵害を尤むる如く圓い眼をして蒲團を見詰める……。予曰く、僕の子は出征の時までは、どう教へても、僕の手をハーチャンとしか云ふ事が出来なかつたが奮闘の通信に依ると、オートチャンと出来る様になつた相だ、僕が外から歸ると必ず帽子を受取つて親ら之を冠つて先に立ち、反身になつて座敷に入るのが例であつた。秋江子のは長女で今月が満三歳、予のは末女で三月丈け長じて居るのである。

滿洲の話聴くらむ炬燵哉  
眞似事の足袋も編むらむ父が爲め

○二月二十三日、雪

▲午頃にして雪降り能む、三寸位も積つたらう、風吹き暮り、寒劇し、熊本より石田教授の葉書に、

紺足袋の女湯に行く玉霞

裏口や霞ふりこみ犬の腕

天 倪

家の周囲、街の光景など内地の事、眼前に浮んで来る窓から覗いて見ると此處の雪景の寂しい事、敵に近い處だから土民も居らぬ、殊に女などいふものは繪葉書以外に見る事が出来ぬ、漠々たる雪野をたまさかに往き來するものは我兵士と支那の苦力ばかり。

▲珍しく公用に日を暮らす。

▲夜、隣家を訪ふ、従軍記者と僧侶の合宿である、某和尚の情話殊に興に入る、惜しい事には彼の鬚髪がまだ皓くない、他日またこの懺悔談の續篇が出来なければ好いが。

○二十四日、晴

▲雪に映る日光、眩し。昨夜温床が熱過ぎた故か、毛布を引被つたのでか、頭痛じ。

▲數多の内地便中、梅花を封じたのがまた二通ある、水戸から來た白梅は黄色に、熊本か

らの紅梅は紫に變色して居る、同じ様な事を兩方に返事して遣る。

壁上の梅咲さぬらん留守師團

君が家厠の梅に發句あらん

▲蘇南、章江、其窓諸氏と小飲、土人の火事話しより題として句を作る。

火事道や逞しき牛咆え來る

野の火事の燃え移りけり杉の森

槍立て、寶庫を守る近火哉

火事途に炭庫に移る炎かな

▲敵前千米突の土窟の裏より來た消息のはしに、

汗子食ふ吾黨の多士冬籠

冬營に同窓會を開きけり

從卒を唄の師匠や冬籠

蘇南 章江 立耳 其窓 八城 同 同

如何に消閑の策に窮して居るかと思ひやられる、殊更に此方の氣樂さをいひ遣して。



冬營や庖刀法を背誦す  
遼東の豚紹興の酒や冬籠

○一月二十五日、晴

▲宿舎の側の窖の中に豚を入れてある。今朝見れば十頭ばかり皆な隅の方に集團つて背の上は真白く雪が積んで居る。

▲下給品、袖口の毛皮、煙草二十本、酒一合。

▲露國大騷亂の報を聞く。

▲病氣見舞狀、續々来る。

狗兒之、繁鳴聲之悲天、不寐夜半爾遠友思

○一月二十六日、晴

玉 里

▲終日手紙書く。友人誰彼れの消息をも書き副へて。

人は皆酒に肥えたり冬の陣

▲午後十時頃、門前に犬の吠ゆる聲がする二匹、三匹、やがて數十匹寄りたかつて吠え立

てる。来て呉れ——誰か早く来て呉れ——と恐ろしい叫び聲が聞える。從卒や馬卒が駆ける。近所の者も出る様子。暫くして歸ての話しに、一人の兵士が四五匹の犬に取り巻かれて居たといふ。

▲ガルニーに在る輪卒——歌人白澤氏より來信、澤山の歌がある。書籍取り寄せの便宜が無くて困つて居るらしい、可愛想に新約全書、英詩集、孟子、以上三部が陣中の大書庫であるとの事。小包郵便が一般に許されば好いと思ふ。

更に又た年の曆は人の世のあだ懲らすべく開かれにけり 白 澤

▲散歩の途上、牛の角を拾ふ、尖端の二寸許を鋸で曳かせる、自然の印材が出来た。支那大工の鑿で刻つて見るけれども、旨く切れぬ、某軍醫がメヌの古いのを呉れた、漸う彫れる、頗る可笑しい物になつた。來客の彼は珍しがつて、自分も拾つて来て頼まうといふ、予は苦力に懸賞して拾ひにやつたが、今に餘り多くて賞金の直下げをせすばなるまい。

○一月二十七日、晴

▲寒氣益々強くなる。防寒衣は贅だつたなどこぼして居たものも、是は耐らぬと毛皮にく

るまつて居る。

金屬類は皆な皮膚にべたりと接着する、今朝も苦力がフツフと呼吸を左に手に吐きかけて居るから、何かと見れば、庖刀が拇指から離れずに居た。

▲此頃から左翼の方黒溝壑方面に大敵が来たといふ噂、毎日劇しい銃砲聲が聞える、予等も何時出發せねばならぬかも知れぬと杞憂して、行李一切取り片付けておく。

座のまはり調度も無くて寒さかな

出發の命を俟ち居る寒さかな

雪雲や敵と覺ぼしき砲の音

砲烟の凍つて雪と散すらむ

○二十八日、晴

▲朝、白菜と鶏卵の味噌汁。晝、鯛の鹽焼。晩、鍋焼(鶏肉、葱、焼豆腐)、何か知らぬ小魚のフライ、近來の美食である。

▲昨夜零下二十五度に下りし由。

▲馬卒が一間計りの棒の先に劍を着けて提げて居る、何をするかと尤ひれば此頃犬が多くなつて夜間厠に上ることが出来ぬから今日は退治しますと力ひ、滑稽な清正が出来たと思つて居る内、間もなく歸つて来て鮮血に凍つたる劍の尖を手に突付けて「やりました、二匹づぶりと遣つ付けました」

▲其窓子と對酌

故郷の語、故郷の人と冬籠り

○二十九日、晴

▲左翼乃木軍大捷の報を聞く。

▲此頃夜々、眠られぬ、昨夜はモヒを一服貰つて服んだが何の効も無く、午前四時半頃までバチ／＼遣つて居た、運動不足のためかも知れぬ、聞いて見ると外にも同じ様な人がゐる様だ。

○一月三十日——二月十日

▲三十日、母の訃報。

去春出征の時、母は七十三の高齡、予は生來の虛弱、心密かに再會の日なかるべしとばかり期したれど、上陸後予は比較的健康佳く近き十年以來に、例なきまで肉さへ付きたれば、滿洲の風土宜しき由を記して、平和克復の後には母を奉じて此地に移住すべしなど、戯れに言ひ遣したることもありき。夏過ぎ秋も経て、噂に聞きて恐れたりし冬ともなりぬ、遠塞の風いかに身に沁むらむと、思ひ設けたるに此もさばかりの事なかりければ「小羊の白かは衣袖長く、纏ひておれば寒けくもなし」故郷も木枯吹かじ雪降らむ、老いたる母の足の冷ゆらむ「暖かさ此の裘は母君に、歸らむ時の家土産にせむ」など、凱旋の樂しき日を夢みたりしを。あゝ今は甲斐なし。

足乳根の母は在さず、よしや吾れ

家に歸らむ時はありとも

幼かりし程より、去年の春まで、在りつる事經つる事の様、限りもなく思ひ出でられて、鞠養の恩、不孝の罪、日夜吾を責めて眠らしめず。陣中の事にも有り且つは慰められんことのないに苦しければ、人にも告げず、深く秘して獨り泣きに泣く。

郷里の誰彼れより、日々弔慰の状來る、それよと思へば封を開くも、いと／＼慥きわたりや。主治醫たりし斗南子より、

人世無常足嘆嗟、靈前濕淚捧香花、料知泉下眠應穩、遺得兩兒團圓家、

これしも、打罵らるゝ心地のみして。

○二月十一日、晴

▲紀元節、内地にても珍しかるべき好天氣である、將軍以下司令部將校一同記者僧侶共一堂に會して祝杯を擧げる。散じて後思ひ／＼處々に私立の小宴が開ける模様、予は獨り我が宿舎に歸つた。

▲南浪、笹洲、梧林の三和尚、松本郵便局長來訪、三僧は句を作るから題を出せといふ冬

の題も品切れて居るから取り越しも好からうと「若草」に定む

若草に將軍馬を牽かせけり 梧林

予は一向、作る氣になれぬ、獨り机に對して印を彫る。若力が拾ひ集めて來た牛角が二三本有る。印刀さへ執つて居れば、一心になつて外の事を思はぬから、自分の三昧はこれに限るのである。

▲桂州子來訪、玉里子から頼んで來た銀鈴とかいふ歌集を交付す。

▲蘇南子、公用を以て第一軍に赴くとして立寄る。

▲午後、乘馬、某野戰病院に狂雨、珠山諸子を訪ふ、公用で來合せて居た章江、續經に來て居た鳳雛和尚等と榮螺の鐘詰を着に酒少し飲む。

▲村長の柳慎齋を訪ふ、本家は病室に徵せられたので、門側の狭い一室に家族親戚四五十人ゴタ／＼と住つて居る。主に婦人と小供である。七十許りの老夫が病臥して居るのが柳の父だといふ、母も居ると隅の方を呼ぶと、やがて出て來て挨拶をして、老夫と同じ年輩らしいまた達者相に見える、新たに孤子となつた予は羨ましく思ふ。隣の珠山子に頼んで老夫を診て貰はせると、輕症の氣管支加答兒だが老年だから大事にせねばならぬとの事、狭い室に多人數、しかも不潔で暗くて非常に煙たい、逆も此處に居て輕快は六ヶ敷からう

遠陽に轉地療養させたらと、慎齋に話す。直ぐに其事にしやう轉地は日本大人の許可を得なければならぬ早速手數をして見やうと答へた。

歸らうとすると無理に引止める、煙ののを我慢して居ると程なく飯頭を推らへて出した、飯は刻牛肉で、所謂肉飯頭だ、予は之を喫ふと何時も水滸傳を聯想する「慎齋が山賊だ、澤山居る此婦女子等は皆拐略されて來た者共だ」斯様になると、予は到底此強盜を退治するの豪傑といふ柄で無いから、就れ、僕の軍用手票を奪られて、絞め殺された結果は予も肉飯頭の原料となるのだ……………

空想より醒めて、慎齋を伴ひ隣村に赴いて、彼の依頼に因つて某人の苦力に世話した。

▲日暮歸宿して見ると、東壁に落書がしてある、

紫驕嘶不已、拂雪望京華、萬里方殘賊、千山未豈礙、朔方空作客、烽火燦如花、若得重携手、一壺爲我賒

誰か今日の祝酒に酔つ拂つて來て遣つたものと見える、それにしても彼の針留にしてある東郭子の詩箋を心憎く思つて即座に次韻を、斯うまで見事に倣て追けたのは誰だらうと怪

んで居ると從卒が「今日御不在中に鳥居通譯殿がお出になつて、書き散らかされました」と留守甲斐のなかつたといふ様な口氣、果然、雪田子ならでは咄嗟の作に此雄篇を得られる筈がない、まさか新聞給の切り貼りも詰らなさ過ぎると思つて居たに、圖らずも此佳作を得て憐焉を醫することが出来たと獨り大喜び。東郭散人の原作は（落合造士館教授）

新年開曙色、軍國人詔華、風調高懸日、神山早霜露、飛鷹思戰伐、消息問梅花、南地官遊久、朔天吟望賒

▲昨夕、賜品——烟草、菓子。

▲今日、下給品——烟草、酒、菓子。

友人より寄贈品——栗、棗、煉乳等。

▲朝、味噌汁、牛、牛肉の煮べ、晩、鮭と、何んだか知らぬ堅い肉。

### 陣中寫生帖

#### 少女の哭聲

此二三日來、隔壁なる土人の家に、屢人の泣く音を聞けり。

今朝も亦聞ゆ。正しく女、うら若き少女の聲なり。暫し罷みて、更に起る劇しき叫喚、咄などにて打つと覺し。

そも、何に、斯く日毎く打騒ぐにやと、隣家の戸扉押開きて内に入れば、管の音ハたと止みぬ。例の蒸し曇き異様の臭氣鼻を撲つ。

左右に設けたる温床の上、各四坪許り、南北の窓共に堅く鎖して、埃と煤とに薰みたる障子の明り微なれば、室内の光景定かには見えねど、凡そ五六十人も有らん。轟と詰り合へる老若、此の一村の婦女子職ひを避けて皆此の一室に雜居せるなり。ゆくりなく入來れるを怪しむか、一同の視線悉く我に集まりぬ。恐るゝにやわらび、森々く隅に遠退りぬ。奥まりたる方のいと暗きに、那個か其れと、妻見え判かねど嗚咽の聲。忍ばんとするに、

忍び難きさまなり。予は、予が前に近く坐せ。梅白き老夫に對ひて、何故に斯くは泣く、打ちたるは誰れ、打たれしは。老夫恐みたる體に答ふれど、老いの濁み聲、いと低し。さらぬだに唐噺りの解し難きを、幾度問ひ返せども甲斐なし。殊更に不通の言を弄するにもや、とまれ、深く訊ひ窮むるの要もあらねば、唯だ、靜にせよと言ひ捨て、予は此の息苦しき家を立ち出でつ。

黄昏の頃、一輛の馬車、門前に來りて止まりぬ。三個の老婦と一個の壯伎とは、車より降り、門を入りて、隣家に進みぬ。あはや、隣家の騒ぎはまた起りぬ。答の響き又聞えぬ。少女の泣く聲いと急なり。

怪しとも怪しき隣家の様かな。予は必ずや此の理由を窮めんと意氣込みて、戸外に立出れば、折好し、二三の苦力ども、物見顔に佇めり。予は其一人に何事ぞと問ふ。苦力は打ほほろみて新娘々々と潜み聲なり。はた彼の壯伎に指さして、他是新郎と囁く。さるは、いよいよ解し難きことならずや。彼の音、彼の泣く音、大禮の目出度さに應はしからず。或は此の地方の慣習にもや、訝しき事の限ならずやと、戸外を往きつ、還りつ、偷に隣家の

動靜を窺ふ。壯伎は土間に踞りて、長閑かに烟草など煙らし居たり。三十路餘り二二三つも過ぎたるらむ、ひくつけき面貌、垢染みたる掛子の上に纏ひたる、一領の背心のみぞ新裁と見ゆる、紋縷子の文目鮮かなりけり。奥には數人の口々に罵る聲喧しく、泣く音いよ／＼切なり。ドタバタと暴らかなる物の音。程なく戸口に現はれたる光景は、四五人の老婦、手掘り足捕り、一個の少女を昇き出さんとすなり。

壯伎は心得顔に、戸口を走り出で、奇聲を揚げて高く叫べば、聲に應じて、門外より御者は鞭打振りつ、三頭の騾馬をあやつりて、砌近く車を寄せたり。二個の老婦は直に飛び乗る、残れる者共、和めつ、すかしつ、掻き口説きつ、少女を車に載せんとす。力の限り腕ぎに腕ぎ、聲の限り泣きわめく彼の少女、未だ胡蝶の春には遠し、二七許りの菑の花、稚々しき童顔なりけり。新嫁の装ひしたりとも見えす、常の儘なる水色衣の幾處か扯き裂かれ、髪はおどろに振り亂れたり。

先程より傍に立ちて、此有様を見てありし白髯の老夫、斯くては果てじと思ひけむ、足元の高梁稗を拾ひ取りて、所嫌はず慘々に打据うるに、少女が勢少しく沮みぬ。遂に車上に

昇き揚げられぬ。されど尙隙だにあらば、飛降りん氣合なるを、二人の老婦左右より緊と抱きて勸かしめず。

壯使は、再び叫びぬ。ビシ〜と馭者が長鞭驪背を打てば、車輪次第に轉じ去る。頭を揺かし、足を踏み、もだえ〜て泣けども甲斐なし、呼べども術なし、少女が涙徒に庭の氷を厚うしぬ。

車、門を出でぬ。老夫と老婦と、門に倚りて見送る二人こそ、少女の親にもわるらめ。壯使は之と相揖しつゝ、やをら懐掻い探りて一束の紙幣を老婦に交しぬ、軍用手票なり。更に一揖、身を翻して、車を趁ひて走せ去りぬ。一群の苦方は直に老婦を圍みて、手中の物を兎見、かう見、銀票の額を問る様なり。五百圓、好了、太貴……など評し合へるも淺ましや。

といろに響く車の音、絶え〜に尙ほ聞ゆるは少女が泣く音なり。吹き荒ぶ夕の風寒さに驪馬の足掻きも早むらむ、五分と過ぎ十分と過ぎ、遠き〜枯野の中に、彼等が影見る見る少くなりぬ。車の響きも、少女が聲も、今は將た聞えず。

### 祝捷會の前日

「餘興委員殿は此家でありませるか」と音なふに、然りと答ふれば、帳の裏に進み來る虎鬚還らしき一個の軍曹、脱帽注目の禮を施しつゝ、ポケット掻い探りて一封の書を我前に差出す

### 報 告

- 第一中隊一等卒 鈴田賢一
  - 第三中隊一等卒 大井勘太
  - 第四中隊二等卒 山本小作
- 右祝捷會餘興の爲め軍談、チヨボクレ及び流行歌の選手として下士引卒の上差出候に付可然御取計相成度此段及御照會候也
- 追て角力の選手は當大隊より五六組差出す筈に候

○兵大隊長代理

○○○○

予は其所謂選手等の顔見たしと思ひ、皆此處に喚べと命じた。軍曹は帳の外に出で一呼したが、直にドヤ〜と三人の兵士を伴れ來つて、子が前に整列せしめて一齊の敬禮を爲さしめた。右翼の丈高きは二十三歳、殘りの二人は三十の坂も越えたり氣にて、豫備役の者と思し。

「鈴田は何を演るのか。」

「秋は軍談、法螺祭文で有ます。」

「私はチヨボクレで有ます、阿呆陀羅經。」

「左様すると、山本が流行歌だネ。」

「ハイ。踊も少しは出來ますが、相方がありませんで……。三味線はチャンの蛇皮線で宜しく有ますが、貸て下さる事は出來ませいか。」

先づ彼方に控へて居よ、追つて宿舎に案内せしめると言ひ渡す。

暫く經つて、又報告が來た。旅團副官宛のであるが、此方に持つて行けと言はれましたとの口上、披いて見ると。

一悲	劇	(婚約の看護婦)	三幕
一喜	劇	(國債募集第九の抵當)	一幕

右祝捷會餘興に出演し得、各演技者は本日午後三時迄指定の地點に集合す。  
答。

○兵第〇〇聯隊副官 某

面白〜、一贅語を着けない處、如何にも簡單明瞭流石に武人の妙文だと感服せられる次に來た報告、是は又た更に簡單なものである。

舞踏手	山本直吉、原勘太夫
歌手	穂田吉助、競原繁、杉池喜熊
三味手	安田範隆

此等を手始めとし、各隊の報告類々として到達する。二座の舞臺に配當して、番組を作ら



ねばならぬのだが、色取りを善く爲やうとすれば各隊の兵が入れ難る事に爲つて自然監督が困難、去りとて隊分けにしては踊は踊、軍談は軍談とノベツに續いてダレが来る虞がある等と苦慮する。

日没後、鐵蹄といろに入つて來た傳騎、道を間違へて遅くなつたとの言ひ解である。

一技藝 (獨樂廻し) 人員(一、名)

二技藝 (黑鳩公の凱旋) 人員(四十五名)

右は就も當隊に於て試験を経たる處技藝熟達の者なることを認め候「黑鳩公」の凱旋なるものは舞臺外に於て路上行進を爲すものに有之候多人數の事  
故祝捷會當日午前九時貴官の許に出頭せしむべく候此段申進候也  
追而太鼓直徑二以上のもの一個調辨相成度候

是は多分滑稽行列であらうと思はれる。懸意の秀武先生を招いて、蛇皮線と太鼓の借受方を依頼する。太鼓はそんな大きいのは武王廟のより外に有るまいとの事。

角力に關する諸報告の紛れて來たのが若干、其は皆他の受持委員の處に轉送した。次に福引の整理を爲せねばならぬ。各隊に分課して提出せしめたのが、總數四百にも上つて居る。けれども陳腐なもの、同案の多いから、幾分の淘汰を要する。二三の人に修正を依頼して、自分も其一部を擔當して扱て讀み掛つて見る。最初が歩兵第〇〇聯隊の提案、四枚の野紙に、七十六番の趣向がある。

番 號 問 題 解 釋 給 與 物 件

第一號 關羽 唐の神 唐紙

第二號 師團長の馬 善くかける 筆

第三號 露兵の守本尊 白旗

第四號 今後の宿舍 のみ(飲盃)にくし 征露丸

第五號 白兵戰 格闘(角糖) 角砂糖

第六號 中隊長は何時でも 自若として 磁石

第七號 女學校の參觀 嗅見 鏡

第八號 特派慰問使

美人繪葉書

是は案外に粒が揃つて居ると喜びながら、段々讀んで行く内に、「大石良雄、唐辛子」、「犬の一聲、椀」、「富國の秘訣、石輪」などの古めかしいのや、或は一地方の方言で普通に解し難い地口などが續々と出て来る。

予が見た三隊分、百五六十番の中で、戦争に關した者が無論最も多い、極端に猥褻なものも少くない。構和に關したのも十許りあつたが、豫期に反して望郷の意を寄せたものは唯の一つも見出さなかつた。是亦天津橋上杜鵑の聲軍中の消息を下すべきものである。今左に其問題に用ひられたる名詞に就て四五種の統計を擧げて見やうか

露帝	十	旅順	五
沙河	八	威狀	六
女郎	九	戰鬪、苦戰	四
斥候	四	退却、敗北	三
黑鳩公	十六	バルチック艦隊	五

景物の中で最も多いのは 煙草、封筒、巻紙、筆、鉛筆、石輪、楊子、齒磨粉、空鐘。珍し物は 彩畫を施した籠に鶴。

高價な物は プランデー二本。

穢い物は 鼻囊丸、虱、南京蟲。

意外な物は 生きた子豚、女下駄。

糞と帳簿の整頓が出来て、品物の引合も済んだ、茶を命じて腹這ひながら喫んで居ると、パタ／＼と響く張り扇の音、何處かで明日の豫行演習をやらせて居ると見える。

「……此方は宮本武蔵之助殿、サ知つたりと飛び退つて、左右の木劍取り直したる事に致してビタリと天地の構へ、とちらも名人と名人一文字と惹でゴブ／＼と言ふかんだから中々勝負が付かないて……」

屍 室

西に二十度許り、打傾ける泥屋蓋の小屋、入口左右の柱に貼りたる紅唐紙の色既に褪せ盡

したれど、「八洞神仙來進寶、九天王女送餘糧」の一聯、尙體氣に讀まれたり。此は是れ土人の穀倉なり。

鎖したる扉の正面に、筆太く屍室と題したり。案内の軍曹先に立ちて、扉を押して進み入りぬ。予も其後に随ひぬ。屋内は一面の土間なり。雜物一つも残さず取片づけて、掃き清めたる地上に、一枚のアンペラを敷き、其が上に四個の屍體を駢べたり。武器は除かれたれど、他は常の服装のまゝ、仰臥せるが面部は孰も毛布に掩はれて、遺恨の 眦か、微笑の露か見るに由なし。

回向は既に始まれり。經は阿彌陀經、僧は本願寺の特派布教師、洋服の上に金襴の袈裟を、尊氣なり。分院長長野一等軍醫部下數員と僧の左に立駢びて、皆肅然として頭を低れたり。一屍體の上に如來の尊像を載せ、前に一本の洋蠟を點じ、傍に支那線香の烟立ち騰く。燭臺も香爐も共に鐘詰の空殼、レンタルは流石に剝去られたり。されば、此の邊僻の胡地、倥傯の戰場にして、此感歎なる回向を享くることを得るは何等の果報ぞ。七寶の燄臺、瑪瑙の香爐にも優りて幾層倍、得難き有り難きことならずや、など思ひ浮ぶるうち、

背後の方に人の氣合す、四五人の兵士忍びやかに來たれるなり。やがて囁く聲す「松本は孰れか……。」「紅と黄の雜系の靴下、あれが大崎だ、追送品で見覚えがある。」「戒名は判つたか「うん皆んな手帖に……。」

### 陣中の料理研究

去月の追送品中、相撲印の次亞磷酸があつた、これは細君、大層お氣を利かせられたものだと思つたが、目下強壯に復して服用の必要が無いので、其の儘にして置いた。數週間を経て、食も進まず、頭の痛むときが折々ある、強壯剤を服んで見やうかと右の次亞磷酸の外函を開けて見ると瓶の中に黒い液が入つて居る、はてな此藥は殆ど水の様な色の筈だが、長途の輸送中腐敗したか知らぬと思はれた。不圖氣が若くと、今除けた中包みの紙に何か書いてある、「これは築山先生から頂戴しました柿のソースであります」。丁度好かつた、ソースが切れて、買ふのも五里や七里の處には無い、醬油と酢とまぜてソースの代用にして居た處であつた、何より有難い品と大喜び、食へものが旨く食へられれば強壯剤と

何も要つた事では無い。

一滴も廢らぬ様大事に使つて居る。

一體滞陣中は閑なのと戦陣中乾ほしになつた胃腸の復舊との必要で、料理の研究は中々盛んである、予の従卒は新聞記者をして居た者で、召集以前にはそれこそ筆より硬い物は持つた事も無かつたらうが、學者も長者も、文人も藝人も兵に爲つては平等無差別、同じ服を着る様に同じ仕事を爲ねばならぬ、静養軒や一日亭の樓上に坐して、食へるの食へないのと贅澤をも云つたともあらうが、其先生が御自身に、飯も炊かねばならぬ、菜も拵らへねばならぬことに爲つて來た。最初は随分珍無類な料理が出來たが、何機最早に一年の實地經驗、慣れるといふのは恐しいもの、飯炊き拵なら殆ど理想の極に到達して、白飯、麥飯、粟の飯、蕎麥飯、黍飯、小豆飯、神通自在に炊き上げる様に爲つたのである。牛肉や鶏肉に野菜を切り込んでの醤油煮、左様な幼稚な、原始時代の野蠻的なお菜など今は箸を付る者も無い(行軍中は生でも咬るが)西洋料理に支那料理、一つは習ひ二つは覺えて今では天晴れの庖刀振り、此度こそ本當に料理の小言が言へる様になつて來た。

十七字天地(沙河冬營中)

▲風が吹き始めると十時間二十時間小止みしない、新聞紙で貼つた窓が吹き裂ける、内地では風折れ無しと極つた柳も相場外れにへし折れる、炊き立ての飯がお冷になるやら、洗濯の靴下が棒になるやら、それは〜たまつたものではない、風さへ無ければまだ初冬の日かげば〜と窓開け放つて風狩りに半日を過す、香氣なものだ。

黍垣に毛衣を乾す日和かな

其 窓

▲幾十萬といふ数多い被服をやれそれと一時に調へたのであるから、中には着るより早くぞろ〜と毛が脱けるものもある。

裘の肩擦れにけり銃の痕

芙 蓉

▲山と積んだ高粱も焚き盡した、庭前の白楊を伐り倒して〜、何がさて生木のこと畑いは〜鬚面の鬼武者も滿眼の涙。

煙り樹の吹けば火が飛ぶ裘  
掃割るや節瘤堅き斧の音

玄 耳  
蘇 南

▲追送品が着た、何だ不相變だね、真綿のチョコキに毛糸の靴下、繪葉書に子供の寫眞。

破れ足袋の二足を綴りあはせけり

毛糸編む術も覚えて冬籠り

同 立 耳

▲滿洲の文明は明治の初年位か、併し石油も亡國論の時代は既に過ぎ去つて到る處燈火用に使はれて居る、ホヤ付きのランプとまではまだ行かない、どれも皆露店式のカンテラ。

土間に點すカンテラ暗き夜寒哉

立 耳

油盡きて楷火にするす日記かな

清 牛

▲風呂といふものは城内でなければ無い、村のものは正月前に一度沐浴をするばかり、風呂桶といふもの有らう筈が無い。

小春日や妻に風呂焚く真査中

蘇 南

▲佳節の用にと見て置いた廟の菊を二日の夕方に採りに行つた、影も形もあらばこそ狭い境内に數百人が宿舎して居るのだから、一寸の隙もなく寢蓐が敷つめられてゐる、廟守りの僧を喚んで此堡子に菊は無いかと尋ねたが沒有々々。

菊描いて佳節の葉書寄せも来よ

立 耳

▲鬚髯は天然の防寒具、輪卒も軍夫も有り合せのまゝもじやくと或は天神、或は夜叉。

頭髻に毛衣の毛のもつれけり

立 耳

▲時々思ひも寄らぬ御馳走がある、此間から卷すし、鰻飯に驚いた、今日は風呂吹た、大根は此地方の紅大根、味噌は粉味噌だらう。

風呂吹や味噌の不足を訴ふべく

二 六

風呂吹の白さといづれ米の飯

立 耳

風呂吹の味噌に焚き火の埃かな

同

▲極めて迅速にやつて仕舞はなければ腹が冷えて大變なことになる、此から先きは厨に上るのが一難事だ、なか／＼新聞を持つて楊子をくはへてなどいふ氣樂な譯には參らぬ。

朝霜の島に野糞の寒さかな

二 六

▲手袋をはめては仕事が出来ぬ、注意をして手を濡らしてをらぬ様にはするが、最早胼で手の甲は割れて仕舞つた。

靴磨く燈火寒し土間の隅

桂 州

▲楊柳の冬木立がまばらに、低い家屋が二三十戸、遠望の景は四方ともこれつきりだ。

寒月や宿舍訪ひ寄る使者一騎

蘇 南

寒月や味噌醬光る軒の下

同

寒月や喪家の犬の影瘦せて

桂 州

寒月や閉ぢたる窓の玻璃越

同

▲第一線の兵士は土中に、後方のものは炕の上に、いづれも毛衣一枚を頼みだ、窮乏な軍服脱げば寒いので、其儘に海老の様になつて寝る。

凱旋や蒲團に足を伸すべく

清 牛

毛布着て早寝の人のいびきかな

桂 州

▲蠟燭は溢りに消費する譯には行かぬ、手紙書くにも書籍讀むにも燈火の心配が第一だ。

のぞき込む新聞くらし夜寒の灯

桂 州

彈丸をぬく手術の刀や夜寒の灯

同

楮の火や六號文字の墨薄く

玄 耳

▲「北窓を塞ぐ」といふとは歳時記で見なければ、吾等暖國のものにはあまり感じがなかつた、此處では針ほどの穴も北側には打捨ておかれぬ。

泥厚く塗り塞ぎけり北の窓

清 牛

▲朝は零下七八度、午が零度左右といふのにまだ蠅が居る、十度にも昇る日にはうるさくほど日和の窓にたかつて来る

温床や新聞を這ふ冬の蠅

蘇 南

# 鬼の陽殿



奉 三 軍 徒

(0-2)

送 別

揃ひ行く夜振り頼母し留守心

遺言の二六子へ一句聞かうぞほととさす

決心の蘇南子へ眼玉光るや墓

薫風が桂州子へくしさを太刀姿

涼しがろ認識表に辭世の句

鬼とならば夏雲の上にあらはれよ

弄痴子へ

羨別の言葉少々に明け易さ

ぬけいて、聞かれず蟬の殺氣焰

ふりためず太刀風かをとる別れの日

迂 卷

# 戦場の兎

(三十八年三月奉天會戰)

## (一)

驢馬を驅れば半日程、殆ど眼前に奉天城を望みながら、敵と對峙したまふ、此處に既に半露、柳が大分勝らんたとか、翻れ麥が芽を吹いて居たとかいふ噂が聞える、成程池の水の凍ける日もある、室内で手拭の乾く時もある、さては早、滯陣の日も長くはあるまいと思つて居ると、或日の事果然の命令「出發用意！」

やれさて進軍、いよ／＼奉天見物が出来る哩。荷作は手速く出来た、各自の服装、携帶品は成規の通りだが、成規の外に若干の道具がある、鍋釜代用の洗面器、藥鏡、自辨の糧食品、葛粉、煉乳、砂糖、白菜、酒、酢、醬油の類や、烟草、木炭外に寝具として支那服の裏が一枚、是等は大行李に托する事が出来ぬばかりでなく、手近かに置かなければ當てにならないのである。馬慶吉といふのは余が苦力、少し抜けては居るが力は可なりにありさうな奴、前進のお供をするといふから、右雜品の運搬をさせる事に定めておつた。



柳で編んだ大きな鶏籠二つに容れ込んで、擔ぎ棒は門前の柳の枝を伐つて置いた、うねくねとした二間許の奴、試みに掻き見て見ると可なりに重いが、まあ大抵好からう。

「兎は如何するか」と突然一人が叫ぶと、一同「さうだ……」と言つたきり、何分荷物が重たいから直ぐに、連れて行かうと言ふ者もない、「どう為やうかな」と叫びながら一人が箱の戸を外した。

土間に飛び出した兎は、ヒョコ／＼と例の通り跳ね廻つては、時々後足で立つてお招きの姿勢、口笛を吹くと那方から喚ばれるのかと長い耳を揺かして圓い眼をキョロつかせながら、四邊を見まはして居る、相變らず可愛い奴だ。

全身黒毛に髻の方が少し許り白い、「三日月」と名を命けて此半歳の冬營中飼ひ馴らしたる家兎である、貰つた時は纒と乳離れをした許りで掌に載る位であつたが、今は一匹前に成長して、麻の實の様であつた莖も木燗子ほどになつて来た、何處か好い聲はあまるまいか、匹偶にして遣りたいものだと思はせて見た事もあつた。

「連れて行かれぬかな」「怎麼かして連れて行かうぢやありませんか」「遣して置いたつて

こんな可愛い奴、誰か又飼つて呉れるに違ひない」「なアに、直ぐ締めて刺いで食つて仕舞はれるさ、二台子では狎の兒さへやつて居たぢやないか。

十里足らずで奉天だ。まさか一日では行くまいから少し重かつた處で擔がれぬ事はあまるまい、兎も角伴れて行かうと決する。枕の藁を引出して其中に一壺の白菜と共に兎を入れた。苦力は頗る不平な顔をして、籠を擔いで試る。

用意はスツカリ整うた、出發の命令今か／＼と待つ中に日が暮れる、前日來の戦鬨は益々激しくなつたらしい、我前面は勿論右左數十里に亘つて硝煙空を捲ひ、砲火眼を眩するばかり。

今夜は此處に此儘、夜を徹するといふ命令が出た、我等は靴を脱いでまた炕の上に横はる、兎は袋から出して箱の中の藁床に寝せてやる。

翌朝、未明より又出發の用意、兎は袋に。

友人の山郎子等から追送品が来た、重い、何だらう、開けて見ると二斤入りの朝鮮餚が十箱、嬉しいには嬉しいが、さて此を持つて行くのが一難事である。

早速友人にお裾分けをして残つたのが三箱で六斤、擔ひ籠に入れると、苦力の顔色ますます麗はしくない。

左翼軍は既に奉天の背後に出たと言ふ風聞が立つてから、若干時を経て、或夜、前方一帶處々に火が起つた、さては我正面の敵も退却と見えるぞ、明日はいよいよ吾々も奉天で服脱いで休まれるぞと勇み合つた翌日三月九日果して前進。

そら出發と立ち上る。門前に用意してある馬は、駈け過ぐる他の馬を見て頻りと嘶く。都内みな路傍に集合する、苦力は彫れ顔をしながら、よぼよぼと門を出て来る、そんなに重いかと見れば、大きな包みが一つ殖えて居る、何かと尋ねると、彼れが寝具や携帶品、あゝ其は全く豫算に入れて無かつた。柳の柄は撓んで居る、儘に百斤を越えて居るのである。

「逃げは仕舞いか、苦力が「大丈夫、給金が二十日分許り故と拂つて無いのだから。」

(二)

十四五町前進して停止した所が拉木屯、六ヶ月の間敵と對して我健兒等の容住ひして居つた所。とある害を窺つて見ると六疊許りの薄暗い室四方自然の土壁に幾個も穴があるのは押入れにも棚にも使はれたのであらう、四五個の空籠が載つて居る。真中に大きな爐が掘つてある、燃え盡した木炭の白い灰が、ソックリ其儘に原形を存して居る、寒い、永い永い冬の夜を寝られぬまゝに此爐を圍んで如何な話をして居たであらうか。此鬼の岩屋の様な處にも故郷のなつかしい人、可愛い人は、劍の山よりも危険い、小銃丸、重砲彈の中を潜つて、每晚毎晩夢に通つて來たのではあるまいか。

二三の封筒や新聞紙の屑が散らばつて居るばかりで、立つ鳥の跡も濁さず前進した此室の兵士共、今は前面に激戦の最真中である。

少しく進んで沙河を渡る、堅氷に閉ぢられてある、中筋に一條の鐵條網が張つてある、河岸を登れば疎らな木立の芝生、將軍以下此處に停止して居られる。

馬を繋いで置いて、五洲子と二人其處等を見廻る。敵が昨日まで居つた墨壁は、ツヒ眼の前、双方の鹿岩は一町とは離れて居まい、中間の高梁は去秋實つたまゝに枯れ盡して、風

に戦いで居る。此處に彼處に黒いものが走り廻つて居るのは厭だ、居民は皆逃げて仕舞つて歸るに家は無い、北に走れば露兵に打たれ南に往けば日軍に追はれる、據なく中間の高梁島に此一冬、食ひたい糞も食はずにさぞ辛かつたらう。

一夜に三百萬發も打つたこともあるといふ、少くとも千發や萬發打たなかつた晩はあるまい。此邊一面に敵の大小銃砲の彈が落ち散ばつて風の後の椎の木蔭と一般、恐しく裂けはぢけたのもあれば全形のまゝのもある、文鎮に好からう、花瓶に爲れると拾つても見たが、重いので皆捨てる。

凹い砂地に降りかけると、大きな握り拳が生へて居る、敵の屍體だ。此處に埋められる位なら、斥候か何かで大膽にも單身深く敵地に入つた来た勇士に違ひない、併し彼の膽勇なる行爲は草一本の肥料とも爲らず、空く此砂原に埋れて仕舞ふのである。

元の芝生に歸る、苦力が今漸く着した處、馬卒は早速荷籠の中から例の袋を取り出して口を開ける、引出された兎はキョト〜と物法した眼つき、芝生に放しても逃げやうとは爲ない。予は咬つて居た堅パンを遣る。水筒の水を飲ませる、苦力は盛んに他の苦力の運搬

量を例證として負擔の過重を訴へる。無理からぬ事だから今一人履はうと、探がしに違つたが、まだ村の者は歸つて來ないので一人も見付からない「兎を捨てやう奉天には澤山居ります」と片語交りに申出るので、次の村に行つたら、人が居らうから履つて荷物を分け

てやると和めて置く。  
午後又前進、四里許り。

敵の防禦陣地を通過した、對峙中我と同じ日數間に仕上げたのであらうが、工事の様は迎も比較にならぬ、鐵條網の如き前後十重二十重、上下幾段にも引張り廻して到底、切断も踏越も出來さうに見えない、軀體の深さ、胸壁の厚さ、而かも其手際の好さ、實に驚くの外は無いが、是れで守り切れぬとは又た更に驚くの外ない。

夜九時まで或る路傍で風に暴された末、宿舎に入つた、露兵の住つた跡で、日本人なら土間に直ぐ爐を切るのだが、彼等は煙瓦を積んでストーブを作つて居る、壁には四五枚の美人繪を貼つてある。

急務は湯沸しと、飯炊きだが、土人が居ないから井戸の在所が判らない、黑暗に探がし

つて從卒が藥籠に汲んで来た。湯丈は吾等の處で沸かし始める。露軍の殘して置いた暖爐用の薪があるのを採つて来て土間で焚き付けたが、煙つてく仕方が無い。苦力ツ、木炭を拿つて来い、木炭くと呼ぶけれども、一向に返事を爲さない。焦立つて怒鳴り立てると漸々出ては来たが、悄然として居る。此奴へコタレたなと思つて、翌は奉天で御馳走をして與るなど一言二言慰めて、更に木炭を持つて来いといふ。倦れた切り黙つて居る。氣の早い馬卒は荷籠を探して居る様であつたが「有りません、打揃つたんです、横着者が」と叫ぶ。

「兎は居るか」と異口同音、誰も早速の懸念であつたと見える。「二日月は居ります」と言ひつゝ、やがて抱いて来て土間に放した、焚火の光りに恐れるのか兎は隅の方に蹲まつて動かない、小さい眼が二つ並んで火映りに輝く。白菜の二莖を取出して、二葉三葉を兎に、殘は鐘詰牛とこたく煮のお副。茶を入れる、酒を燗する、餓しい腹に軟かい炊き立て飯、したゝかに參つて窓の障子もないう室に、寒風の吹き通すのも平氣なもの。

(三)

三月九日、未明に起きて出發の用意。今日こそは奉天に入るならんとの期望に人皆勇む。障子のない窓から外を眺むれば、白み渡る窓に殘の星が三つ二つ、好天氣らしい。兎を例の袋に收めて、さて勢力を面前に喚び來らしめて申渡す。

昨日の木炭の様に無斷で荷物を抛擲する事があつたら、一品につき十棒づゝ吃はせる上には是迄の未拂賃銀は給れない、併し行進の模様により如何しても擔いで行くことが出来ない時は、第一に其方の私有品を捨てよ、第二に幕、酒、朝鮮鮫其外菓子類、第三に兎と余の寝衣、それだけ捨てたら擔がれぬ筈はない、併し萬一の時には米だけ持て荷籠も捨てて宜しい。判つたか貴様のガラクタより前に兎を捨てたら二十棒だぞ。

尙士人を見付け次第に雇ふべき事、首尾能く奉天まで總ての品を運んだら給銀の外に賞金を與ふべき事等をも言ひ聞かせた。

敵はまだ渾河の邊に居ると見え、砲銃聲が大分聞える、吾等は或處に集合したさりで一時

間経つても二時間経つても動かない。

十時頃から南風が吹き始めて沙塵を起して来た。時々刻々烈しくなる。午頃、急々出發した何處やら見當は付かぬ、全然去年の上陸前、海洋島附近で濃霧に遇うた時と一般、日は昇て居るけれども少しも所在は判らない。一陣又一陣、風の切れ目には沙塵も薄らぐので十町位の處まで見えるするが、颯と烈しく吹きまくる時は眼も口も開けては居られぬ、失伍ては大變だから裸に毛條ほどに臉を透して見ると、吾前に居るのが獸醫部長、其前の大きい馬が工兵隊副官、其前は主計の松原子らしい。ギンヤリと見える。四騎、五騎より前は全然沙塵に包まれて影も形も見えないのである。

「胡沙、獵々として人面を吹く、濃霧、相逢へとも相見ず」と昔の時に曰つたのは全くの事實たることを想ひ合せた。敵が何處に居るか、味方は何處に居るか、少くとも二十米以内接近しなければ辨じ難い、磁石を見ない限りは西も東も知れ様がないのである。此村に停止と聞いた時の嬉しさ、逸早く馬を飛び下りて門に入る、兎も角家の中に駆け込まうとすれば、唯だ堆かく瓦礫が散亂して居るのみ、壊しも壊したもの、有らゆる家屋よ

打崩されて、梁も柱も一寸の木片も残つて居ない、皆燃料に使つたのか防衛工事に用ゐたのか。

崩れ残りの土壁に接着いて風を避け、ハンケチに唾を濡して眼を拭けば可なりに大粒の砂も出て来る、痛い筈だ。

糞を見ても人間の色をした者はない、瀧頭髪の毛の穴に吹き込んだ砂、汗の上に積つたのは斑に黒く見える、眉や髪は白く黄色く何とも言へぬ凄惨な有様である。

傍の地上にベッタリと坐つて話しをして居るものがある。

「敵も大抵に逃げて呉れないと困る子、此んな事で鐵嶺あたりまで追撃を續けさせたら、此方がヘタバツて仕舞ふぞ、少しは追う者の身にもなつて、好加減に逃げて呉れ、好いに……」

「併し吾々は追ひ風で先づ好い中だ、若し敵が踏み止まつて戦はうとしたなら、南風を正面に到底眼は開けられまい、逃げるの外は無いさ。

「今夜は此處に宿營が知らん、大變だぞ、家は悉く壊されておまけに何も燃料はなし若し

歩哨が一切水は汲ひことはならぬと言ひます」と言ふ。致方がないので、或處から少しの水を分けて貰つて泥をハンケチで漉して、飯も炊き、湯も沸かした。兎を出し、朝鮮鮫を出し、ミルクを出させる、皆不足なしに荷籠の中にあつたので、大に苦力を賞して舌鼓を打つ。酒は揺りこぼれて一滴もない、空瓶を捨てさせる、鮫は皆食つて仕舞ふ、携帶口糧を食ふ筈のを、苦力に擔がせてあつた、兼て用意の食ひ餘し米を三食分炊かせる、荷籠の重量は又十四五斤を減ずることになつた。風は少し和んだが、寒が加つて来た、夜行軍かも知れぬとの噂、何時でも立たれる準備に靴も脱がずに横臥する、馬は鞍を置いたまゝ。渾河までは一里足らずださうな、河を挟んで戦つて居ると覺はしく、銃炮の爆撃手に取る如く聞える。

(四)

今日は我半世における好記念の一日。

此風が北に爲つて雪でも降つたら、莫斯科の二の舞だぞ。一時間も遅れて勢力の一隊が到着する、荷物に強風を受けるので、逆も歩行かれるものではない、併し流石に、三十棒と給金の没収は恐ろしいものか、何も捨てずに違つて来た、無論兎は無事であらうと出しては見なかつた。更に前進して、全行程が四里餘にもなつたらう、宿營に着いたのが日暮れ時、生憎我等の司令部よりも先に軍司令部が同じ村に泊るので、可なりの大村ではあるが、非常に窮屈な宿營割が出来た、予等は十数人に一室を得た。南北の窓を風が吹き通す、炕の上にアンペラもない、幸ひ近處に高粱稗が見付かつたので、それを敷く、馬に着けて居た毛布を南の窓に釘付けにして風を避け、予は成るだけ隅の方に堅つて坐る、前月來持病と爲つて居る腹痛が起つて来た、用意の懷爐を二つ腹に當て、湯の沸くのを待つてミルクを飲まうと思ふ。

「どうしても水は汲まれませんね」と従卒が歸つて来た、「馬鹿な、其んな事があるものか」「井戸の中に電話の何か器械を浸てあつたのを、水汲む者が其線を断つたとかで、井戸の

三月十日！昨日と異り、和風暖かに晴日輝く、早旦宿舎を立出で、一時間弱にして、渾河左岸の一村に達した、此處は家屋も壊されず、土民も落付いて居る様である。早速苦力を探す、三十餘の小柄な男を連れて來た、聞いて姓名を布片に記して上衣の領に縫付けさせる。兎と米と予が毛皮の寝衣と炊事道具とを奮の苦力に、其他を新苦力に分擔せしめる。村を出外れると直に渾河の渡渉點。小高い沙丘がある、登り立て見れば西の裏に彷彿として、奉天の城門が、一イニツ、三ツ四ツ五ツと、歴々指點せられる。半歳冬營の苦も、連日行軍の苦も、一時に拭ひ去られて、見ぬ戀にあこがれた意中の人に、ゆぐりなくも面合せた様。

「やア、上流に友軍が涉つて居る、第一軍だらう。」

「ほら、對岸に。あれ〜、前進する。」

「下手の方のは我隊の兵だらう。氷はまだ大丈夫だ。」

「少ツとも銃聲がせぬぢやないか餘程遠くに敵は往つて仕舞つたんだ、相變らず、退却の名將？」

我等の渡河には未だ多少の時間が有るといふので、沙上に團座して朝餉を食ひ掛かる。綺麗な沙原で、夏になつても多分草も生へなからうと思はれる。處々に散落せる小銃彈は味方のだ、昨夜あたり河を挟んで戦つたのであらう。

上下數十里、見ゆる限りの流域は我軍を以て滿ざれてゐる。三竿高く差し昇つた日は、うらうらと河上の氷を照して反射する。實に予が曾て見得ざりし所の雄大の景、壯快の觀である。

飯盒の蓋を取れば、飯の色が薄鼠色。昨夜の水が悪かつたと見える、ハンケチで濾したにも拘らず無数の埃も雜つて居る、見た上は食ふ氣になれないので、堅パンを少し咬つて、水筒の冷茶に咽喉を濕めず、程なく渡河の命下る。

予は馬を離れて、單身渾河の岸に下り立つた。處々氷の融けた處に、土人の門扉らしい板が渡してある、河幅十餘町に過ぐる此の流れ、幾處が深い淵も有らう、萬一氷を踏み抜いたらと思へば、無上に恐ろしくもなる、併し吾前に幾多の人々が渡りつゝある、上流にも下流にも怪我は無の様だから先づは大丈夫と自ら慰める。

鴨綠江の水に飲ふことすら、古來幾多の志士の翼望として吟詠に上つたのであるを、今日唯今此の滿洲の真中に來て、渾河の水を踏破するとは何たる好い果報ぞ、いでや後日の話し種に水を一つ囁んで試やうかとの好奇心。底の砂の見える極めて浅い處に立止り、劔の鋒で突き壞す、さて取り上げたる玲瓏の一塊、ガリガリとやれば別に何の異りも無い氷の味、絶冷舌を刺すばかり、父君が在したらば、母君が在したらば、誇りがに告げても遣らうものを、三十面下げて昔ながらの腕白を笑はれても見やうものをと、際だつた事に出會ふと常も、親のないのに張合ひが脱けて何事もつまらなくなつて仕舞ふ。

右岸に達する、岸に沿うて一連の蘆葦がある。夥しい彈藥、食器、水筒、靴、帽子、外套、其外種々雑多の物が散亂して居る、餘ッ程周章して、敵は退却した模様。處々に型付き更紗の襦袢が脱ぎ棄てゝある、血が染んで居る、併し此邊に委棄したる敵の屍骸は一も見當らぬ。段々進むと、軍馬が放れて居る、豚が逃げ廻る、犬が頻りと吠え立てる。

著しく目に立つのは、樹木が多くなつて來たのである、沙河より渾河まで一帶の地方は、彼我冬營の燃料に伐り盡されたからでもあらうが、一村に五六本もあれば樹が多いと眺め

た位であつたに、渾河を越したら別天地、到る處に蒼鬱たる森林が展望を妨げる、何んたか是迄の滿洲とは勝手が違ふ様。

前方の森の梢に聳えて居るは奉天城、蜿蜒數里の遠きに亘つて居る、黒い城樓の中部が白く見え透くのは、扉がないのだといふことまで判然と知れる。前に一歩づつ近づくと思ふ中、何時の間にか我等の進路は東北に轉じたさうな、幾程もなく奉天を左に望む様になつて來た、俄に停止！

敵に追付いたと覺ばしく、彼此か判らぬが、盛んに砲を打ち始めた。

予は一民家に立寄つて白湯を求めると、居合せた家人は恐みて大釜の下を焚きつける近く銃聲も起つて來た、いまゝ敵に接着したに相違ない、同時に砲聲も益々劇しくなつて來た。

湯が煮え立つた、鞍囊の茶を取出し、水香の中に浮かして一口二口飲んで居る中に、パン、パン、屋棟を掠むる砲彈の爆聲。敵の齊射だ。

家の前で騒がしい人聲がする、窓から覗いて見ると一頭の支那馬が門前に倒れて其わたり



は血塗れ、一人の老爺を圍んで七八人の土民が土塚の根に寄り添ってチーバー／＼喧しく囁

り立てゝ居る。今此處に馬を牽いて道入らうとする處に砲彈が破裂したのだ。  
二三十分間で、砲聲が止む、敵は又退却したと見える、併し斯う近くなつては到底今の砲

も我捕獲を免れまい、せめて十門許も有つて呉れれば善いが。  
又前進の令！

「鐵嶺行きた相だ、これから二十里近くもゐるぞ」

「本當か、其奴は大變だ、今日翌に足を磨り滅して仕舞つては豫備品がないから補充に困

るぞ、せめて今夜は奉天泊り、ドンドとお湯の沸いてる處でも有るかと思つたに。  
「新參だから君はそんな夢を見るのだ、城内に宿營するといふ事は上陸以來決して無い事

だ。  
「やれ／＼、せめては城外にでも、近所に……」

目標は前方の松林だとの事。つひ其處に見えて居るので予は悠々茶を啜つて、扱淺主計  
と二騎、畑地を横ぎつて乗り出した。千米突餘も進んだ頃、又もや敵が砲撃を始めた、し

かも例もの急射撃、松林までは尙ほ千餘米突、間は全くの平地で逃げ先も躲れ先もあらば  
こそ、砲彈は會釋もなく前後左右に、或は空で開く、或は土煙を打揚げる。

右に遠廻りをしやうと思ふ中、パアンと間近く開いた一發に、馬が驚いて亂跑する。敵陣

に飛び込まれては一大事とあせるけれども、馬はたゞ馬、騎手は無類の拙手なれば、何様

にも斯様にも始末がつかぬ、今は砲彈よりも馬の方が切迫の危険、どうか落ちるなら砂の

上にと祈り乍ら一所懸命、手綱を操り身を捻り、漸う／＼の事に馬上安全目標の地に乗り

付けた。  
汗を拭ふ間もなく、更に前進。司令部の旗は前方の丘上に飄つて居る、追ひ／＼に徒歩の

連中も喘ぎ／＼追付いて丘の麓の枯れ芝に坐を占める。荷物が軽くなつて居るので苦力も

格別遅れずに遣つて來た。袋の兎に堅パンの缺けを入れてやる、前進又前進で少しの落付

く間もなく、此模様では何時又直に出發するかも知れぬので、兎を出しても見ないのであ

つた。  
軍役夫の田中某、彼は淨瑠璃が上手、本姓よりは三代太夫と、藝名の方が善く知られて居



接迫して近きは吾等と七八町、弦月形の線を作つて包圍の形。シュックと敵の銃弾が丘の上に来始める、石に當てカーンと響き、芝生に落ちて土を颯げる。吾等は丘上の煉瓦壁内に據り、纔に頭部を露はしながら成行きを氣遣つて居る。

刻一刻に近づく敵、路を塞げる吾歩兵と四五十間に密接した。今に白兵戦が始まるぞと手に汗を握つて居る中、敵の兩三騎——將校と覺ばしさが、隊を離れて陣頭に乗り出した。奇怪の振舞を爲すものかな、まさかには、鎧踏ん張り大音聲、抑もくは是れはヒュードロスの五代の孫、陸軍中佐マケスキーとは吾事なりと、名乗を揚げて居るのもあるまい、兎もあれ不思議の事共と、見てある間に吾線よりも徒歩の將校らしさが列を出で、出向つた、敵の將校は馬を下りて相對した、やゝ暫し、切り合ひも始まらねば打合ひもせぬ、何か話をして居る模様である。

は、あ、降参だなど想つて居ると、程なく報告が來た果然々々。一里に亘る大部隊を擧つて投降せんと申込なりとの事、氣早の連中は愉快と呼び萬歳を呼びて躍らん許。直捷部隊と通譯の七八人が命を受けて丘を下つて行く、司令部に屬する歩騎兵は悉く銃を執つて

不虞を警める、併し此れは極めて僅少の銃數で司令部内の多數は各自一口の劍を帯びるのみである。

伊房の收容は開始せられた、先づ武器を棄てしめ、指定の地に集合せしめるが普通の順序、多分其取計ひを爲て居るのであらう。ぞろ／＼と敵は皆此小丘に向つて群集する恰も一基の磁石に鐵屑が吸寄せられる様。

今、集りつゝある者のみにても三千や五千では無い、まだ續々城門から出て來るに違ひない。野戦に於て斯かる大數の投降を獲るとは未聞の快事、而も此丘上に立ちて全幅の光景を眼下に瞰る事を得るは何等の愉快ぞ。

屈めて居た腰を伸ばし上半身を煉瓦壁上に露はして四方に歡喜の眼を放つて見ると、夕霞は何時か奉天城を包み畢つた、吹き來る風の冷たさに上衣の襟を引立て、居る折柄、俄然丘下になる大喧嘩續いて響く小銃の音其の途端、逆襲！と絶叫して駈上つて來る若干の味方。仕舞つた、たばかられた、降服と見せて逆襲とはさても汚なき奴原かな、去りとは茲に一年の武効は水泡に歸して我兵團の名譽も今日限りかと、刹那に込み上げる無量の慄み

に打たれながら、地物に據らんと引き退がる。  
 咄嗟、應變の指揮は誰であつたか知らぬが、幕僚の一喝に戦闘員は前に出る。  
 空を切つて来る銃弾が悉く吾頭に集中するかの様に感ぜられる、ヒタ走りに走り出したが、  
 百米突と行かぬ中に、最う呼吸が迫つて一歩も歩かれぬ。羨ましい、某に某はトットと吾  
 を通り越して先に行つて仕舞ふ。  
 仕方が無さに立止まつて見ると敵の委棄して去つた麥粉の俵が散亂して居る。是幸ひと之  
 を楯にベツタリと打坐つて喘ぎ、呼吸を休め、水筒に口を着けて見たが生憎一滴も無い。  
 纒か二分か三分の間、無限の問題は腦を衝いて吾れ先きに考量を求めて来る、妻子の行末、  
 年來の志望、我が兵團の名譽、此の戦役の結果曰く何に、曰く何に……兎に角、死にたく  
 無いが扱手百倍の大敵を受けては活路は無い、到底助からぬのだ、斯う爲つて見ると親の  
 無いのが結局幾分の仕合せの様に感ぜられる。  
 今少し遠くに行つて見やうか、併し吾脚では五町とは走られぬ、直様敵に追付かれるは定  
 の事、此處に獨り居た處で仕方がない、何と爲様と考へながら、豫ねて稍走を防ぐ爲の縛

つてあつた佩劍の紐を解く、あゝ情ない、が捕虜に爲るより腹を切らう。  
 銃聲は益劇しい。日は暮れかゝる。此處で流丸に當つて、獨りで大死をするのは愚の極だ、  
 と考へつゝ、頭を擡げて見廻すと、ツヒ近處に一中隊許りの歩兵が、島の畦に據つて伏し  
 て居る。さうだ、彼の中に雜つて遣らうと分別を定め、屈める丈、腰を屈めて行く中にも飛  
 丸身を掠めて幾度か臍を冷やす、漸く辿り着いて見れば、地面に伏して折り重つて射撃を  
 して居る歩兵、予は其間に夾つて板に爲れ紙になれと體を平たくして匍匐ふ。  
 啾啾たる喇叭が鳴り渡る、「打ち方止め」だ！と右の方五六間に伏して居た、一將校が怒鳴  
 る。頭を揚げて舊位置の方を窺へば略ぼ銃聲が収まつた、はてな、逆襲では無かつたかな、  
 何かの間違で一時打合つたまでかな、左様だらう其れに違ひない、我司令部にこそ兵力は  
 無いが、右の丘にも左の山にもあの通り、無数の味方が居るのだもの、如何に死物狂とは  
 言へ、逆襲が出来るものではない、矢張り降参に相違ないのだ、と思ふ中、そら来た、敵  
 が、右の方にと怒鳴る者がある。成程五六十の露兵が何か奇聲を發して遣つて来る。併し  
 三々五々ブツリと手を振つて、何も武器は携へて居ない、打てと予が横の兵が首

ふ。遣れ〜と背後の兵が和する。二三發響く。「打つな、止めエ、打方止めが鳴つたちや無いか」と、予は生意氣に左右を制して居る、程なく再び喇叭が響いた。

(六)

最早大丈夫と土打拂つて立あがる。手袋が二雙共に無い。何様非戦闘員で高等司令部内に居るのだと安心し切つて居たのだから、二三十乃至百米突以内から小銃弾を喰はうとは夢にも想はなかつたのに今日の珍事、是迄數回の戦場を経て大分砲弾には馴れて「瘦せては居るが」と心の内、死生岸頭多少の負ひ所有る積つたのが、いや早や先刻のあの始末。日は既に全く暮れた。丘の上は捕虜の收容で大混雜、何處に誰れが居るやら、闇を縫うて探し廻る中に、此處に一人彼處に二人負傷者がある。一々に透かして見るのも、若しやとおもふ懸念である。幸ひ我部下には一人の怪我も無く皆一と處に集まつた。他部の人も追々に落合うた。さて彼れ一句、此れ一句、互に無事を祝して、將軍以下知つた限り親しい限りの人々の安否を問ひ交はす。通譯の二人が重傷を負うた外、將校に死傷の無い事は

確かの様だ、某々大尉某軍曹など若干の武勇談は即坐に傳唱せらる。

「三代木夫が遣られたさうだ」

ふむ、本當か、死んだのか、如何して遣られたのかと尋ねて見ても、委しい事實は解らぬが、現に死骸を見て來たと言ふものがある、死んだに違ひは無い。哀れは誰も同じ事だが三時間とは経たぬ、つひ今先の事、其處の芝生で大鼓を叩いて喜び勇んで居た者がと思へば、坐ろに戦場の果なさが感ぜられるのである。

落ちついて來ると思ひ出す事が多い、時に苦力はと探して見るに居ない、遣られたかな。外の苦力も皆居ない、一處に逃げたのであらう、荷物は如何したらう。兎は？……………

丘の下、今日の晝、通つて來た松林に露營する事となつた。闇やみに又千米突許り、まだ降伏しない敗殘の敵兵が鳥聲ついて居る中を通らねばならぬ。相呼び相答へて聲をしろ、見失はぬ様に要心して無難に行き着いた。不合せな人は此間で敵にぶつ付かつた者もあつかといふ。

風が吹き出した。寒い〜。或る土塚の隅に南瓜棚の様な處を見付けて、此處を我等が露

營の地と定め、生松葉を燃いて其周圍に圍坐した、敏捷な從卒が逸早くも水を求めて來るので茶も飲み、暖かい飯も食ふ事が出來た。

我等と少し離れて、一團の兵士が焚火にあたり乍ら高談し。  
『お、寒い、馬鹿に又た風が吹くぢや無いかお、寒い、一體何時まで戦争が續くんだらうかね、今日の捕虜ばかりだつて一萬人も有るといふせ明日明後日に爲つたら何萬に爲るか知れない、厄介な者だ、彼奴等、戦争したつて敵はないもんだから、降参して日本を困らせ様といふ計略かも知れないせ、狡猾のだからな、露助は、油断は爲らない、今日の様に。』

『さうだ、併しもう手並は判つたんだから、下らねエ客な事腹すが好いちやないか、乃公が黒鳩公なら一番男らしく出て「到底敵ひません、閉口しました」と、謝罪つて仕舞ふね、左様すれや此方だつて男だ、日本だ、其處ンところは又た何とか宜しくやつてネ、向ふの顔も立て、遣らうと言ふもんだネ。』

『解らない奴に遇つちや往生だ、寒い、滅法に寒い、こんな事して愚圖々々何年も經つ内には、歸つた時には誰も彼も疾の昔嫁入りして仕舞つて、此方其の妻に爲るものは残つては居ないせ。』

『フン氣に懸る奴が居ると見えるネ、なわに其の中にや後の奴がどん／＼成長なつてゐるんだから心配する事は無いさ、慢々的。』

ひよろりと一人の苦力が尋ねて來た。今朝履つた新苦力はどうしたかと問へば、彼れは荷物を措いて逃げた、二人前共自分が擔いで來たと手真似話をした末に、

『私し好人あります銀票、澤山、進上宜しい』と片語雜りで論功行賞の申立を爲しつゝ、荷籠を掻い探つて例の袋から、焚き火の傍に取り出した一物。

『お、兎も無事であつた!!』



# 行軍



雄 規 袖 筆  
 刀 後 中 舌  
 三 山 詩 縱  
 尺 河 句 橫  
 非 花 燭 好  
 君 寂 前 法  
 事 々 看 官  
 十 亂 馬 從  
 七 中 上 軍  
 字 臺 琵琶 萬  
 由 榭 瑟 里  
 來 雨 月 跨  
 獨 酸 下 征  
 壇 々 彈 鞍

送玄耳判官  
田尻馬城

行 軍 (鐵嶺附近) (三十八年五月)

(一) 半夜の回想

▲明日は早天の出發、又北進だ。

▲選り取り店の様だと、経理部長に評せられた吾が室も、今夜は清楚と爲つた。引き散らけた雑物は、悉く行李に納めて管理部に交して完つたので、机の上に些の文房具と、座邊に空氣枕、毛布、敷革などの二三點が有る許り。

夜半過ぎたらしい、二本目の洋蠟が最早二寸許りしか無い。何んとなく陰氣だ、朦朧と壁の書が見える、上方の美人書は先日奉天城外で敵の遺棄して去つたロシヤ雑誌の切り抜きで、下の方のは「日本」新聞の附録に出た上野、向島の花見の寫真である。短冊詩箋の類は針留めにして置いたので。剩さず取り外づしが出来たが、糊貼のは巧く剝がれない、此儘置き土産にする積り。

此家を去つたら數日の間、到底碌な處に寝ることは出来まい、いづれ塵埃に埋まつて夜を



明かすが關の山、事に依つたら露營だ、今夜は寛くり足を伸ばして寝ておかう。徐に空氣枕を吹き膨らして、さて横に爲つたが、どうしたか更に睡られない。いつしか妄想の雲に駕つた、東往き西去き漂ふうち不圖吾家に想ひ到つた——太郎！雪子！まだ、お伽話を強求つて居るか知ら……否、疾ッくの昔し眠つて仕舞つて、優しい、安らかな、和かな、小さい餅でもかいて居るで有らう。明午橋の上は未だ人力車が絶えまい、眼敏い細君は橋板の響に寢返を打つて居るであらう。隔壁の阿呆鶏はもう二三度ぐらゐ晨を告ぐつた頃……

満洲の夜中ほど静寂なものは有るまい、此間迄は、犬の聲なり聞えたが、狂犬病の噂が起つてから狩盡されたと見えて、其も聞かない。時計の音が著しく耳に徹へる。何時だ、五分前だ、もう一時に爲るかナ。回想すれば此の時計も舊いものだ、憲法發布の歳だつた、九州の盡頭から遙々の上京。幾度か脱走を企て、望みを遂げなかつたのに、此度こそは公々然雙親の許諾を得たのだから嬉しさが堪まらぬ、大手を振つて郷里を出た。村境の岡を越えたのが恰好ほのぼの空、朝霧の中に數郷の人家草樹を瞰下した時、思つた事がある、

他日志を得ば、宜しく此に乃公の別業を興すべきなりと、差し昇る朝暾に對つて例の月性が出關の詩を放吟したのである。十日餘り、三百餘里、汽船も乗つた、汽車も乗つた、大阪も見た、京都も見た、幾多古今盛衰の跡をも觀盡して、やがて、人材の冀北、花の都に乗込んだ、少年の銳氣當る可からず、青春の空想燃ゆるばかり、王侯將相豈有種を行住坐臥のお題目。白金巾の大幅一丈堆く腰の邊に捲き付けて蟠龍の氣を示し、膝ツ切の短袴は江湖の波濤も徒涉りにせん勢ひ、慮外を働く奴があつたら千金の身も何に惜まん「擲うてやらう」「當て呉れう」と鷹眼鏡く身構へて五十稻荷に散歩の歸り、撞き當つた廿四五歳の町人「來りや烏漢」と露出しの地方語に尤め立つれば、手答へも無く平謝りに頭を下げるので恕して遣つたが、下宿に歸つて見ると、頸から懸けた小遣ひ入の財布も、帯にくるんだ時計も見えない、切齒をしても追ッ付かない、同室の者に嗤はれるが無念さに堅く秘して置いた、が毎日の昇校に不便を感ずるので、叔父が餞別の金十圓、非常準備として貯金にしてあつたのを引出して、小川町の時計店で、鎖磁石共に九圓何十錢で買つたのが此時計、今に既に十五六年、保てれば保てるものだ。併し又此後幾年此時計を有つとやら、

月賦拂で金時計を買ふ迄の役人氣質に爲り了れぬ間は、道簡と離れるとは難しい、多分は  
征露紀念など、負客みな美名の下に我終生を共にするであらう。

(二) 宿舍の別離

▲午前五時覺眠、朝餉の準備が既に整うて居る。

▲机の上の品を片付ける。

一、筆、紙、墨、葉書、巻紙、封筒、日清會話字典(以上は腰の小革靴に収める)

二、小燭臺、茶碗、水砂糖、茶(以上は苦力の荷物に加へる)

三、時計、マッチ、烟草、箸、水香、手帳、小刀、征露丸、清心丹(以上はポケットに入る)

尙ほ此外机の上に紅い詩箋があるのは、昨夜此村の秀才達が、出發の時を聞いて、お別れ  
に来て作つた詩だ、

結得三生翰墨緣、論文談道數十天、偶然臨別情難訴、此後相逢有幾年。  
作詩飲酒在三春、中外雖殊意氣親、今宵作別心多悵、他日相逢即故人。」

黯然魂消惟一別、此心如割勉作詩、幽情苦緒筆杯抱、最是初更相對時。」

此んな滅茶詩が九首ほどある尙ほ「臨別の餘、愁緒紛々として詩に工なる能はず、笑ふ真  
んば幸甚し」意亂れ心悲しみて詩を作るとを厭ふ「歸來の日務めて迂道此村を過ぐる  
を要す、弟等團聚十數日にして此心方に慰せん耳」などの文句もある、終に「日本官、伴  
多、清國官、俸少、所以不能廉」とあるのは、彼等が例に依つて吾が俸錢を問うた時、二  
十割増しに答へて遣つたので、其厚俸に驚いて如是な文句を書いたのである。

▲宿舍の主人の李文蘭、鶏蛋糕子一函を餞別に持つて来る。

▲七時いよゝ出發、家人皆出で、送る、豫て籠り勝なる婦女共まで皆門の外に出た歸途  
には是非立寄つて呉れといふ。

(三) 遼北の春色、女子の教科書

▲取調物が有つて十日許り宿舍の門外に出なかつたが、今朝郊外の集合地に出て見ると、  
實に愉快、草が生えて居る。馬を飛び下りて其處等探し廻れば、茅が三寸にも伸て居る、

董の花が咲て居る。ペン草もある——日本で普通に見るのは少し葉の形が異つて、花の色も黄色だ、土筆も有る蒲公英もある、皆摘み取つて手帳に挟む。滿地一面に青んで居る處は、敵の馬繁き場でも有つたらう、翻れ麥が萌たのである。  
 乗馬用意の命が下る、間もなく乗馬の令が出て前運を始める。馬上遠く右の方を眺むれば一帯の連山は淺綠色、鐵の具合と日のさし方に由つて或は濃く或は淡い。左は曠漠たる平野、十町離れ、二十町隔て、遠く、近く、點々として無數の村落がある、村が有れば必ず木立がある、樹は皆楊柳。楡樹の類も見えるけれども、其は未だ芽も葉も發ないで、ガシガラの枯木。何にしる半歳の間青いものと言つては、稀有に松の樹を見た許り、野と言はず山と言はず滿眼總て黄土色で無いものは無かつたのに、今日意はずも此春色に接したのだから、胸中の歡喜は何とも譬へ様が無い、右を顧、左を眺て贊嘆の聲絶ゆるときなく、二里許を夢中に過て、とある村に停止した、十五分休憩との命令。  
 ▲白湯を求めやうと思つて、村の内に乗入る。一番大きな門を選んで立止まり「開々門」と喚び立つれば、火のつく様に犬の吠聲、裏面より其を叱しながら門を開ける、六十許りの老翁垢まみれの頸髯胸を被うて居る。犬は隅の方に居合ひ腰で、いざと言へば咬み懸らひ形勢。大きな孕み豚が地すれすれに乳房を引摺て逃る、其後から去年生れと覺しき子豚が十四匹許纏れ着いで走る。  
 家に入ると婦女子共は長い煙管と大きな枕とを右手左手に携へて奥の一間へ隠れ込まうと狼狽る、「不用害怕」と聲を和かに勧めつ、「暫く休息する許だ開水を給れ」と言へば、聊か安心したもの見え、奥から眞黒な土瓶を提げて來た。段々と馴て色々な質問が出る。「日本兵が此村に宿るか否か」第一で、子の姓、年齢、子女の數、兩親兄弟の有無戸口調査の巡査よりも精密に訊く、姓は源、名は平、字は藤橋、四十八歳、兒六女四、父母健在、兄弟十二人、各劍を把つて戰場に在り、と出鱈目に言つて聞かせると、年齢丈は流石に信じない、然らば估摸て見よと言へば、是は又酷い直切り様、廿四五だらうといふ、さうは減らぬ、原來不言二價と戯るれば、呵々として大笑。  
 此度は此方より身元調に掛る。彼れ曰く、賤姓は趙、字は王卿、壯年會て言と做つたが、早く退を告げて今は晴耕雨讀の人。當年五十六歳、男一人女五人あるが、男は五年前、露

董の花が咲て居る。ペン草もある——日本で普通に見るのは少し葉の形が異つて、花の色も黄色だ、土筆も有る蒲公英もある、皆摘み取つて手帳に挟む。滿地一面に青んで居る處は、敵の馬繁き場でも有つたらう、翻れ麥が萌たのである。  
 乗馬用意の命が下る、間もなく乗馬の令が出て前運を始める。馬上遠く右の方を眺むれば一帯の連山は淺綠色、鐵の具合と日のさし方に由つて或は濃く或は淡い。左は曠漠たる平野、十町離れ、二十町隔て、遠く、近く、點々として無數の村落がある、村が有れば必ず木立がある、樹は皆楊柳。楡樹の類も見えるけれども、其は未だ芽も葉も發ないで、ガシガラの枯木。何にしる半歳の間青いものと言つては、稀有に松の樹を見た許り、野と言はず山と言はず滿眼總て黄土色で無いものは無かつたのに、今日意はずも此春色に接したのだから、胸中の歡喜は何とも譬へ様が無い、右を顧、左を眺て贊嘆の聲絶ゆるときなく、二里許を夢中に過て、とある村に停止した、十五分休憩との命令。  
 ▲白湯を求めやうと思つて、村の内に乗入る。一番大きな門を選んで立止まり「開々門」と喚び立つれば、火のつく様に犬の吠聲、裏面より其を叱しながら門を開ける、六十許りの老翁垢まみれの頸髯胸を被うて居る。犬は隅の方に居合ひ腰で、いざと言へば咬み懸らひ形勢。大きな孕み豚が地すれすれに乳房を引摺て逃る、其後から去年生れと覺しき子豚が十四匹許纏れ着いで走る。  
 家に入ると婦女子共は長い煙管と大きな枕とを右手左手に携へて奥の一間へ隠れ込まうと狼狽る、「不用害怕」と聲を和かに勧めつ、「暫く休息する許だ開水を給れ」と言へば、聊か安心したもの見え、奥から眞黒な土瓶を提げて來た。段々と馴て色々な質問が出る。「日本兵が此村に宿るか否か」第一で、子の姓、年齢、子女の數、兩親兄弟の有無戸口調査の巡査よりも精密に訊く、姓は源、名は平、字は藤橋、四十八歳、兒六女四、父母健在、兄弟十二人、各劍を把つて戰場に在り、と出鱈目に言つて聞かせると、年齢丈は流石に信じない、然らば估摸て見よと言へば、是は又酷い直切り様、廿四五だらうといふ、さうは減らぬ、原來不言二價と戯るれば、呵々として大笑。  
 此度は此方より身元調に掛る。彼れ曰く、賤姓は趙、字は王卿、壯年會て言と做つたが、早く退を告げて今は晴耕雨讀の人。當年五十六歳、男一人女五人あるが、男は五年前、露

兵が始めて此地に來たとき、誤つて殺され、女は一人嫁いで、未歸の三人は奉天城内に難を避けさせた、今家に居るのは末女の十三に爲るのが一個だと言ひながら、奥の方を呼ぶと出て來た。半ば跪いて奇態な禮を行ふ。是が滿洲禮だ。膝を駢へて行ふのが女で、片膝を立て、折り敷きの構の様に行ふのが男の禮法、漢禮といふのは普通日本で見られる支那人の行り法で、物を抱く様な容で兩手を擧げるのである、滿洲では殆ど此の漢禮を見ることが無い。

支那の子供は十四三まで男女とも殆ど一樣の服装、唯目立つて異なる點は、女の子の靴には青、紅などの縫を施してあるのと、辮髪の端に紅緒を辨み雜てあるのとで、髪をわけて元服するまでは男女の鑑識は一寸附かない。

さて彼の小女に字を識つてゐるかと思ふと没念書と應へる。傍から親爺の晴耕雨讀先生が引き取つて曰ふ様、清國では女兒に讀書を課せぬが例なれども、此の子は學問が好きだから特に讀ませた。教科書？教科書は男兒と差ふ、幼學は女兒經——實は此れ一巻で十分である、列女傳まで讀めば此上なしとする、此の女は其れも終て了つたと稱々得意の語氣。

無理ならぬ次第である。兎に角十三の少女にしてはエライと申さねばならぬ、視れば目鼻立ち卑しからず、俊爽の氣は眉宇の間に溢れて居る、フツクリと肥つて身量も延びた方、其類邊から襟元の垢を剝がしたならば、底からは、微紅の肌膚も現はれ相、矢絰りの裕でも着せ今紫の袴でも穿かせたらば、天晴れの式部、幾多の角帽を擲殺する事であらう、其れとも彼の眼差では東洋のジャンダークに爲る奴かも知れない」とどうだ日本に遣つて女秀才、女進士と爲す氣は無いか」と言へば親爺は頭を揺つて「明後年は嫁らせる筈に爲つて居る」といふ。

列女傳は覗いた事もあるが、女兒經といへば聴きも知らぬ本だから、一見を求めた。親爺は言下に承諾して少女に指揮すると、少女は立上りさま、ナンと巧に手筈をかみながら次の室に行つて、間もなく一冊の本を携へて來た、手を伸ばして受取らうとすると、少女は之を避けて親爺に交す、成程男女親授せずとの禮であつたのだ。

女兒經一冊、九枚、四十七首の詩が載せてある、詩は皆四句づゝなれど、六七七七、七七七七、七七六六、七六七七の諸體に爲つて居る、衣食住、起居動作、應對接伴の事を始め

とし、古人貞烈の例まで擧げて、終りに「……女兒若依此經三行、便足聞女無價寶」と歌つてある。

挿繪は極めて幼稚なものである、右左の詩の句が實に面白い、何處の婦女も同じ事と見え、巧く急處を刺したものだ、勿し長舌はおシャベリの禁制。勿し爲爭競は誰某さんが紅寶石の指環を穿めて居らつしやるから、私には金剛石のを……」の競り氣を尤めたもの。勿し私財貨は臍線金を蓄めるな。勿し貴報應、「ささか此ンな物が獻げられますか」と亭主の懷裏に頼着なく附け届に虚勢を張るを誅め、斯様の一輩はやはり清國にも在るものと見える。

「張家の長、李家の短、人若し説ふ時我は管せず」此れが守られたら、井戸端會議は寂寥を告ぐべく「夜行は獨自にて行く可からず、須す了髮に提燈を執すべし」が勵行せられたなら、三面の艶種は一半の光彩を失ふに至らむ。

言近うして旨遠し。結構の本だと賞めちぎつて遂に十錢で譲り受けた、兎や角する間に休憩時間が経つて仕舞ふ。

▲門を出れば和風暖日、支那馬車の御者は奇聲を放つて何か陳粉漢な唄を唱ひながら、長い鞭を揺かして驛馬を操りつゝ、徐に前進を始める。午前十時、

(四) 佛頭、人骨、黄色鐵嶺富士、

▲北進するに随つて樹木が多い、禽鳥の聲も賑かになつて来た。

戦争の爲めに此地方の農事は時を失つて居る。今や彼我の接觸線は二十里餘も北方に遠ざかつて、此地方は最早安全な地區と爲つた。避難の村民もばつくと歸つて来る。牛、驢馬、騾、騾、混成の、二頭乃至四頭立ての車に家財をつみ、其上に女小供を載せて、ちらほら野良仕事をやつて居る、打つも鋤くも概ね驛馬や騾馬を使用して農夫はそれに騎して居る。畦の長さ一五町も八町も、堤か山かに行き窮るまでは唯一線。

如何にも大陸的だ。一枚の島の中で、一方は既に高粱や麥が二三寸青んで居る、中程にはせつせと種を播く、片方は今鋤き反す真最中。

▲二里弱にして小休止、午餉の命が出た。二三百戸もあるべき大村で、街道筋には十戸軒

りの商店もある。我兵の駐在した處と見えて、日本文の招牌、廣告、「支那人酒保」「砂糖  
 あります」「大安賣大勉強」などの常套字句もあれば「ドク優頭クサレ菓子あり」「此家の  
 チャンは横着だ物品購買の諸君はゲンコツを食はせ玉へ」「馬鹿に掛直を云ふから注意す  
 べし」など調戲に書いて給つたのを、真面目に貼り出して、聊かなりとも日本人の信用  
 を獲やうと、支那人の商略は感心な者、滑稽な者。  
 鎖したる大門の扉に貼紙をしてある。

此家の主人は我軍の爲め盡力せし者につき  
 特別注意して叩開又は出入を禁ず

ホノ〇〇ノダイタイ

物件の破毀を禁ず ダイサン大隊

處々の商家に「婦人室入るべからず」「婦人室につき立寄り又はノゾク事を禁ず」とある  
 のは、數戸の婦女子一箇所に集めて保護するのだ。如何なる小村にも、必ず廟がある。

神社佛閣なべて廟と稱せらる。關帝廟、武王廟、天后廟、神女廟、地藏廟、觀音廟、  
 などが最も多い。建築は大抵日本の佛寺の如くで、大きな處には僧侶又は道士が其傍に  
 住つて居る。此村のは財神廟と云つて、村外れの崖の上二町四方許り煉瓦壁をめぐらし  
 て、其中に一字の廟がある。煉瓦壁の瓦葺、内面方二尺。「四海春風」「財源茂盛」「大道生  
 財」「財神正位」等を紅唐紙に書して處々に貼つてある。柱も鴨居も金銀箔や丹碧の顔料  
 を用ひて奇麗に彩つてある。

裏面は狼藉の極、總ての物件が打壊わされてある。神像の首級が轉んで居る、曲眉豊頬  
 の白い顔、狼眼虎髯の黒い面、鼻の尖つたものや、口を開いたのや、踏みつぶされたの  
 もあれば、切り割かれたる者もある。神佛の像に對して我兵士は決して無禮を働くもの  
 はないから、此の亂暴は必ず偶像排斥の敵兵に因つて施された者と覺ぼしい。廟の前に  
 獅子が二座、共に鼻の頭がぐちゃぐちゃに崩壊れて居るは、石で蔽いた者の様。煉瓦壁の根  
 に幾處も火を焚いた跡、其處等一面、牛馬犬豚の骨が散亂して、菜屑、パン屑、鶏の羽も  
 大分見える、多分此處を炊事場に使つた者らしい。

圓い骨！、正しく是れ人頭だ。皮肉落ちて面貌は辨らぬが、其傍は白髪混りの一條の髮がある。確に土人の首に違ひはない。婦人の進獻を拒んだのか、或は日探の嫌疑で此處に屠られたのか。瘦せたる彼が腿の肉は、殘忍な露兵の鈍刀に削がれて晚飼のソツブにでもなつたらう。廟の後に足の踏み處もなく滿地の糞尿、食物の關係かも知らぬが、日本兵、露兵、土人と各、色澤が一樣でない、戦地に慣れると、一目黄色によりて其の人種が判る。此の處は褐色で浮石の様、即ち露兵のだ。少なく共數日此の廟に滞在せし事を證明する。

▲午後の行進路は山麓に沿うて居る。遼東の如き崔嵬たる丘峰は此地方にない。皆緩傾斜の草山、時々木を見る。忽ち二三騎馬をとばして駆け上る者あり、怪み問へば兎が出たとの事。「大呼する者あり、富士が見える」指さす方をのぞむと、なる程好く育た型の山だ、鐵嶺富士と名づけむと一致した。

珍らしい、獨立家屋が見える。日本ならば何も一軒家が珍らしくは無い。此の地方の民家は少なく共五六戸以上聚團して部落をなすが普通で、一村は多く姓を同うし、村名は

趙家屯、張家堡子、劉三家子など、姓を其まゝに用ひたのが有る。是れは支那人の同族間の親和を尊ぶ故にも因らうが、警察制度の不完全なので、自ら盜賊の防禦に當らなければならぬ必要より、一軒家を建てぬのでもあらう。

今、此の一軒家が日本でならば、差しつめ茶店だ。六十許りの婆さんが、眞黒な藥罐から澁茶を酌んで出すのだがと、一人空想を起し始めると、甲も乙も口々に「さうだ、店先きに駄菓子があつて！」餅の煮染と混成酒とがある筈だ「烟草もある」「ラムネが二三本桶の中につけてある、心太も一緒にあるよ」「僕は心太が大好きだ醬油より酢ばかりが好き」と話は段々實感的になつて来る。「婆さんばかりが獨り居る譯はない、娘が居る、屹度一人位は居るよ」「居るよ、居るには居るが、痘痕で、眇で「失敬な、那麽のぢやない、丸ホチャの愛嬌好した、此んなにお客が多いと機を下りて来て、婆さんに手傳つてチャホヤする、年の頃十七八」「處が亭主持ちだ、養子だ、見給へ、それ其處から、聲さんが遣つて来た、小さな驢馬に二十前後のヒヨロ長い土人が、鞆も置かずに足をぶら下げて乗つて来たが、皆なが注目するので怯づくと、俯向いたまゝ、ヒヨロ」と

驢馬を急がせて通り過る。

▲山脚を廻つて進むこと。一里許、鐵嶺富士は見えなくなつた。元來遠近數個の峯が重なつて富士型をなしたので、霞が晴れて皆な別々の山になつてしまつたのだ。

鐵嶺の塔が左に、敵の防禦工事を施した龍首山が右の方に見えてより、一時間許を経て城外に達して、暫く休止。

(五) 茶館、趙子昂、鄭板橋、胡の春、擔花郎、

▲南門の煉瓦壁に紅紙が貼付けてある。「山東儒醫趙治內外兩科、如蒙青睞、到杏林堂便過支那では唯の醫者では有難味がない、解剖生理化學よりも、四書五經の智識が、尊敬と信用とを稱する所以である。

街に入れば各種の商店が軒を并べて、金ビカ〜の招牌を飾り立て、居る、割合に多いのは藥舖、旅館が比較的に少ない。

辻々の掲示場には大きな印をべた〜と押した告示が見える。大俄國のは大概剝取られ、

日本軍のが新しく好い場所を占めて居る。多數の土人が其下に立つて讀む、縣令の告示もある。

縣令告示  
今有無名氏施助賑糧一百名  
撥歸難民按日給發  
特告 三月

華美な號衣を穿た支那巡查が、棍棒を携へて警邏をして居る。時には店頭に坐り込んで酒をのみ、歩行しながら、饅頭や生葱を咬つて居る奴がある。

余は一人の巡查に聲をかけた、彼れは直に傍近く来て何の御用かと訊く、茶館子は何處にあるかと云へば、私が案内しますと先きに立つて行く、親切な、重責な巡查もあるのだ、纏頭さへ與へたらば劫盜の道案内も仕兼ねまい。

▲四五品の支那料理を命じて一行五人卓を圍んだ。脂濃い汚穢らしいも掛念なく頻りと箸を揺らす。酒は老玫瑰酒とか云つた。∧形の錫徳利一本に五勺位。微酔の眼に室内を見廻すと、壁には數幅の書畫がかけてある。松雪の馬は二間ばかりの横幅、絨裝は大分舊い、五六十年來の贗作では無い。鄭板橋の墨竹に至つては實に噴飯の極、多分繪心もない奴が原圖を模寫にした者らしい。落款には板橋が特意的印「七品官耳」が捺してある



が、此印にも亦刀法も何も無い。從來偽物も見たか斯んなに放膽な、無銭砲なのは却て又珍とすべき者である。

▲門を排して猛然と入り来る武装の兵士、何者かと注視すれば、銃を立てて姿勢正しく「私は軍醫殿の命を受けて偵察に来た者であります、黙つて這入つたのは許して下さい」と切口上に述べる、宜しいと點頭すれば一禮して去つた、衛生委員の命で巡邏する者と思はれる。

▲休止時間が短くて城中の觀望をする暇が無い、急いで門外に引返して出發。城外の民家に二本の杏が今二三分蓄を破つて居る。言ひ合せた様に數十人走り集つて、手に一杖づつ、或は帽子に、或はポケットに挿む、子が馬卒は四尺許りの一杖を擔いで行く。

(六) 避暑旅行

▲霞の裏に白帆が見える。遼河の本流が左方二里許りの處を流れるのである。燕が道を横切つてとぶ。

▲沼の傍を過ぐれば表面は乾いた土埃をとばして居ながら、踏めばゆらゆらゴムの上を行く様、下部は底なしの泥濘と思はれる、氣味の悪い者だ。

鶴だ、沼の彼方大きな灰色の鳥が二羽、水中に立つて求食つて居る、苦力は打魚郎と云ふ、日本で何と云ふ鳥か誰も知らない。雁、鴨の類も群をなして、舞ふのもあり降りるものもある。

四五人の土民の小供が籠を手にして、畠の中に蹲踞んで野蒜を掘つて居る。大小幾條かの川を渡つた、皆な水が清浄で、量もある。一方が山地で勾配が高いからか、流れが早い、巖に激して碎け飛ぶしぶきの様を見れば、山陰道あたりの山間に、避暑旅行にでも来て居る様な心持ち。今日も既に七八里位はやつて来たらうが、また敵に接近するには十里餘の隔りがある。今日の様な麗かな天氣に砲聲も聞えぬ行軍は、戦地に在る氣は少しもないで、彷彿學校の遠足會。

▲圖を出して見る何處も同じ様な村落の遠景で何等の特徴もない。日章旗の立てゝあるのが一里許りの前方に見える、今夜の宿營は彼所らしい。

追々進んで行く中に出迎の者が路傍に立つて居つた。是れは設営隊として、今朝出發せしめて有つた内の一人である。戦闘行軍となれば敵状次第で、何處に停止して夜を徹せねばならぬか、一切未定なれども、今日の行軍は豫め行く處泊る處が定まつて居るのだから、何の苦もない。

(七) 一夜泊り、繪葉書、

▲村に入つた先づ目につくは、道路の中央の井戸に札を立て、「飲用に適す」と記してある。先發隊の中には軍醫が有つて、井戸の査査、流行病の有無等を取調べて、差支へない家屋に本隊の各部を割り當てるのである。

狡猾な土人は之を利用して、故らに天然痘、其他日本人の厭ふべき病人のわつた事を揚言して、宿舍の徴發を避けやうとし、甚しいのは展轉反側して病苦を装ふ奴もある。

▲配當せられたる各部隊の名を片假名で紙片にしるし、それくの門に貼りつけてある。併し日暮後にでも到着した時は、此の貼紙を読み廻つて、自分の宿舍を尋ね當てるまで

に數時間を費す事もある。

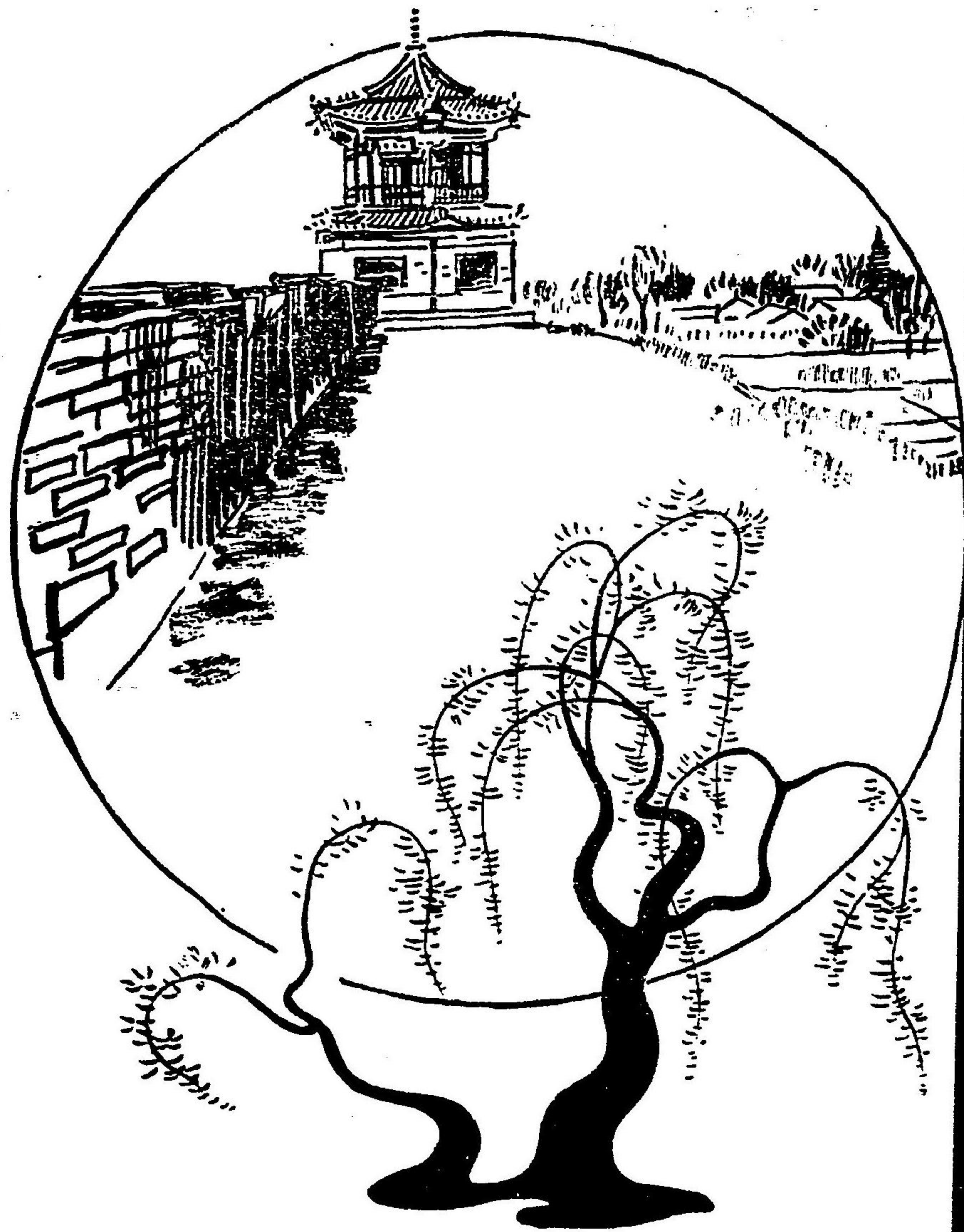
▲予が今宵の宿と定まつて居るのは、數日前迄、某兵團の將校宿舍であつたさうで、可成に手入れが出来て居り、殊に便所の設備は殆ど完全と云ふべき程である、行水場は煉瓦を疊んで四方は高梁稗で編んで、瀟洒とした垣根。

▲屋内に進む。天井も壁も新聞紙で貼りまはし、汚ない煤けた處は少しも見えない、惜しむらくは敷物が無い、土床の上に寝なければならぬかと思ふて居る内、従卒が空き臥を一つ探して来て、予が座だけは作つてくれた。

食物萬端、先發者が略準備を整へて居るし、行軍の初日で、各自が携常の分も尙ほ豊かであり、上戸も下戸も満足に腹を作つて、明日は又早いからと寢支度にかゝる。杏の花は枕頭に置くと命ずると、やがて持つて来たが、梢頭の花は殆どなくなつて居る。「擔いで来る途中で、振り落したか。』「いえ、馬が咬つて仕舞ひました、一寸土塚に立て懸けて置きましたら、私が水汲みに行つて居る間に……」

▲九時半頃、郵便配達が来た。新聞、封書、書葉書、誰にも偏頗なく皆な行き渡る。行軍

# 如場深活



中郵便物の往來が出来るとは、何等の幸ぞと打喜べば、配達人の云ふ様

「此様に澤山ある時が勢が好いんですが、僅か一通か二通しかない時は御氣の毒の様で、  
宿舎の中に這入りたくありません、誰なり見付けた人に渡して、さつさと歸つて仕舞ひ  
たい様です。」

各自に自分宛の繪葉書を誇りがに示し、或は高々に文句を讀み上げる。郵便物の少なく  
来た時は、何だか肩身の狭い様、意氣甚だ揚らないものだ。誰でも管はぬ、自分宛に繪  
葉書の百枚も、連發して呉れば好い。

### 沙場閑話

(蘭原城甫)

#### ▲窓

支那の詩にはやたらに窓といふ字が入つて居る。日本でも風流がつた先生はわき／＼要ももせぬ異様な窓を壁に穿つて何々窓など／＼雅名を命じて氣取つてゐる連中がある。唐が支那家屋で窓といふのはそんな贅澤物では無く、一室の光線を採る所は全部窓と稱せられて居る、日本の家で言へば坐敷の縁側障子の立つ所が窓だ。次の間と仕切つてゐる襖の立つ所は、壁か若くは板戸の様な物で仕切つて在つて、真中に扇門がある、之を扇門と稱して居る。上海出版の圖入り字引を見ると支那全體に通じた家屋の制が略々解る。

#### ▲蚊、蛇、墓

蚊と蛇の居ないのは好いが、墓の居ないのは多少の憾がある。  
墓といふより熊本流に「牛ワラド」といふ方が彼の態度には適當な様に見える。貴冑の奴しい

庭の面、草むらの裏からノソリノと潤歩して居てトある石のかけに悠々然として躊躇つた光景は、怎しても一茶が「罷り出たるは此藪の藁にて候」。彼を以て列仙傳中に入れた支那人の空想は常に自分の賞嘆に堪へない所である、鶴や、虎や、あんな清い氣高いもの、剛いもの勇々しいものが仙窟の動物に編入せられたのは當然だが、藁の怪しき醜さ、運鈍の様な奥底の測られぬ様な處は、鶴や虎に比して更に數等神通不可思議的の資格を具備してゐるのでは有るまい歟。

▲支那人の臨産心得

産の心得書を見たが、先づ第一番に、言を盡して産婦に安心をさせる事を勉めて居る、曰く「此是れ人生必然の理、極めて容易な事、驚き慌ぐに及ばない」云々と慰めて、而る後に陣痛が來たら忍疼が第一だ、忍疼さへしたら、安産、正産を爲るものに極つて居ると説いてゐる。西洋人や支那人は産の時に啼き出すとが多い相であるから、斯様の心得書は適切なのであらう。一體日本人は啼泣を一大不名譽として居るが外の國の人は強ち啼いたから

弱虫といはれるのでは無いらしう。

奉天戰中に我師團の衛生隊に向つて突撃して來た敵の將校中、非常に剛膽相な傲慢相なのが、我れに擒はれた後、傷が痛いとおイノ泣いて居たのが有つた。

いよゝゝ兒が生れる時の陣痛と左様でないのとは違ふのだが、無經驗な初産の人は腹が痛みさへすれば直に生れるものゝ様に思つて無暗に努むものだから、精も力も盡きて仕舞つて酷い目に逢ふけれども、何も別段努んだからつて出る譯のものでない、出る時が來なければ出ないのだから、腹が痛みだしたら淡泊な食物を採つて饑じくない様な仕度をして、成るべくは安眠して時機を待つが好い……など、記いた末に此んな文句が援いて居る「瓜熟して蒂落つ」水到つて渠成る此んな臨産の心得を書くにも支那人のは文學的な文字に富んで居るには驚かれる。

▲雨 朝

半歳も雨の降りぬ事のある滿洲では雨傘の用意のない家が多い。此頃は雨期だといふ事を

がそれでも一日か二日降つては五日も一週間も晴天続きである、此れで雨期ならば日本などは一年中雨期だと言はなければ爲るまい。

雨天の泥濘に會ふ毎に、足駄が欲しく爲る、作らうと思ふけれども適當の木材が獲られな

▲評判が悪い

四五日間後方の村落に赴いて、歸つて來た處が、汗と雨とでシャツが汚れて仕舞つた、妙に痒くも感ずるので脱ぎ代ふる際念のため、検めると琵琶形の小動物を發見した。

早速沸湯をかける様吩咐けて置いたが其翌晩涼み臺での雑話中、馬卒が言ふ様、我部は大變評判が悪うなりました、昨日あのシャツを小屋の戸口に懸けて置きました處が、苦力の奴共が見付けました、這うてる物を見付け出しました、日本の大人には虱子は居ないと言うたのは虚言ぢや無いかと、私をやり込みました。

其れに付けて思ひ出すは、或る人が何時かの笑ひ話に、旅團長閣下のシャツにも虱殿が

お出来に爲りました……

▲梁上の君子

支那の書籍を讀んでも、衣食住萬端支那の事情に通じなければ、書籍の意味が善く呑み込めない點が多い、梁上の君子云々の故事を初めて聞いたとき、梁の上に盜賊が藏れて居るとは妙な事だと思つたもの、日本の家屋にした所が、強ち梁の上に藏れないとも無いから、支那でそんな事が有つたかも知れないとの位に考へて居た。併し滿洲の屋で見ると家屋内に入つた盜賊の潜伏しやうにも何處といつて適當な場所は無い日本ならば床の下だが、滿洲の家には床の下は炕に爲つて居るから兎以上の大きさのものは潜り込みな

い、止むなくば矢張り梁の上。

南清の家屋にした所で、室内には日本の床の下の様な處はない相だ。

▲蠅打ち拂子

支那人の蠅に管はぬには驚く。眞黒に群集つて居る飯の上の蠅を拂ひもせず平氣に食つて居る、予が蠅打を作つて宿舍の童子に打方を命ずると不思議な顔をして居る、此物は何といふかと尋ねたが、清國には此様な東西は無いから知らぬといふ、其んな次第であるから蠅の打ち方も知らう筈がない。百發、百不中だ。併し拂子は家毎にゐる強ち蠅を厭はぬでもなからう。

▲北窓

北窓の外は百坪許の庭、五本の老松と一本の杏が茂つて晝は其間にハンモックを吊り微かに左右に揺り動かして雲の獨り心地も此様なものであらうかと半は仙人の境界に入つた様、土塀の外は數百株の白楊が密林を做して其奥は澤、二尺許りの水を湛へて細蕪がある、瘦せた菖蒲が咲いて居る。晝の八十七八度といふ暑さに似ず、夜は白楊林を通つて來る涼しい風が、明け放した北窓の裏に吹き込んで蠟燭の火をチラツカす、澤の蛙の聲々に暗さ立つるが手に取る如く聞える、机に隠つて書見でもして居ると、恰も郷里の虚空藏山下の

舊草廬に在るの想、顔と身の戰場、若かも胡北の荒村に居るといふことを忘れていふ。

蛙鳴くや故郷の人在りや無し  
かゝる夜の夜振りに更けし昔哉  
涼風や窓に集へる唐女  
豚小屋に水湛へけり夏の月  
片脚に犬の子弄る涼み哉  
鼓子花に睡む犬の子豕かな  
涼風や西洋蠟の片流れ

▲避難民

土人の避難者が漸次に吾宿舍の空室に集つて來て夥しい數に爲つた。取締上、衛生上の顧慮よりして此上の増加を禁じた、目下四十餘人、其三十餘人は婦女と小兒である。最早一週間はかりにも爲る、小供は既に馴れてしまつて三四歳位の裸坊主が砂いぢりをし

て我が窓の前に嬉々として戯れる。

▲日本詩

一月許り滞在して居た鐵嶺の南の大汎河を出發する際、宿舍の主人が何か一筆願ひたいと、美しい詩箋を持つて來た。彼復が解るものを書いては巧いの拙いのと評せられるが癪だと例の負け惜み、

月はおぼろに故郷の

ありし眺にかはらねど

笛ふきすぶ窓の戸に

にはふ花こそなかりけれ

出來合ひの今様一首を、萬葉假名……漢字ばかりで、追騎盤於賚路耳不流斷刀能……と書いて遣つた、送別に來た劉秀才崔秀才の兩人が之を見て、やゝ多時首をひねつて讀んで居たが解らう筈が無い、不明白々々と言つて譯を訊ねるから「這是日本詩」

▲香

禪僧原師に香を貰つた、牛肉の罐殻を爐にして恭しく炷いておくと、苦力が認て好々を連唱し、好い香を焼けば大人のお嫌な臭虫が近づきませぬ、蠅も蠅も香を嫌ひますといふ。或は然かも知れない、僧侶の道具には虫害を避ける目的なのが少くない、毒虫の多い酷熱な印度が故土の佛教だから其れも其筈である。幼い時僧侶の拂子を以て居るのを見て何になるのかと訝んで居たが、後に聞けばやはり印度傳來の蠅拂ひだ相な、此の滿洲でさへ夏は拂子なしには煩惱がたまりぬ、必要上から爺さんも婆さんも嫁も少女も皆拂子を持つて居る位だ、法師の拂子も、蠅打虱紐の様に原は必要より生じた具で、決して氣取り材料や體裁器械ではなかつたのらしい。

香を焼くのも其れと一樣に強ち鼻の穢嫌を取るばかりでは無く虫除けの方法であつたのはあるまいか、沈香白檀固より結構だが此目的を全からしむるには蛋取粉を線香に混和しておくが一番だ、予は爾後戰地向きとして此種の香が煉られんことを希望する。



▲筆

支那人が字を書く時、墨を磨る前に必ず筆の穂を硯の水に濡して置く、これは好い方法だ。筆が磨れる時分には筆は濡つて居るから、日本人の多くが爲る様に、筆の穂を咬んだり、硯で衝き解いたりする必要が無い、體裁も宜しく筆の保存上にも大なる利益である。

▲書物と組打

竹に雀、梅に鶯よりも尙ほおキマリ物として支那人に考へられて居るのは、官吏と賄賂婦人と姦通、僧尼の詐譎文人の剽竊、此最後のは甚だしい實例を傳聞した。植野少佐の許に宿營地の一秀才が詩を持つて來たので、少佐が直に和作を與へた。其後引續き持つて來る中に、或る詩は某書中よりまる寫しをやつて來たものといふ事が判つた。そこで少佐曰く乃公は書物と組打ちは御免蒙ると、其からブツツリ唱和應酬を廢めて仕舞つた。

▲滿州の春色

今日は五月二十五日、午前九時、朝餉を了つて門外に出て見る、好天氣、風無し。滿洲では風が一番の難物だ、朔風の氷雪を吹くのは申すまでも無く難澁なものだが、春の風も甚だ迷惑なものだ。吹き始まつたらまづ少くとも終日吹き徹す、輕鬆な土を吹き捲るので、風が吹くといふより寧ろ砂が横に降るといふ方が適當だ、戸外を往來するものにも目も口も開かない、室内に在つても唯だ窓を鎖した位の事では居られぬ、寒を防ぐよりも一層嚴密に一切の隙目を貼り塞がなければ、室内は砂だらけになる、呼吸もつかれず砂に咽ぶのである。此程三日許り吹き續いた時は、氣が狂ひ相に爲つた。幸ひ今日は微風も起らない、空は霽れる、日は照る、上々の天氣だ。山が見える、青い、此處等の山には少しは木もある珍らしい事だ、木立の茂つて居る處は村落でなければ墓地だ。

柳 濃く 柳 淡く 村 處々

焼け残る柳青ひや村の中

同

杏梅、桃などが月初(六月)に咲いたが直に散つて仕舞つた。

麥の早いのは三十位に伸びて居る高粱は二十位、粟も同様、併しまた今種蒔いてるのもあり、漸つと鋤返して居る處もある、戦争で農時を失つたのだ。

歸り来て土民ちらほら畑打つ

一時間ばかり道傍を捜がし廻つて、十三種の草花を得た、歸つた五六冊の法律書の間に乗んで、敵の重砲彈の殻を壓にかけた。

董蒲公英春の季の花略咲きぬ

近處に清い溪の流れがある、全然水前寺の水の様だ、澄み切つて居る、河原の廣さく大井川位もある、美しい砂だ鮎、鯉、かまづか(鮎)鱧(すッぼん)の類が澤山棲んで居る、河邊には、檉柳といふ柳行季などを作る様な柳が叢生して居る、其裏に野兔が居る、狐も居る、海幸と山幸を同處に兼ねて居るので、閑な部隊では折々漁獵の備し、鼈班、兎班など、班の名が出来て居る、給養班、測量班、電燈班、縫工班、靴工班などの流義で何處までも兵

營的なのが有る。

内地の様に翁鬱たる老幹密樹が無い、大木が有つても皆枝が疎で見え透いて居る、鳥の巢が皆明々地だから變におもはれる、鳥、鶉の巢が最も多い、予が宿舍の裏の楡の樹に八個も鳥の巢が懸つて居る。日本の様に腕白小僧が多くないのであらう、邊の樹に何處も巢がある、燕も來てる、不相變饒舌つて居る。

雲雀、鳩、鶉、鶉、鷺其外名も知らぬ禽が澤山居る、鐵砲は何萬挺も有るが打つことがならぬのだから残念だと云人があつた、有理な次第。敵前でない地方では狩獵も流行つて居るとやら、定めし鳩班、鶉班などに分かれて居るのであらう。

▲ 鳩

五目飯を作らう、具は何が好からう、干瓢に渡菰草がある、牛肉——豚はあるが餘り脂濃くて可かぬ、鶉は城内にも無し何か外に……さうだ、底に鶉の巢がある彼れが好いと評決して、其夜二時を期して、三四人が夜襲、美事功を奏して一羽の鶉を捕へ得た。

美しい羽色、優さしい眼睛、引ン剣いて喰つて仕舞ふには餘りに可憐な無邪氣なものだと我れ言へば他も同する。

洒落な五洲は「エ、食つた事にしやう、食つて仕舞つたと思へば何のことは無いと言ひ放つた、飄輕な青夢は氣早やに同意して「わゝ五目飯で腹が膨つた、オイ苦力早く茶でも持つて来い。」

五十錢の銀貨が一人の手より投せられて従卒は酒保に走つた、程なく茶が沸く支那羊羹の一皿が團坐の中に呈せられる。

聽て宿舍の主人が鳥籠を持つて、来る雲雀籠で窮屈ではあるが鴿は温順しく此の裏に飲啄を安じて居る、高粱稗で大きな籠を造らうといふ動議も成立つた。鴿の名は五目飯と命せられて居る。

▲慰問袋

▲甲中尉が得たのは乙大尉の家からのだとは判つたが、お母さんのか細君のか、但しは妹

のかい判らない。頻りと詮索をするが、誰もわざと眞實のことを言はない。

▲某曹長が非常に恐悦がつて屹度藝者だせおもしろい禮狀を書いたよと見せびらかした、見ると佐賀市〇〇町〇〇内、千代鶴とある、藝者と見たのも有理だが、佐賀邊にはこんな名前が珍しくない、よし藝妓にもせよ娼婦にもせよ此んな眞面目な事——國民の誠意に對して媚めかしい言を書いてやるのは、禮意を表するのでは無くて寧ろ大なる侮辱だと、心安いまゝに生意氣な忠告をして其返事を書き改めさせたが怪我の功名後になつて其人は小倉師團に居る某少佐の夫人だといふことが判つたので大笑ひ。

▲書 狀

書狀の宛名や差出人の住所氏名はあまり達筆を揮はぬが善い、京都の或人から屢々予の處に来る葉書があるが一度も其肩書の下宿屋の苗字が讀まれ無いので返事はいつも其讀まれ無いまゝの字を擬ねて書く。

繁く往復する友人間でも必ず宿所は明記するが好い、番地などの胸忘れをして發信に差支

へる事がある、住所録が有つても行李の都合で其れを引出すことの出来ぬ場合もあるのだから。

駐軍雜俎 (開原城北)

(一)

▲活きた足駄 雨期に入つて十數日降りつゞいて昨今二三日の晴天を得た、明日あたりからまた降り相入日の模様である、遠路は無論泥濘を極めて居るが、それでも、我軍に依て修築せられたる所は左右に排水溝があるので雨中にも、餘り酷くはならぬ。支那馬車の通行さへ許さなければ道路の保全是左程困難であるまい。砂や礫を埋めたなら車の通行にも堪へる様にならうが、此廣い滿洲の凡ての道路を左様して仕舞ふまでには。五年や八年で出来る事ではない、新に長城を築く位の費用と勢力とを要するであらう、支那人は雨中に働かぬ、泥路を通行せぬので、左まで困難を感せぬかも知れぬ。兎に角土人は雨傘、雨靴の用意は滅多に無いのである。下駄が欲しい、傘があれば好いとは滞陣中難も感ずる所で中には楊や榆の木で日本流の下駄を作つて穿いて居るものも見える。併し此雨期中の泥濘は門内でも五寸や八寸はぬかる、道路は一尺もぬかる、支那車輛などは車軸より尙ほ

深く三尺もぬかるので、到底下駄も足駄も追付くものでない。併し用事があれば外出をせぬ譯には行かぬ、靴では逆も叶はぬ處からむしろ裸足でと奮發する連中もあるが幸ひに此處に上等の足駄が見つかった、それは支那人の家に大概畜うてある驢馬である。馬に乗ると鞍だ何だと中々面倒だが、驢馬は小さくて上り下りにも至極便利で別段馬具も要らず殊に大陸の家畜は極めて温順だから、隣り歩きの乗用に此上もない便利である。

水槽を驢馬負て行く夏野哉

馬 醉 木

夕立や驢馬追立る支那車

迂 香

▲植物の生育 雨と暑さで驚くほど植物がよく育つ、もう高粱はそろそろ穂が出はじめた、それで麥の收穫を終つたのは僅に二十日許前だ。茄子はまだ出ぬ、西瓜はあと二十日許すると食はれる相だ。野は例の蓬蒿といふ草が茂つて居る中にさまざまの野花、殊に桔梗の花の野を掩ふといふほどに咲いて居るのには一驚を喫せられる。

一茂り墓の柳や夏の原

迂 香

石竹に桔梗まじる夏野哉

▲前線の詩景 雪田君が昌圖より来て

亂草沒人新綠堆。 陰雲連日黯難開。 胡奴近陣前峰頂。 夜半溪中飲馬來。

宛然唐詩を讀む様な氣がする。我々はいつも前哨よりは少くとも若干里後方に居るので、此んな詩景を實際に見聞することが出来ぬので、此んな次韻。

幾封鄉信案頭堆。 讀到平安我意開。 寫得斜々如竹字。 稚兒漫說早回來。

▲野戰郵便 同局員の談話に一時は繪葉書が非常に多かつたが、近來は餘程減少したとの事、内地はどうか知らぬが流行物がさう長く繼續する筈もあるまい。併し陣中の慰藉はやはり郵便である。

五月雨の長い手紙を書にけり

俗 説

▲病院參觀 に行たが、サツパリ患者が無い、昨年頃一時多かつた脚氣が今は唯つた二人の同病患者があるとか。花柳病の少いのも我軍人の身持正しきことを證據立て、居る。呼吸器病などは内地で患つて居たものも此處に来てから治るものが多いといふ。醫官の方では漸く病患の無いのも施設如何に因るので當然だといふか知らないが自分等素人にはひ

しろ一の奇蹟と感せられる。

五月雨や麻酔の人の唄低う

振り落す額の汗や手術室

追廻す蠅一匹や手術室

五月雨や大工鋸ひく窓の下

ギイ〜と桔槔あがる若葉哉

▲恤兵 の扇が渡つた紐のつけてある所が大に便利だ。

恤兵の扇使うて夕涼み

馬とめて川に飲ふ雲の峰

水筒の水入れかふる清水哉

同	同	五	立	倍	同	同	虹
		洲	耳	麓			林

(二)

▲上陸二週年 去年の今日はじめて遼東の一角に登岸して、濱邊の白砂に靴の痕を印し

た嬉しさは今に忘れられぬ。爾來三百六十餘日いつも第一線師團に従つて銃砲弾にも暴れたが、かすり傷一も負はぬ幸運、尤も病氣は殆ど絶え間なし、床に就かぬのは除けても尙ほ二月に一回の平均になつて居る、一時は豚の様だと自ら嘲つて且つ喜んだ程に肥満しかけた事もあつたが元の李阿彌、一昨日秤けて見たに七十八斤、出征前に比して三百目餘を減じて居る、まづ出征者中の最低體重であらう、併し兎も角活きて居るが目出度い、部内だけの祝宴を開かう。

酒保をわさつて阿多福豆と辣蕪の鐘詰を獲た、従卒と苦力とが西洋料理、支那料理の各一品を作る筈、下戸揃ひだから五目飯が好からうと、昨夜鳩の罫を襲うて三羽捕へて置いた、干瓢と椎茸とを其窓子の許から貰つてある。

▲新聞紙の渴望 数日の行軍を経て新宿營地に就く、何より待たれるものは新聞紙である。無論内地の消息を知りたいのであるが、今一つは壁貼の材料が欲しいのである。

▲北進 北に進めば進むほど、山が多い水が多い、樹が多い、禽が多い、つまり景色が好い。併し家屋が段々に少なくなつて來た今に幕天席地の詩境を現實に味はふに違ひない。

要するに困難は多くなるのだ。

▲蠅打ち苦力 南京虫もたまらぬが、軍筒の上か、ハンモックに寝れば避ける事も出来る。蠅に至つては何とも方術が無い。

室の入口に黒金巾の帳を垂れ、南北の窓には白紗を張つて外來の蠅は防ぐことが出来たけれども、既に室内に入つて居る奴の始末がつかぬ、そこで昨日から十三歳に爲る少年を一人雇つて蠅打ち専務を命じた。

▲老婆の泣訴 あわたくし室内に駆け込み支那婦人、六十許りの婆さんだ。土間に伏して頻りに叩頭して申す様「唯今日本兵が大勢自分の宅に闖入してサイコくをしやうと爲る、大人仰ぎ願くは之を救ひ玉へ」といふ。サイコくとは北清事變中に日本語の何かより轉訛したのだ相で、總て男女に關する猥褻なる意義を有つて居るのである、此の白晝に左様な亂暴な事のは行はれる筈が無いと訝しみながら「誰をか、汝の姑娘をか」と問へば、否々私を……と涙ぐんで居る。

余は意はず噴飯して「其は冗談だらう、調戲のだ」と勸めて返しながら、念の爲めに兵を遣つて模様を見せしめると果して間違ひ水桶か何かを借りに行つたのだと。

▲杏 宿舍の後園に一本の杏があつて大分實つて居る、物珍しさにちぎつて居ると隣家の醫者が来て、色々果實談をやる、其中に「凡そ果實の異常なるものは根下必ず蛇あり食ふ可らず」云々、随分おてに爲らぬ鑑識法だ。

(三)

▲鶏卵を食つて腹痢しをやつたものが幾干もある、自分も其一人だ。

▲甲の酒保は麥酒瓶一本の日本酒が三十五錢、乙は二十五錢といふがある、離れて居る場所でも無い、品質が違ふのでもない、仕入れに高低があるのか、利得に多少があるのか。

▲日本人は支那人の飯を多く吃ふに驚く、支那人は日本人の湯茶を多く飲むに驚く。

▲陰曆の十五夜といふので、晚餐後近所の二三人も來合せて窓の外にパンコを眺めて觀月の茶會をやる。茶は磚茶と謂つて磚の様に壓し堅めたのを削つて煮るのである點心は小豆を煮て砂糖をかける。

門前に五六幹の大木がある、月は地平線より出でて漸々と此柳の大木を傳うて昇る。日中は今日も八十七度からの暑さであつたが、夕方からの涼しさはシャツ一枚では冷過ぎる程なのである。出鱈目の句を作らうと提議すれば我れ勝に吟じ出す、其中記憶に在るのは。

姑娘も豚も出て来て夕涼

涼しさの更て外套をかぶりけり

足袋脱てズボンも脱いで涼み哉

庭涼み煙草を點けに歸りけり

避難者の窓明けて居る涼み哉

今日其窓子が来て、

西比利亞の風真直に涼さよ

と吟じたのを思ひ出した。

青 山  
連 塘  
朴 堂  
造 物  
玄 耳  
其 意

(四)

▲食後散步

晩餉を了へて門を出る、上弦の月が淡く楊樹の上にかゝつて居る。國を去つて一年に爲る夕涼み

軍帽冠つて、長靴穿いての納涼は、可成り窮屈なものだ、爲らう事なら

夕涼み 揮一貫で驢馬

と思ふけれども、まさか其んな容も出来ない、日本では短い襦袢位を着て腿は露出しても左まで尤められぬが、支那人は上半身はたとひ裸でも、下半身は決して露して爲らぬ習慣に爲つて居る。

島の畔菖蒲に似たる花が咲く

花も葉も菖蒲に能く似て居るが、違つて居る様にもある、水邊にも多いが、カンカラカンに乾き切つた岡の上にも簇生して寝ぼけた様な薄紫色の花が咲いて居る一入だといふ人も



あるが、葉が一八とは全然異つて居る。  
木立に赤いものが引張つてある、牛の皮を乾したので乾燥した上は内地に送付せられるのである、此んな處にまで注意が行き届いて一文銭も浪費しないといふ當局者の親切、國民は宜しく安じて、甘じて、戦費の負擔をすべきである。

- 葉柳や村を遠ざく屠牛場
- 鳥の巢や廟の白楡の枝疎ら
- 脚太き胡婦や門涼み
- 門涼み老いて妻らぬ讀書人
- 葉柳に桁無し井戸や村の辻
- 三代の儒醫が耳房の牡丹哉

月が照つて来る、故郷には二人子供が二階の安樂椅子に乗つて「お月さま幾歳」でも話つて居るであらう。(六月十六日記す本日) (正午氣温、八十八度)

(五)

▲第三軍より 第三軍に居る同好の人々が句巻を寄せて来た。滿洲の景は、春季に柳、夏季に梅雨、秋季に高粱、冬季に枯野、此等は内地に於て到底味はふ可らざる趣味——大陸的趣味を有して居る。

- 燒跡の岩に青む柳哉 失 名
- 電線の巻付けてある柳哉 同
- 滾々と水流れ去る柳哉 同
- 廟の前塀に連る柳哉 同
- 電柱の柳芽を吹く五月雨 同
- 彈殼に柳の一枝挿みけり 同
- 丘の上墳を透つて柳哉 同
- 柳茂り墓處々鳥の中 同

支那の墓といふは、大抵直径一、二間の摺鉢を伏せた様な土饅頭である。富貴の人のには墓標や墓門、石造の仰山なるも樹てゝあるが、中以下のは標木一つもない。併し必ず樹を周圍に植ゑてある。日本の様に墓地が一定して居らぬ。風水家に占つて貰つて子孫繁昌の爲めに適應せる土地を定めて墓地とするのである。一體樹木の少ない滿洲の廣野にたま〜見える木立は十中八九は此の墓地。

五月雨に繪葉書濡れし恨哉

失 名

内地では繪葉書蒐集に熱心な人が多い相であるから此恨みを感ずるものも又た多からうが、戦地で唯一の慰籍たる内地到來の美しい繪葉書が濡れて居たとき汚れて着いた時の遺憾は、内地人のそれに十倍するのである。此處彼處の宿舎を訪ふと、新聞紙貼りの壁に高梁の額縁を拵らへて繪葉書を挿んである。砲彈の殻又はビール瓶などに楊柳、草花などが兩三枝活けられてある、或は今夜立つかも知れぬ陣屋に、手の入つた築山泉水などを作つた處もある、如何しても日本人は到る處を美化しななければ止まないものであらう。

五月雨講和の使節來りけり

失 名

五月晴れ軍歌起るや丘の上  
五月雨や漏水うける洗面器

失 名  
同

(六)

▲講和談 講和談が始まつたので、留守宅の人々は今にも夫や子が停車場に姿を見せるかと思つてるかも知れないが、戦地の人には格別の感動を與へない。思郷の念の最も強く起るのは好奇の慾は既に一通り充たされて、異郷の生活にはまだ慣れ切らぬ中、即ち上陸後一二月程の事で、其の後は左程にもない、住めば都といふ様な理窟もあらうし、各自の生活は現在の境遇に順應して來るので不便も不快も漸々に減少するのである。

露助の講和が一度や二度で纏つたことは歴史上少ないといふ事だ、此度のだつて何の當になるものか、どうせ來た序だ、ハルビンや貝加爾あたりまでは見物して歸らうぢやないかなど、士氣は中々の旺盛。それでも夕風の楊蔭に佇みながら、雜誌の間に凱旋したら、さあ何を一番に食ふのだ、蕎麥だ、刺身だ、天ぷらだ、うんにや乃公は何より先に餅を食

はなければ承知しない……

浴衣着て故郷の夕涼しからじ

▲田園趣味 『我宿の表廊に梅の樹が一本ある、年々五六升の梅の實が出来る。我家の一年の梅干は此の一本に依つて供給せられてゆくのである。今既黄色に熟して居る雨天續でちぎる事も見合してあるが、いづれ「梅干や」の句を作るのも遠くあるまら。」

袋から梅の實あける板間哉

微笑

梅の實や枝を折たる木の弱り

同

青梅をちぎるや蟻を踏んとす

同

手が届く玄關脇の實梅哉

同

田植女の休み乞ひ寄る實梅哉

同

青梅をちぎり煩ふ毛虫かな

同

微笑といふ人は肥後の奥山の中に住んで居る極めて篤志な俳人。此書状には五顆の青梅を寫生してあつた。(六月二十二日)

▲土人の食物

避難民の住家を見巡つた午後八時過ぎてまだ日没には半時餘もある檜の老木の蔭に十四人の老若男女が地面に坐つて低い食卓を圍んで居る。卓の上に一鉢の醤油の實が盛つてあつて、其傍に堆く積んだのは、何といふ名か知らぬ鳥の畦などに生へて居る青草、其れに一寸香油を付けてムシャ〜とやる。外に何も副食物は無く、薄紅の高梁飯を喫ふこと大椀に五六杯、さも甘味さうに見える。

▲俳句雜誌

青夢が宿舍を訪れたら追送品中にこんなものが有つたと、三四冊の俳句雜誌を示される。出征後殆ど雜誌を見なかつたが、新しい作者、新しい先生、新しい形式、新しい流行、目を眩するばかり。王介甫が所謂「山中豈料今爲晋」の感がある。猜忌排擠の風も大分見える、雜錄批評の欄などは頗る物騒な光景だ。此んな風で推し行いたならば十年後には、俳句は社會の安寧を害するものとし、禁止せられ、俳人は注意人物として警察官の帳簿に記載せられるかも知れない。(六月廿三日)

(七)

▲電気燈 昨夜から將軍の居間には電燈が點せられたとの噂等の處にも今に點せられるであらうと思つて居ると、果して今日一名の下士と三四の兵とが来て線を架けた。今夜からは蠟燭の心配をせずに済む哩と思ひながら、寝轉んで手近かの一書を採て仰向けに讀んで居るうち何時かうと〜となつたと見える。「這入つて宜しう御座いますか」と音なふ聲に目がさめて、返事をするに直に門簾を掲げて室内に進んで一禮する兵がある。双の手に電燈のホヤと笠とを携へて居る。

「此處に居ましたか」と親しげにいふのを、寝ぼけ眼に熟視すれば、滿臉の鬚髯に痛く面變りしては居るが儘に吉國工學士——大阪高等工業學校教授！

これは〜、意外な對面、併し看護卒で召集された君が何故に電氣の掛りになつて居るかと問へば、斯く〜の次第で手傳ひに來たとの事、兎も角奇遇を相喜んで、一杯を傾ける。高等官何等の先生が、其有様では嘆息しからうと思ひれば、「なアに」と頭を揺て「結局此方が日記の種が多くつて他日回顧の樂は多し」といふ。元氣なものだ。やがて、一切の取り付けが出来た、宿舍の童子が遊びに來て、ためつすがめつ見て居た其

中に日が暮れかゝると、伶俐な彼れは厨房からマッチを取つて來て、點火して見せよといふ。晩飯後、某部まで行く途中、街の辻に一基の電燈がある。其下に土人の一群がガヤ〜とうして、點れるのだらうかと訝つて居ると、通り掛つた若い支那人が「これが判らぬか、石油だよ、何處に油が入れてあるかつて、知れたことさ、彼の針金の中が管になつて居んだ、夫を傳うて來るに極つてらあ」

(八)

▲兎の末路 「戰場之兎今如何」といふ様な慰問狀を寄せられる方が、今日まで七名あつた。

彼兎は死んだ！

百千兩注の彈丸にも中らず、三十餘里の長行軍にも無事であつた。

鐵嶺南方の某村に宿營中、二羽の鶏と共に我室の土間に置いて愛撫して居た處、鶏が時々

戸外に出て通り掛りの兵士等に捕はれるのを防ぐ為め、足に綱をつけておいた。或る冷やかな朝兔と鶏とが土間の隅に一處にかたまつて寝て居る。寒いので其暖もりを行つて居るのだらう、面白い奴等だと思つて見すとしたが、午近かく爲つても兎は鶏と離れぬ、不思議な事と調べて見れば無慘や、鶏の足に着いて居る綱に兎の胴腹は括られて、鶏がはね廻る度に、益々緊しく絞め込まれて居たのである。早速綱を解いて與つたが、兎の半身は最早不随になつて仕舞つて居る。大騒ぎで介抱をしてやつて其夕方には漸く這ひ廻る位には爲つたが、例の後足で立つて我呼ぶ方を圓い眼に見まはすといふことも出来ない。其翌日余は命を帯びて奉天に赴いた。其不在中師團は前進した。余が奉天より歸つて新宿營地に探し着いた時、全治なつて居るだらうと豫想した兎は、此處に来る行軍途中籠の中で死んだとの事。

屍は家後の菜園の隅、小さい地神廟の傍に埋めてある、同じく死地を踏んで来たものなれば、萬望、祭文を做つて與れと五洲が言ふので、做らうとは思つたもの、茲に幾月、其儘に爲つて居る。

▲鴉、鵲、鶴、犬 開原城附近に居たとき、宿舍の後の大木に、鴉の巢が有つた、數へて見たら八を算へた。

或日南風が烈しく吹き荒んで、砂塵を揚げる、冬籠の間よりも厳しく障子の目張りをして置いても尙ほ室内は砂だらけに爲る不快さ。大粒な砂が吹き當てる時には日本紙で貼つた障子にすらほつりと穴があく位である。

夜徹し吹き荒れて翌日は憎らしいまでには快晴無風の好天氣。屋後に出で深呼吸を行つて居ると變な啼き聲がする、數人手をわけて探した處高粱稗の中に鴉の子が一羽、人影を見て逃げやうとすれどまた翼の生へ揃はぬ雛で、ばた／＼とするばかり、遂に捕まへた。

飼はうといふ事に爲つて、籠にも入れず、土間に放して置いて、土人の子供に虫を捕つて來らせて養ひ立つる、日數が立つ中に大分大きくなつた。いつか馴れて人が近づくとガアガアと啼き立て、頭より大きい様な口を空さまに打擴げて抛り込まるべき餌を待つのである。

牛肉は食ふだらうかと試しに小片を與へた食ふ處が大喜びに嚙み下だす、面白い／＼と食

ふがまゝに食はせたが、其翌日から下痢を起して數日ならず死んで仕舞つた。  
惜しい事をした、今一月も経つたらあれがすつかり馴れて、ビョコッ／＼と土間を歩行き  
廻つたら、どんなに滑稽な面白いもので有つたらうにと、皆な侮むけれども何の甲斐があ  
らう。

此事を知つて居る或人が、數日後一羽の子鴉を伴れて來た、途中畠の中に居たのを捕へた  
といふ。此度は食物に注意せねばならぬぞと戒め合つて大事にして居たが、三日目に不圖  
見え無くなつた。百方詮議の末、竈の中に這入つて居たのを苦力が氣が付かないで火を焚  
いたので、悲惨な最期を遂げさせたといふ事が解つた。

其次に鵲の雛も一羽貰つたが、是は巢から落ちた時既に負傷をして居たと見えて、數時間  
にして自から死んだ。

庭の簷に巢ふて居た鶴を捕へて籠に入れて飼つて置いたことも有つたが、出發の前日戸外  
に出て圖らず認めたのは馬卒が手中の一羽の鳩は今しも毛を抜かれつゝ、他の一羽は赤膚  
に爲つて地面に轉がつて居た、處分方を前以て注意して置かなかつたのが自分の手落ち、

今更何と言つても及ばぬこと、黙つて看過した。其夜の料理に一皿の燒鳥と化つて、碧や  
紫の美しい羽毛のかはりに、脂肪と醬油に深蒸く彩られてゐる。

二三の來客は何の緣故も知らねば、唯だ近來の珍味とばかり舌を競して賞する、予も着せ  
着けたことは着けたもの、何となく快くなかつた。

無聊に苦む予は、今、犬の子を飼つて居る。併し前進に際しては決して伴れて行かないこ  
とに定めて置いた。幸なのは此宿舍の土人等が、痛くこの犬の子を愛して居るとである。

(六月二十日)

▲夏瘦 桂洲の許に行つて、樂書をした中に

瓶に挿す芍藥黒く蠅たかる  
夏瘦や光る眼の玉銀鈕

今日湖郵軍醫より來た書に、「僕も瘦せる事なら敢て負けぬ積りだ」云々とある、つゞらぬ  
事に競争を出したものだ。

窓に置く柘榴の鉢や婦人室

湖 邸

蠅除けのレースの窓や夏の月  
火影さす布天井や夜の蠅  
蠅を打つ美人の眉の昂りけり  
蠅取蜘蛛潜む柱の割目哉

壺 川  
同 同 同

▲滿洲歲時記 蠅(さそり)、南京虫(床虫臭虫)、寢臺虫など、拂子は夏季たるべし。高粱は秋季。

炕、烏拉靴、秣槽は冬季。

砂風は春季。(六月三十一日)

(九)

▲小日本 強姦事件に就きて鐵嶺附近に出張して數日を費した。第一線から鐵嶺あたり  
の生活を視ると殆ど別天地の感がある、或處には疊を敷いたのさへある、其外の設備が萬  
端日本的になつて居るのは、是で推知せられる。夕方になつて宿舍のまはりを浴衣がけて

下駄を穿いて歩行いて居るのを見ると、どうしても此處が滿洲の真中であらうとは思はれ  
ない。

▲室内の裝飾 二三幅の軸物を懸けて相應の活け花もある、茶器其外の調度も大方は日  
本品、劇場もある、講演會も催されるとか。一番快く感じたのは第四軍兵站監部に往つた時  
丁度夕方であつたので先づ風呂にと勤められるまゝ、輪卒に案内せられて浴室に往つて見る  
と、箱風呂や藝風呂、ブリキ風呂の、間に合せものでなく楕圓形の風呂桶、備に日本輸入  
の品である、一切の設備が清楚に整つて居る。日本の何處かの港に上陸して宿屋にでも泊  
つた様な心持ちだ。出征後風呂桶に浴したのは今日が初めである輪卒が流しをやつて呉れ  
ながら何處から來たかと聴くので、第一線からだと言へると「今でも毎日やつぱり戦争を  
行つて居ますか」との尋ね。同じく出征者といふ中にも非常の懸隔があるものだとつくづ  
く感心して仕舞つた。

▲高粱の長短 鐵嶺を境に、南方は奉天、遼陽に續いて廣潤な平野で、北方は松花江流  
域に達する迄數十里の間、丘陵起伏して居る、氣候が此南北で非常に相違するものと見え、

昌圖開原地方で三尺餘に過ぎない高粱が、鐵嶺以南では最早徒步者の頭を没するまでになつて居る。併し我見たる限りに於ては、農事は左程戦争の爲めに妨げられなかつたものと覺しく、全然荒廢に歸したる地面は殆ど無かつた。

▲炎熱 日中の氣温は随分高い、室内で涼しいといふ處でも尙ほ九十度以上に達すると珍しくない、室外日光の直射する處は百度以上に昇る。去りながら朝夕の風は寔に涼快でどうしても日本の、關西地方よりは凌ぎ易い。

▲扇 老若を問はず、支那人は扇を手にして居ないものは殆ど無い、城中の辻々には扇屋が露店を出して數多の扇紙を並べて居る、客は舊い扇を出して之が貼りかへを注文すると、扇屋は即坐に、扇紙を折つて貼り換へをするのである。支那人の扇が比較的好的骨を使つて居るのは斯様に貼りかへの自由があるからだといふことが解つた。

秀才の詩に愛すなり白扇

馬 醉 木

細楷に茶經を記す扇哉

立 耳

▲芥子の花 城中にも城外の島にも、澤山の芥子の花が作つて有る、咲き亂れたる花の

中に寛袖の婦女子が胡蝶と共に往きつ來つして居るのは、阿片を探るのだ相だ、小刀の尖で芥子の坊主を淺く傷けて泌み出づる白い汁を器に受けるのである。

阿片採る娘二人や罌粟の花

馬 醉 木

馬を馭して耕す人や芥子の花

刀 江

秃山に二日の月やけしの花

同

芥子咲くや窓を開たる避難民

同

或は老いたるけしの實を手にして、殻を割つて其中の罌粟の實を旨さうに食へて居るものも有る。

▲涼み臺 軍隊が宿營して居る村には、樹の蔭、島の中、程好い處に必ず涼み臺が設けて有る。夕餉が了つて、行水が果て、半裸體の人が三々五々、月に對して吟嘯して居るものもある。戦に來て居るのか、避暑に來て居るのか、此れ丈では一寸判断に迷はれる様。

土塚から柳に架すや涼臺

刀 江



(十)

▲滿洲に青い草を見るのは五月から九月までの五ヶ月間である。今日九月八日、窓外を眺  
みれば高粱の穂は既に黒くなつた、玉蜀黍はちぎり盡されて枯葉が風に戦いで居る。

道側の牛骨馬骨秋の風 五 洲

ゴム襟の頸にひやりと秋の風 同

門口や唐黍かぢる唐子供 同

▲大豆は滿洲に於ける主要農産物である。高粱のほかには野を掩うて居るものは大豆である。  
粟、稗、陸稻なども少しはある。月の夕近處の畑から大豆を引抽いて来て、大釜に茹で、  
支那産の薄黒い岩鹽をつけて食ふ。

枝豆や裏の畑より徴發す 五 洲

枝豆に故郷の月を語りけり 同

豆葉半黃風裏愁、馬蹄沙冷古村秋、 有人隴上迎吾話、 說到時艱淚不收、

▲宿舍の主婦が小供に熱が發たからとて藥を貰ひに来る。

縹ひ靴の紅褪せて秋寒し

▲郊外で、三頭の驢馬が奇態な籃を駄して來るのに逢うた。何かと怪むと馬卒が、われは  
屠牛場から臟腑を集めて開原城内に賣りに行くのですと教へる、支那人は好んで臟腑を食  
ふので可なりの價があるものだ相だ、此間我宿舍の女共が大釜に肺肝、膈、胃、一杯に  
打込んで茹で立て、居るのを見たが随分氣味の悪いものであつた。

秋暑き小家に牛の皮を乾す

▲章江をおとづれてまた牛骨の御馳走でも爲たまへと戯れて居ると、程なく一皿の肴を持  
つて來た、紅大根の酢もみに、茄子の味噌焼、孰れも非常に鹽梅が巧く出來て居る、單調  
な牛肉料理に厭いて居る口には無上の珍味と賞玩した。

秋立つやコップに見ゆる酒のみ

▲地圖を見ても滅多に山の名は書いて無い土人も知らぬ、併し名が無くては實際に不便な  
ので若し圖上に標高が書いてあれば其儘に二〇三高地とか九十九高地とかいふ様に呼ぶの

# 信濃の寺町



年 三 軍 徒

(六〇三)

である。其れも一々には書いてないので、山の形を呼ぶことが多い。陣笠山、飯頭山、摺鉢山、海鼠山、乳頭山などは到る處に在る。秋晴や烽火を守る兵二人

續陣屋の二十四時 (昌圖府東)

○陣屋とは何ぞ

陣屋といへば嚴めしくもゆるしくも又詩的にも聞えるが、露骨に言へば、土民を叩き出して其家に軍人が這入り込んで居るのである。

勿論戦況次第では、樹下石上に夜を徹することも珍らしくは無い。現に我師團の實驗に於ても、雨中の泥濘に膝を没して五十餘時間立盡したこともあり、氷雪の裏に馳驅して五六晝夜を睡らなかつたことも有る。けれども其れは稀有なる惡戦の場合であつて、大概の戦闘には、假令其全経過は一週一句に亘つても、眞の露營を爲すことは三日か四夜に止まるのである。一會戦が終了すれば人員、兵器、彈藥、糧食等各種の補充を要するのみならず、天候も顧慮しなければならず、政治上の影響も受けることがあるので、大回の戦闘が到來するまでには、數週乃至數月の餘裕を存する。去れば戦地に在る日數の大部分は戦闘——殺傷——露營などに費されるのでなく、所謂陣屋の生活、即ち土民の家屋内にである。

余は今日の一日を選んで其生活の一斑を寫して見やうとおもふ。

○午前五時

雨期の晴天、清冷の水、線香、氷砂糖

○騒がしい物音。頭を掻けて障子の破れより覗くと避難民の炊事真最中。起つて障子を揚げる、颯と一陣の風が面を撲つて涼しさが頭顱の核まで沁み込む様。大きな嘘が一つ。

夜は今明け放れたばかり、門前の老櫓の葉蔭に薄れながらもまた星が光つて居る。今日は晴天らしい、雨期中であてには爲らぬが、せめて朝の間なりとも降らずに居て呉れよかしと祈る。

楊の茂みに啄木鳥が来た。雀の聲、百舌の聲やがてガア〜と鴉の聲も聞える。驢馬が長鳴きを始める、犬が豚を追廻す。パチリ〜と風を切つて響くのは門外を過ぐる支那馬車の鞭。

○戸外に出ると直に避難民の一人が手水を取つて来て呉れる。滿洲の水の冷たいのは非常

なもので、此の盛夏の際ですら汲み立ての水に三分間とは指を浸して居ることは出来ない。全身拭き了つて室内に歸つて土間の椅子に懸けて、鐘殻の香爐に線香を立てる。剩餘が僅か二十本許りに爲つて仕舞つた。今日の追送品に加つて居れば好いが。程なく從卒が茶を持つて来る。昨日分配を受けた氷砂糖をかざる。餘り塵埃にまみれて居るので湯をかけて洗ぐ、稜角が融けて舌觸が好いものである。

○午前六時

騎兵の來襲、一の釜で六家族、茶漬と茶漬、未來の從軍

○孤竹大尉來訪。『どうして這麼早くやつて来たのか』と問へば『晝間は僕の處は空けられないから朝食前に運動かた〜やつて来た』といふ。『今何處に居る？』『此處から三千米突許りの〇〇屯に居る、一昨日交代して退つて来たのだ。前の方も此頃は薩張り面白くないや、居ることは居るよ、敵の前哨と一里とは離れて居ない、此處からだつて敵と四里弱位のものだらう。四五日前少し砲聲が聞えたらう、彼の時敵の騎兵が遣つて来たのだ。なに砲數か、砲は三門持つて居つた様だつた。なか〜要心して来るからな、餘程引つけて』

遣つ付けて呉れやうと思つたが、駄目だつた。高粱が伸びたから騎兵でも少し距離が違いと判らない。損害か、敵に多大の損害を與へたりといふ報告に爲つて居るが、滅多に騎兵が屍體を殘して行かぬから判然したとは無い、馬は五六頭捕れた。味方は一人肘を打たれた丈だ。病人は不思議に少い、此の雨期中に運動を怠らせさへしなければ大丈夫だ、九月半過ぎたらめめたものだ。」

饒舌りついで茶を啜ると五六碗、やわ又來やうと馬に乗つて飛んで去て仕舞ふ。

○避難民等が飯を炊き了つた。一の釜で六家族分のを代るべく炊くので毎朝二時間以上を要する。大概はお菜なしに味噌か何かを替めて食事を済まして居る。

○手も食事にかゝつたが、いつも夜ふかしの故か朝伺はいかぬ、味噌汁も近來は餘り好もしくなくなつた。幸に菜漬があるので半碗許り茶漬を流して居る。

○某隊より使ひに來た兵と内の兵卒等が談話を爲して居る。

「勉強すると兵卒にしてやると分隊長が言はれたよ。」

「今迄は兵卒では無かつたのか。」

「左様だ今では雜卒といふものだ相だ、勉強をすると兵卒にも出世が出来る様に規則が改正に爲つた相だ、左様なるとおれも輻重兵二等卒だ。」

「併し其んなに急に出世したら却て困りはしないか、輻重兵に爲ると乗馬だぞ、やつぱり馬卒の方が佳くは無いか。夫に貴様は副馬の馬卒だから何も用はあるまい。」

「此迄の方が樂だが、二等卒になると部下に幾人もの輪卒が居るから強勢なものだ……併し其れには又其上に強勢な者が居るからな、寧ろ今迄の様に一人の主人に附いて居る方が好いかも知れない。」

又二三人加はつて來て、何かと待遇上の事項に就て論じて居たが、

「己れは此次ぎ從軍するときは通譯官で來る、翻譯大人々々で支那人には己の利くのは通譯官に限る。」

「己の利いた揚句には後手に縛られた大人もあるからな。おれは此度は中隊長だ先頭に立つて「前へ——」どうだ勇ましいものだらう。」

「何の貴様などが中隊長に爲つたら大變だ、戦闘が劇しく爲つて來ると何處かの地隙に潜

り込んで仕舞つて、おれなんか中隊長の搜索に出なければならぬ、大に迷惑だ、中隊長になりたければ露助の方に往つてなつてくれ。

「おれは主計に爲らう、主計が善くないと旨い者は食はせられぬぞ、大事な役目だ。」

「さうだ、時々後方に買物に往つて好からうな、オイ、持つて来られない様なものは見せられない様な土産は買はぬが好ぞ。一體貴様達は其望小なりで駄目だ、吾輩は二十年後世界相手の大戦争の時には師團長でやつて来るんだ。」

「エライ、併し哈爾賓停車場東端、井水監視兵陸軍一等師團長山田壽九平といふのは少々可笑しくはないか。そんな馬鹿な中隊長だの師團長だのと夢話は廢して、おれは本當に此次には通譯官で来たい。」

「通譯官といふものは日本語はかちやいけな、露西亞語が英語か、支那語か、朝鮮語か、何處か日本以外の言葉を知つて居なければならぬよ。」

「勿論だ。今だつて己れなんか立派な支那語の通譯だ、今日がチンタン、明日がミンタン牛がニユーで、豚がチユー、是品を賣らないか、這箇賣不賣、飯を興るが飯々進上……」

「フ、ン、其位な事出征軍人が知らない奴があるものか、そんなに通譯になりたければ一つの試験をしてやらう。待、此處に手帳がある、其れを彼方に持つて行け」と通譯して見い。

「そんな事はお茶の子だ、爾這個拿來」だ。

「馬鹿ッ、それは「汝是を持つて来い」といふ事に爲る。まるで反對だ、ハ、ハ、ハ、」

「それで實際解るから奇態だ、目といふものもある、手といふものもあるよ。這個と言はうが何と言はうが、現に品物を指して彼方へ」と目標を指しさへすれば拿來でも拿去でも關はぬのだ、通譯といふものは書物通では行かん、實地を知らなくては何の役にも立たない。

「然かネ、其れでは好いとして置かう「早く己の馬に餌を與れ」とはどうだ。」

「早く己の馬に餌を與れ」か。さうだね、先づ別々に言ふと、早くは快々の、己の馬は我的馬、餌をやれと言ふのは本當に言ふと困難いが、手取り早く言へば矢ッ張飯々進上で解るネ。之を續けて言ふと「爾、快々の、我的馬、飯々進上」

「成程、旨いものだ、其様して見ると通譯はつまり頓智ものだな。感心々々今一つ遣つて

見てくれ「貴様は露軍の探偵ぢやないか」と。  
 「ウウン、其んな面倒な込み入つた事まで解れば立派な高等通譯だ、捧げ銃だ。己れは未だ其處迄は行けない。一體又其な事は我々第一線の者には必要のない事だ。  
 「何故だ、  
 「そんな怪しい奴はイザヨザなしに打つた切つて仕舞はアね。」

▲午前七時 (原稿)

▲午前八時 恤兵品の贈還、碁石の代用

○先月貰つた恤兵品の扇の要がはぢけて仕舞ふ、他にも段々其様なものがある。戦地用の品は今少し堅固に作つて貰ひたいものだ、昨年交つた扇に比して遙に粗製である。殊に氣に喰ないのは頼章と落款のある書だ、支那人が見ると春書とでも見るのかボコペンナと言ふ。挑發的な顔料のつかひ方俗悪も極つたものだ。實は其れが恐れ多くも日本尊が少女の装ひして熊襲を刺さむとし玉ふの圖である。全體圖案の選定からしても間違つて居るとおも

ふ。不平まぎれに精査すると裏面に捺してある陸軍恤兵部の印も偽字を彫つてある。  
 ○酒保に買物にやる。黒と白と、ボタンを各二百個宛、是は碁石の代用だ。マツナ、酒、菓子、カタン絲等。

▲午前九時

清潔検査、炊事場分捕品、備領品、賣買品、開豆畑の犯罪

○毎朝九時に清潔検査を爲るのである。子が室は七坪許もわらう。最初我等が来た時は土人の二夫婦が七人の子供と一人の老婆と共に棲つて居たが、今は我れ唯一個の獨占に爲つて居る。兵卒ならば同じ廣さに少くとも五六人は住はれるのである。戦地に來て見なければ日本人の尊さは解らない、日本人の中でも軍人のエライ事、軍人の中でも將校の難有味は戦地でなければ解らないのである。  
 新聞紙ではあるが、四方の壁は奇麗に貼りつぶされて、天井は白金巾、窓はレースを一面に張つてある。レースといへば西洋的だ、此處では矢張支那的に窓紗と稱するが適當であらう。これで一匹の蠅も、支那人と同様我室内に入ること許されない。

郷里に居れば唯だ一人の下婢を抱ふるにも、給金の十銭高いとか低いとかいふ問題に就て、前年の帳簿を引出して見たり、隣家の振合を聞合せたり、歴史的・比較的の研究を爲す位のもの、職地に在つては食料も給金も關ひなしで、還りすぐつた個強の二十男を從卒だの當番だのと、一人ならず幾人も勝手次第に願使するのだもの、我一室の清潔法が申分なく行届いて居るのは當然の事、別段検査の要も無い。

予は清露折衷のズボケて大きな上靴を引すりつゝ、室外に出る。右手には一條の白楊樹のヌテツキを携へて居る。

先づ一番に検査すべきは炊事場。此處は元物置小屋で有つたのを、半分は常雇苦力の寢室に、半分を炊事場に充てたのである。食器と食料——食器も今は大分捕つて來た憲兵の分捕もあれば、土人のを横領したのもある。代價を支拂つて買取つたもの、即ち正當なる法律行為の完了に因つて取得したる物件もある。フライ鍋の如きは其第一種に屬するもので、這は遼陽陷落の時、停車場境内なる露國官舎前の道路上で分捕つたのだ。尤も此の分捕と言ふのは、強がりの必要ある時に用ひる名稱で、普通の場合には拾ひ物といふ。それでも

尙ほ語弊が有るとおもふ場合には斯様説明するのである。曰く、露人が遺棄したる物件、詳に言へば原所有主が其權利を拋棄し、當時何人の所有權の客體とも爲り居らざりし物件を「先占」に因つて取得したものである。法律上は勿論正當なる權原であるが、更に之を孔孟主義の見地よりして、俯仰天地に愧ぢざるものと謂ふべきものか否かといふ問題は目下大に思索を費しつゝある所で其結果は他日の機會を得て發表するとしやう。余輩の「先占」品は單だ一のフライ鍋に過ぎないけれども、若しも余輩にして一層の敏捷なる眼と、手と、さうして大なる膽とを有して居たならば、奉天會戰後に於ては金銀の時計、食器、裝飾品、行李等數多の貴重品をも容易に先占取得することを得て、戰友の間に敏腕大膽の譽を擅にするのみならず、歸つて之を細君に遺るの仁をも亦行ふことが出來たのである。

併しながら、其れには還送の際大連、營口、門司等に於て検査を受けて、まかり間違へば沒收、告發などいふ細々たる不名譽位は齒牙に掛くるに足らずとする底の磊々落落、天空海澗の胸臆をも要するのであるから、余輩の如き屑々者流が、多くの誇るべき先占取得を爲し得なかつたのは致方が無いのである。



支那鍋の大きな奴は飯を炊ぐ外に毎晩の行水を沸かすので、此は此宿舍の土人の常用品を横領して居るのである、即ち第二種に属する。

第三種の買込に因つて獲たる食器には、皿椀茶椀洗面器等がある、洗面器を食器に算したら、或は正誤の申込を受けるかも知れないが、現在の用途に於て飯櫃の役目を爲して居るからである。叙任的辭令を以てすれば飯櫃心得。飯櫃事務取扱、若しくは飯櫃代理である、代用計手、代用看護長などの例に依れば代用飯櫃と呼ぶが最も適切だ。或は不全飯櫃、擬似飯櫃と稱することも出来るが、最も明瞭なるは、原籍が洗面器で、寄留が飯櫃だといふのだ、勿論時々本籍地に復歸することもある。食料は米、麥、味噌醬油エキス、牛肉、乾魚、野菜、砂糖等は支給品で外に赤小豆、麥粉などは下戸黨の特別調辨に係るのである。以上の食器と食料とは蠅を避けねばならぬので、數個の箱の中に納めて、其出し入れ口には寒冷紗を掩うてある。若し此設備を等閑にして群蠅の簇集に一任したならば、椀の底の十グラムの汁に三百匹以上の蠅を見ることは珍らしくあるまい。而して其六本の脚に各一個の赤痢菌が附着し有つて、各微菌が最大の生殖率を以て、十分の速度を以て繁殖すると

假定したならば、二十四時間に増殖する時は、幾萬々の數字を以て記すことが出来るか、蓋し測り知る可らざるものであらう。何様恐るべきは蠅だ。水壺にも同様の蓋がある。

此等の蓋が確實に使用せられてあるか否、蠅の防禦が完全であるか否かを検するのが炊事場検査の要領である。

苦力の寢所に麥稈帽、寢具の犬の皮などが引散らかつて居るを見つける、早速小言を喰はせる。

○次に検査すべきは厠である、元來此家にも他の多くの民家と同じく、厠といふ特定の場所は無かつたので、予等到着の翌日、三人の苦力を使役して、少くとも兩三日間の排泄物を容るゝに足るべき丈の立方積を掘らせたのだ。圍壁も屋根も高粱稈であるから、降雨の際には頭巾を被り、マントを穿つて居なければ用を辨することが出来ないものである。厠には灰壺と灰すくひとが必要の備へ付け品である。上厠の度毎に灰を撤付しなければ此處は出づることが出来ぬ規定に爲つて居る。予は検査の方法として巧に光線の方角を接し

て、此の穹窿の底を窺つて、若しも露出せる醜物の有りはしないかと観察を遂げたが、幸に此處も遺憾なく規定が遵守せられて居ることを認められた。次に家屋の周圍井に庭内縦横に疏通せる排水溝を逐次に巡見する。若干の塵埃の停滯せるのを見付けて直に之が取除方井に方匙を以て浴く浚深を爲すべき旨を命じた。屋後の豆畑を見廻る。大に實つて居る。玉蜀黍の早いのは既に穂が出て居る。真桑瓜、白瓜、南瓜、瓢それ／＼に花も咲き實も生つて居る。葦島の中を通る際、一塊りの螺旋狀の汚物に逢着した。危く靴を汚す所であつた。不都合千萬な次第、いづれ避難民中の誰かの仕業に相違ないと思つて李を呼ばせた。李といふのは、白鬚の老翁で、我宿舎域内に在る避難民の總代である「大人何の御用ぞ」と恐まつて早速やつて來た。予は此の汚物を指して「道は何人の所爲ぞ。一定汝等のに相違ない、定められたる場所以外に這樣東西を堆積することは相成らぬ旨豫て相達し置きたるに、其禁を犯すやうでは今日より我宿舎内に其方共を差置く義相叶はぬといきましく。李は唯もう恐れ入つて百方陳謝をした後、さて言ふ様「此處を退去せしめられては雨露を凌

ぐことが出来ませぬから千萬此度限り大人宏大無邊の慈悲を以て寛恕せられたし。斯く言ひつゝ彼は地に跪きて叩頭幾番「此後再び令に違ふものあらば頭を断たるゝも憚みなしと言ひ添へた。予は飽く迄も嚴厲を保たねばならぬのである。支那人の如き顔色 觀測の巧な者に對して假りにも白い齒を見せたら、百千の規則も空文と化つて了ふのである。言語の不自由なのが意思の疏通を妨げるからでもあるが、今の處彼等に對しては錢を用ひるに非ざれば、鞭を用ひなければならぬのである。併し予は彼の嘆訴を容れて「然らば此犯人を搜索し來れ、而して該犯をして此の取片付を爲さしめよ」と吩咐ける。如何して詮議し出して來たものか、三十餘りの男が鐵を提げて、李總代と共に我が前に跪拜した。恐る／＼吾が顔に見上げて彼れ此れ申譯を言ふ。今は左まで窮追しなくつてもこの事だと思つて、予は白楊の鞭を打振りつゝ避難民の住居と歩を轉ずる。

▲午前十時 避難民、一坪に四人、白の上の一家族、般若、子供の寓

奥行二間に間口は六間、此中に四十六人の土人が避難して居る。一坪に約四人の割合であ

る。

元來此一棟は粉磨き小屋で、真中に大きな磨臼が据ゑてある。高粱や粟などを磨くのに牛、馬、驢馬などを使つて此臼を廻らせるのだから、日本では曾て見たことの無いほどの大きな臼。

四十六人の避難民は姚、宋、王、劉、張、梁の八家族より成り、最高齢者は宋老太々と謂ふ宋家の婆さんで、最幼年者は劉家の嬰兒で生後僅かに五十餘日、まだ名も命けてないものである。

三十餘人は婦女、十餘人が男子。男子の少いのは我が軍隊に備はれて他村に赴いて居るものがあるからだ。此處に残つて居る男子も日中は皆苦力に使はれて、大人は六七十錢、小人も十歳以上のものは牛馬の飲ひ秣ひなどの仕事をするので、二三十錢以上の日給を得る。戦争は彼等にとつて無論大災難ではあるが、下流のものどもは此んな仕事があるのので反つて利益とも爲つて居る。昨年あたり北京天津地方の苦力は日給二十錢を上らなかつたといふことだ、此地方に於ける勞銀は其れよりすつと低廉であつたらう。開戦以來露兵の屢つ

た苦力は日給一圓以上、大工、鍛冶の如き特別の技能あるものは二三圓も給せられた。併し折々は掛官が代るので賃銀を取りはぐることもあり、事に位ると言葉の行き遠で叩き殺される者もあつたといふ事だ、其れでなくとも常敗軍の露兵に附いて居ては、何時も生命の危険が有るのだから、二圓三圓の賃銀もあまり高いとは言はれない。予は室内に進み入つた。

室内の老少婦女はざわ／＼と居すまひを直すのである。併しながら彼等は例もの清潔検査であることを知つて居る。搖籃を揺ぶりつゝあつた劉婦人は、藍を把へて居た手を外し立ち上つて大人來了といふ。彼女は三十四五歳の女で、七人の子女を有つて居る子福者、蒼ざめた満州婦人の中には珍らしい、赤ら顔の屈強な二滿三平、膝にいはゆる多子宜男の標本的相貌である。

磨臼の上には梁氏の一家族が坐を占めて居る。主人の梁令理は例の苦力稼ぎに行つて留守中だ。郷婦人といふ二十二歳で斜視の妻と、母の六十五歳の赤い花簪を挿したのと、小喜といふ金時見たやうな愛らしい男の子と、令理の妹の十七歳になる額に緒い大痣のある

處女とが、大胡坐を掻いたまゝ、目禮をする。婦女はいづれも咬へ煙管だ。滿洲の婦人の煙管は二三尺位ので何時も手を放さない、煙を吹かさぬまでも大概の場合には口に咬へて居るが、餘程彼等の齒の力が強いものと見え、取落したのを見たことが無い。

長持の上に横臥せるは、我等の般若と緯名を命じてる四十左右の婦、姚氏の妻で林婦人といふのである。笠え立つた眉骨、底光する眼球、肉のない隆い鼻、殺ぎ落した様な額の尖り、陰險毒悪の性質を暴露して、或は耳の根まで裂けた縫目が有りはせぬかと疑はれるのである。彼女は頻に阿片を吸ひながら其頭を傾けたまゝ、チロリ〜とやつて居る。其傍に侍立して居るのが嫁の二十許りな陳婦人。

南窓の下に高粱稈を一尺許り積み重ね、其上に我糧食の空吠を敷いて一坪半許の座敷が出来て居る、王氏の一族が六人、其中に生後十月位の幼児、齒もまだ生え揃はないのに生葱の白根をしやぶらして居る、斯くてこそ蕪蒜の嗜好は興へられ、特異の支那臭味は養はれるのであると感じた。北窓の下東壁の根、そちこちに板を列べて宋、張の各家族が一仕切を寫して居る。斯様に一室に四十餘人が同居する場合に於ても尙、どうにか區域を設けて、

各自の占領部分を形成つて居るのが、可笑しい様にも思はれるが、是が人間の本性であらう。南の壁の中間に棚を作つて一座の神位を設けてある。室内冷く見まはしたが、先づ大概に清潔が保たれて居る。其は其等である。過般殺倉に避難して居た十二三人の者共に、清潔法施行の不完全な爲め即日立退きを命じたことがあるのだが、此室の者共も、戦々競々で居るに相違ない。此室隨一の愛嬌者たる先の子福者婦人は予に向つて、

「大人、乾淨不乾淨」

是れは予に検査の結果を訊ぬるので、清潔か否かといふのである。予は室の入口と、室の隅々にと石灰を撒けばそれで好いと答へた。彼等は漸と安心の體、先づ今日の一日は雨露を凌ぐことが出来るのである。

子福者はニコつきながら大人請坐と會釋する、直譯すると「大人、請ふ坐せよ」で仰山らしいが、此處等は滿洲の片田舎の事だから「おめへ様、坐らつせ！」と譯するのが適切かも知れない。彼女は重ねて請坐を繰返す。磨臼の上の一家族は席を胡坐の足を縮めて、此處にと手で叩いて席を譲る。此度は支那一流の應接法として例の如く年齢と子女の數を訊く。

予は幸にポケットに、昨日着いた子供の寫眞が有つたのを取り出して見せると、子福者は一見の上、磨臼の人々に交す。何か口々に評する様だが意味は解らぬ。やがて問ふて曰く「此お子達は男か女か」。成程無理ならぬ問だ、我が子供等は皆和服で撮影つて居る。後方の兵站線では、浴衣がけの日本風俗も澤山に在るけれども、此處邊の滿洲婦人は、日本人の服装としては、軍服の外見たことがあるまい、此寫眞に對して男女の服装を看別けることが出来ないのも當然だ。

子福者は更に幾多の問を續發して来る。第一は予が妻の年齢である。予は故らぬ尋思一番を装つて、さて「忘丁」と言放つと、彼等は等しく眼を睜つた。「忘丁」彌老は自己の婦人の年數を忘れた……と怪しむ。「家を出て多くの月日を経たものだから」と低み聲に語れば、流石に婦女の情、彼等は噓と諸聲に嘆息を漏らすのである。

彼等の好奇心は更に予が妻に就て詮索を續ける。

「夫人はお脚はどうです。」

予は何の事か一寸判らないので問ひ返すと。

「お脚は大きいのですか、小さいのですか。」

成る程、支那婦人として有理至極の質問と獨笑ひしながら、

「大きいのだ、日本の女は纏足を爲ない。」

「鞋はどんなです。」

と尋ねたるは、今しも窓の下で鞋を縫つて居る主婦人である。予は日本の鞋は支那の鞋とは異ふ、予が今穿いて居る皮靴とも差ふ、木で作つた高いもので、極めて軽いものだと言ふ様手眞似で、詳に説明を試みたけれども、到底彼等は其形状の如何なるものかを想像し得なかつたらう。

搖籃の中なる嬰兒が啼き出した。予は閑談を罷めて豚小屋検査に赴いた。

▲午前十一時

牛の蹄、イッナ、靱帯、泥坊の聖、鬼退治、天井の豚

○東側の瓢棚に、大きな牛の蹄が引懸けてある、また生々しいのだ。不潔なものを、誰が所爲ぞと尤ひれば、馬卒が出て来て、其は乾かして空氣枕に爲すのですと答へた。

○酒保に買ひ物に遣つた兵が歸つて來た、マツチは有りませんが、砲兵にも、工兵にも、廻つて來ましたが、何處にも賣切れて居ますといふ。明日城内まで買ひに遣らねばなるまい、三里以内には賣る所がないのだ。

○常雇苦力が、今日は一日お暇を願ひたいと申出でる。母親が死んだといふ理由である。此の一月許りの内に叔母が二人、祖母が一人、従兄弟二人死んだと言つて暇を乞うたのだが、此度は母親が死んだといふ。どうしても眞實とは思へない。「虚言を吐け、其んなに人が死ぬるものか」と言へば「虚言ではありません、城内には毎日百人以上も死にます」といふ。

傍から一人が差出で、「此奴是迄人を殺しては女房に逢ひに行つたのです、皆虚言でありませす」さうらしく思はれるので「以後はお前が死んだ時でなければ暇は呉ない」と言ひ渡す。

○今夕は茶班の會合を開くから午後六時より夕食携帶で集合せよといふ通知が來る。缺席する旨を回答してやる。義太夫班、謡曲班、詩歌班など、各班を組織してゐるのだ。後

方には常設舞臺も出來て居る相だ。

○窓縁に置いたカラーが失くなつた、眼爛れの小僧が偷つたに相違ない。此間磁の粉を盗んだのも彼だつた。彼だらうと見當をつけて「棒の端に赤い球を振りつけた品」を取つたらうと尋ねたら、不辯と答へて直に持つて來た。おまけには是迄盗られた事を氣付かずに居たサボン函と西廂記の帙も一緒に差し出した。此時彼は臉上に一點羞恥の念も現はさなかつたが、同時に些個の愛惜の意も示さなかつたのは、大に予をして感動せしめた。想ふには彼は他の物をチロヨマカスといふ事柄其ものに、多大の趣味を有するので、敢て利慾の爲めに泥坊をするのでは無いらしい。して見れば彼は恬淡なる泥坊、廉潔なる泥坊にして、寧ろ泥坊の聖なるものと謂つても宜しい。予が聞いた所では出征軍人中巨萬の金圓をチロヨマカシたるものあり、現に其若干は刑法上の處分を受けたものもあるとか。彼等が其名譽を賭して、尙ほ泥的趣味の満足を得やうとするの熱心は、前記のチャンコロ小僧と優に其伍を同うするに足るけれども、商人の手を假りて留守宅に送金するとか、或は軍用行李の底に忍ばせるなどに至つては、好漢惜むらくは泥法を知らずと、此一枚量の嗤笑を買は

んこと必定である。

○避難民中第一の働きものとして我等の間に認められて居る一婦人がある。彼女は今大きな素焼の黒鉢を抱て来て、軒下で洗濯を始め居たが、室内より出て来た姑——麩に阿片を吸つて居た般若婆が、近寄るより早く其處に在合た薪を取上げて、婦人の肩節をピンチャリ撲り付けた。不意の物音に、炊事場に居た苦力も、兵士等も、共に出て見た。婦人は肩口を押へて顔を掩うて、地上に打伏て居る。日本兵が見に来たので、鬼婆は黙つてコンコンと、また室内に引込んで仕舞つた。

毆打の原因は、我等の間に頻りに揣摩を試みられるけれども、一向に解らない。併し、是迄、度々、鬼婆があの婦を打つて泣かせたといふことを証言するものがある。「不都合な婆だ、毎日、あんなに善く働いて居るものを、慘酷な目にはせられるのは、如何にも非道な婆だ、一つ懲戒して遣らう」といふ動議も出たが、今直に婆を懲らしたならば、若いもの、最負をする様に見えて、彼の婦が却つて迷惑に爲らう。我々の滞在中は好いか、居なくなつてから、あの婆が如何なる復讐を爲ないとも限らぬ。それよりも、今に、あの婆に何か

用事を吩咐けて見るのだ、彼んな奴だから態度拒びに相違ない、其時ウンと婆を痛めつけてやるが好いと、反對説が出て、其れに一決した。以後十分の監視をして適當の機会を逸せず、假借なく懲戒を與へやうと、鬼婆退治の計畫は、當分秘密に保たれる筈である。先刻から假小屋の側に立つて居た嫁は、元の處にまた踞座んで、シヨンポリと洗濯を始めやうとして居る。彼の兩眼はたしかに腫れて居るといふことが、窓紗越しに看取せられる。天井を張つてある白金巾に、此間からの霖雨で雨漏りのしみが出来て居るが、其一が恰も豚の糞の様に見える。

▲午前十二時

射撃演習、鐘頭、老婆の哭聲、泣き方の精流、蛇、蟻叩き、

○朝から前面に砲聲が聞えて居たが、風向が變つた故か非常に近くなつて、二千米突位かとも思はれる。昨今の情況では、其様に近く敵が来る筈は無いがと、怪しみながら通報の綴込を調べて見ると、果然射撃演習だ。

○晝食に飯頭を作れと命ずる。暫く経つてから、飯は如何しませうと訊きに来る、つぶし

船にして鹽氣を多くせよと答へる。

○「裏の沼の畔に土人の婆が泣いて居ります、ひどく泣いて居ります」と一人の兵が走つて来て報せる。

何事かと思つて、彼兵に案内させて後門を出て、白楊の密林に入る。樹陰の軟かい草を踏んで行くこと百米突餘にして、沼の縁に出た。雨水を漕へて沼は二三反歩にも横がつて居る、其中に其處此處と、一簇、一簇、茂つて居るのは細蘭である。

沼の岸の大柳の下に、成程一人の婆が水に對して坐して居る。案内の兵はいふ様。

「今、休止したのでせう、先刻は大きな聲を張上げてオイ〜泣いて居ました。

少し遠退いて様子を窺つて居ると、果して始めた、泣きだした。オイ〜シク〜、段々に聲が高まつて、遂には何か極き口説く様に聞える。

進み寄つて事の由を尋ねたいと思つたが、餘りに泣き方が劇しいので、言葉をかける機會を得ない。彼是する中に、土人の一個が驢馬を牽いて水飲ひにやつて来た、隣家の者で顔を知つてゐる奴だ、差招いて「何を婆さんは彼んなに泣くのか」と問うたら、其答へは斯

様である。

彼の老婆の孫が今日死んだのだ。亡孫の父は三月許り前、此村に始めて日本兵が来たとき、病弱は無いかと訊ねられて、沒有と答へた處が、言下に日本兵は彼を銃殺して立去つた。彼の婆は嫁と孫と三人きりで、其後寂しい生活をして居たのに、今又其の孫も突然の病氣で死んで仕舞つた。彼の家は全く祀を断つことに爲るので、彼んなに哀んで居るのだといふ事。

子は實に氣の毒に感じた。日本兵が左様に謂れなく土人を害する筈は決して有り得可らざる事だから、其は何か外に已を得ない理由が有つて殺したのであらう。或は全く誤傳かも知れないが、併し彼の老婆のかゝり子が死んだのは事實であらう。氣の毒の身上と感じた。老婆は今泣き止めて居る。

林の彼方より三十歳餘の婦人が來かゝる。

必定其嫁であらう。夫を失ひ子を失つた憐むべき寡婦であらうと想つたので、今の男に尋ねると、「否彼女は隣家の者」。



何をしに來たのかと、吾等は皆木蔭に避けて眺めて居る。若い女は老婆に近づいて、何か  
二言三言挨拶を爲る様子である。それから、携へて來た長煙管で、スバ〜と煙をふかす。  
やをら老婆と共に首を俛れた。やがて始めた、二人とも或は高く、或は低く、痛々哀々と  
泣き立たのである。

四五分経つと、ピタリと泣き聲が止む。若い女は又老婆に挨拶をするらしかつたが、身を  
翻へして元來し方へ影を隠した。

間もなく此度は四十歳の婦人が來て、前の通り一頻り共泣きをやつて立去つた。

是が此地方の慣習でもあらうが、去りとは餘りに泣き方の規則正しいのに馬鹿々々しくな  
つて、哀といふことはいつか我念頭より消えて仕舞ふ。葬禮に泣き女といふものを履ふと  
いふ支那の事だから、此位の事は當然かも知れぬ。泣哭哀啼といふことは一の禮式として  
形式的に巧に實施せられて居る様だから、或は泣き方にも南宗かと、北宗とか、古派とか  
新派とかいふものが有るかも知れない、其うすれば、シヤクリ泣きが信個體、オイ〜泣  
きが流暢體など、分類も自然に出來て居るわけである。

○ 歸り路に考へると、此んな 叢に一つも蛇を見ないのは不思議だ。蛇始も今年はまだ見  
ない様である。

○ 柳の枝を折つて歸つて、ボール紙で蟻叩きを作る。

▲ 午後一時 田木舟、悠久の生、

○ 魚類の鐘詰で、まづい午餉を爲す。

○ ハンモックに乗る。

右手にステッキを持て居て、時々壁に突張ると程能く揺れる、好い心持だ。如是してさへ  
居れば南京蟲も蜈蚣も恐るゝに足らない。昔は廁の中の讀み物として曆を携へ行き、一回  
で一箇月づゝを暗誦した人があつたとか聞いたが、手がハンモックは語學練習所である、  
併しながら手が記性は十二回で一年の曆を記えることはさておいて、チャーマン、コース  
一冊をひねくつて居ること數年に及んで居るけれどもエーとゲー、エフとエヌの見わけが  
未だ怪しい位なもので、二三年前に引いた朱線は今も尙矢ッ張り同様の價を失はない。此

鹽梅では二十年が三十年経つても、此本は依然予が獨逸語のオーソリティーたる地位を保つであらう。尤も、今日に於ては、此本は予に取つて教科書たる役務の外に、一層有益なる働きを做して居る。其は外でもない、醫治用として役立つて居ることである。睡眠の衛生上極めて必要なることは動かす可らざる事實である、殊に近來の新聞で見ると、大に午睡の必要が稱道せられて、二千年前の宰予子までが引合に出され、亞米利加の、或は横濱の、某某女學校に於ては、既に睡眠が立派なる科目とまで爲つたといふ事である。予の如きは夙に其必要有益なることを看破せる先覺者の一人で、常に實踐躬行を以て自ら任じて居るのである。予が午睡を爲さんと欲するに當りてや、乃ち此のハンモックに乗る、而して此章編輯に断たんとするデヤーマン、コースを手にして、默念一番、好い加減な處を披けて見る、蹇の驢馬を牽いて羊膺の坂路を辿るとおもふ中に、いつしか香風習々身を包む……とまでの事もまさかにならぬけれども、兎に角安らかな睡に入つて仕舞ふ事は受合ひだ。ハンモックを揺ぶり、本を讀みながら睡るのは、例へば搖籃の中に寝ながら子守歌を聞く様なものである。或は舟に乗つた様の氣持もする。

舟だとすれば此ステッキは恰然まづ糧だ。

どんな舟か、獨木舟だらう。

南洋の、何處か小さな島に住まつて居る。食ふ事は天然の供給に任せて、椰子、鳳梨……外にも何か有るに違ない、乃公の小さい腹を膨らすに格別不足は感じまい。島の頂上に巖がある、巖の蔭に窟がある、其處に棲まはふ、朝暾が窟の奥まで差込むとき、眼が覺める。太きな欠をしながらボンヤリと巖の上にとり起つ。萬頃の波平かにして彷彿一大碧鏡を開いた様、其間に點々として無數の鳥が……見えるが好いかな、悪いかな——寧ろ乾淨と何も無いことにして置かう、左様だ、何も無くて青一髪の水平線上に變幻極まりなき亂雲奇峰。

大きな白い鳥が一群何處を指して翅けるやら。

二三十匹の仔羊が巖の上に驅上つて、我脚に纏れ着く、やがて、大きな親羊が來て巖の下に踞坐する。例の如く其の脊に坐ると、羊は徐に身を起して濱邊に向つて下る。子羊もゾロ／＼と追ひすが、踏みしだく草の香りが鼻を撲つて來る、好い氣持だ。朱櫻の老樹

の下に到つて羊は蹄を駐めた。蟻かまの樹の根の間に一池の清泉が、ブク〜と白い砂を噴き上げる。島の神様の脈を搏つて居るのだ、ブク〜又ブク〜。

日に〜此清泉を掬んで渴を醫すれば、つまり島の神の脈管から悠久な靈液を我が脈管に傳へるのである。取りも直さず乃公も悠久の生命を有するわけなのだ。悠久、悠久も好いには好いが、悠久はどうも變化に乏しくあるまいか。果して然らば乃公の大嫌ひな單調に陥るのだ。去年の五月に家郷を出てから、八月の末海城附近に居た頃には、一年も二年も經つた様に思はれたが、其れより更にまた一年は、暫且の間の様にしか思はれない。最初の三月は離杯、萬歳、上陸、行軍、蒜薺の臭ひ、銃砲の響き、兵燹、屍首、高粱、濁水……耳に觸れ目に遮るもの、悉く新奇にして、實に變化に富んで居つたけれども、後の一年は前と同一の事を繰返したに過ぎない。大捷利の何のと言つた處で、外國で公債の直段が若干上つて、内地では祝杯と萬歳で喉頭加答兒が若干殖えて、戦地では陣地を若干進めて、新車の南京蟲に食はれると言ふまでの事、別に格別耳目に新しき變化を味はしむるとは無し。つまり單調に爲つて來たので、後の一年は記憶にとまる事柄が、反つて前の三月に若

かない、然て見れば、此島に、よしや百年、千年、萬億年、生活を續けたからとて、春宵の一夢にも若かぬのではあるまいか……

▲午後二時——三時 赤十字旗の改正、石竹、桔梗、川原のまゝ

○眼がさめると三時に近い、机の上に四五通の公文が來て居る。

○某少佐が内地に轉任する相だから訪問に行く、此處から五千米突許の北方だ。途中で野戦病院の開設してある村を過ぎたが、木立の上に高く掲げてある赤十字旗が、五六百米突に接近するまでは、日章旗と看別けることは出来ない。此間度々雙方で非難を招いた赤十字條約違反の行爲を避けるには、是非共此旗の制式を改めて、少くとも、肉眼で千米突以外より、分明に他の國旗から看別けられる様に爲なければならぬ。

耕されない野山は石竹、桔梗、百合其外の花が咲き亂れて居る、夏と秋とのとちや雜である。少佐は恰好在宿であつた。また二三日は立たないとの事、荷物も取片づけてない。机の上

には野菊と石竹が砲弾に挿てある、巻烟草、灰吐きは鐘詰の殻、硯は支那品、湯呑は西洋品、ブリキ薬罐に茶の煎じたのを出される、點心は不似合に美事な菓子、追送品だ相だ。別に言傳を頼むとも無い、雙方も死なぬ積で再會の愉快など談じて別れる。

○細い流れの岸に五六十人の兵士が散點して各洗濯ものをして居る。川原に砂いちりをして居るものもある、小魚を漁つて居るものもある。

▲午後四時

涼み棚、犬の蚤取り、犬の履歴

○後庭に涼み棚を構へてある。部内の人々が其棚の下の日かげに犬の蚤を捕つて居る、五人で各一匹づゝを受持して居るが、二匹は他處の犬である。

傍には洗面器に水が湛へられたてサボン函も揃へてある。蚤取が了つたら手を清めやうといふのであらう。計劃は萬事用意周到なもの。

狎を擔當して居た一人が起ち上つて腰を伸しながら、「毎日斯んなに捕つてやるのに、善もまア發生ものだなア。洋犬を筆つて居た一人は俯向いたまゝ。」

「犬に發生のでは無いよ、室内に居るのが此に移るのだ。」

「其うかも知れない、左様すれば犬のを捕つてやるのは、つまり室内のを捕るわけになるのだ。」

「左様々々、他の事は吾が事とは此事だ。成る程々々と言ひつゝ、狎を引起して坐下と喚べば、狎は後足で坐つて恰も招き猫の様の姿勢と爲る。走龍と合すると直に馴け出す。追々に外の犬も蚤捕りが終つて、それ／＼に他處の犬は出て仕舞ふ。残つた三匹の「權助」

「田吾」「奎兵衛」の三疋が我等の飼犬である。予は茲に彼等が履歴を語らう。

○「權助」は杜の黒犬である。ヒヨロ長い間の脱けた顔、純粹の野良犬種である。殊に其體の格好が、人間ならば汚染れた兵兒帯を引掛けた様で、右巻に寛く捲いた尾は、火用心の烟草入が今にも落つち相な状態である。併し彼の出身は三匹の犬の子中最も確なものだ。彼れは開原城中の趙といふ豪家に生れたのである。趙氏は數代の富限で其邸宅の宏壯なと、日本ならば十萬石以上の大名屋敷である。當代の趙有祥は三十餘歳の壯年紳士で、妻妾四人、子女十八人、眷族僕婢を合すれば六十餘人の大家族を支配して居る、軍隊ならばまづ

此點から見ても小隊長位の價はある。彼れは七品頂戴を有して居る、其禮服など、言つたら、非常に華麗なもので、逆も貧乏士官の月賦拂未済の正装など、比較に爲らない。平常其手の嵌めて居る腕輪ですら何とか言ふ玉で、千兩以上の價がある相だ。彼れの倉庫には無数の奇器珍寶を藏して居るが、王羲之の書などは眞筆ばかりでも十幅以上あるといふ。此程日本の或る大人は文徵明の書一幅を銀票百圓とかで買つて、掘り出しものをしたと大歡こびをせられた、勿論其れは偽筆で——若かも日本人に出して見せる位の偽筆だつた相だが、文徵明の偽筆ですら銀票百圓の價があるものならば、王羲之の眞蹟は定めし金貨の幾萬圓にも價するのであらう。

趙氏は金持であるのみならず。随分智恵に富み掛引に長じ、おまけに非常の學者といふ評判である。詩も作り文も草するさうであるが、予はそれを見たり事がない。幸に其有名なる書は數回拜見の榮を得たが、其巧拙は鑑識の明がないけれ共一驚を喫した。何様餘程の大家と見えて字畫杯は一向に頓着なく書き放しである。多分は彼れの見識に據つて、字畫の増減、偏旁の流用を行つたものであらう。兎に角六書以外に一生涯を開きて、我より古

を爲すの大見識に至つては天晴の者と言はなければなるまい。此人をして日本に在らしめたるならば、上田博士等の如く文部省假名遣ひなど、窮屈に、綴字法を、強ひて歴史より分離せしめて、口音と一致せしむるなどの論を吐かず、今一層進歩して、キヤウ、キョウ、キヨ、ケウ、ケフ、無礙、無滯、流通自在、八方圓満、行き當りばつたりの假名遣法を主張して、大に我等無學者の便を圖つて呉れるに相違ないものと思へば、彼が支那人であるとは頗る遺憾な事であるし、又一方より考へれば此の哀れな滿洲の果に上田博士——大學教授以上の大見識家が居るといふとは實に非常に感心すべき事ではあるまいか。

彼の技倆と見識とは、無學なる土人の間にも認められて居る様だ。或は彼に書を乞ふを以て彼の富に諂ふものなりと爲すものもあるが、其は貧乏秀才などが岡燻の餘り放つ所の惡聲に過ぎない。論より證據、彼れの書名は博雅なる日本人士の間にも亦膾炙して居るのである。幾多の軍事郵便物中に、「三樂堂主人」の落款ある彼れが筆蹟を封入せるは少くあるやう。

話は岐路に走つたが、予も一度刺を趙七品に通じて、其清姿に接せんことを求めた。

彼は快く諾して直に予を其書齋に請じ、酒菓を供した末、數十點の珍寶——花瓶、茶器、硯、書畫、些の惜し氣もなく觀せて、詳かに其絶世の奇貨たる由を説き示し、一々に其價額をさへ教へて呉れて、實に丁寧親切を極めたのである。終りに彼は那個か要らぬかとまで言つて呉れたけれども、予は羞かしながら銀票の百圓などいふ大金を所持せぬので、殘念ながら一品も所望すると能はず、あたら稀世の重器を家に傳ふるとの出來ないのは深く子孫に對しても愧ぢる所である。其歸り掛けに、門の側に大きな牝犬が四匹の子犬に乳を舂ませて居るのを見て、之を興れと強求つて、其一匹を鞍囊に入れて連れ歸つたのが、今の「權助」である。

○「田吾」は白に赭の斑で牝犬。雜種の瘦せ形の小柄である。彼は今五洲子に依つてお招き、チン／＼お預け等の諸術を日本式を以て訓練せられつゝあるが、此數日の成績は大に見るべきものがある。彼女は甚だ伶俐で付度が好い。夫の眼色一つでは、髪のもの屑屋に叩き賣つても、來客の満足を得なければ、女房の甲斐性がないとでもいふ賢である。此處に前進して來る途中、予は不圖路を錯つて迷子と爲つた。トある山に上つて地圖を按

じて居る中に、ツヒ近所に白楊の木立を見つけた、滿洲では大抵の木立は墓地である。其木立の傍には一軒の家がある、其戸口に犬が見える。遠目で能くは解らぬが姿勢の好さ相な小犬である、咽喉も乾いて居るから湯呑みかた／＼其家に行つた、多分墓守の住居らしい。犬は近寄る吾れを見て、けた／＼ましく吠え立て、家の内に逃込んだ、予も續いて道入つた。

炕の上に老夫婦が一童子と食事央であつた、予は湯を求め道筋を問ひなどして、暫く老翁と談話の末、遂に此犬を貰ひ受けた。綱を着けて牽かうとするけれど、決して歩まない、據無く馬卒に抱かせて行く中、通行の土人を道案内、旁強迫して此犬を抱かせて來たのである。

「李兵衛」と命名けたる犬こそ純粹の滿洲種、先日魚捕りに行つた節貰つたので、彼の兄弟二匹は其母と共に五百米突許りの隣村の豆腐屋に居るのである。彼れは牡犬だ、十分成長したら生れ立ての馬の子位には爲るであらう。極めて實直な質で一聲屬しく叱らうものなら、逃出すことは爲ないで、直にコロリと仰向に轉げて哀しい聲に宥怨を乞ふのである。

彼の毛は極めて軟かで光澤がある。「襟巻に好いな」とは蚤捕りの度毎に何時も下される評であるが、之が謙と爲つて、冬營中に此評語が實現せられなければ好いと、予は密に杞憂を懐いて居る。

夏の陣屋午後五時

角力、小供玩具、大方山の印、名譽回復、石竹、瓢の杯

▲角力が始まる。土儀は宿舍の西側に設けて、四本柱白楊樹を根付のまゝ植付てある。近隣の兵士三四十名集合して居る。おもひ／＼の禪、携帶天幕を用ひたのもあれば、手拭を繋いだのもある。一番奇抜なのは慰問袋を綴り合せたので、更紗形友仙形の金巾、白、淺黄、爵金の木綿のも雜つて居る。「栃木縣宇都濃宮町」云々と寄贈者の氏名が、前袋に見えて居る。一番又一番取進んで、段々と興味が深くなつて来た。予は始め椅子に靠つて見て居たが、どうしても胡座でなければ力が入らずに、面白くない、高粱稗の上に座つて仕舞つた。一體自分は興行物の中で角力とピョットコ踊が大好きだ。斯んなことを云ふと、趣味が下劣だからと、いつて碧城君に罵倒される、けれども實際演劇が一

番嫌ひだ。其理由も尤もらしく陳べて見たいが、格別深い理由はない「演劇は女の觀るものだ」と父兄に常々言聞かされた感化かも知れない。兎に角二幕と續けて見やうものなら頭が痛み出して来る、或は我身體の事情が許さぬだらう。若しも芝居の土間が、座ることの外に横臥する事も腹這ふことも出来、乃至は周圍が閉靜であつて、轉寢の夢も妨げない様な設備に爲つて居たならば、何に、自分だつて、齧でも食ひ酒でもチビチビやりながら、半日位の觀劇を我慢するの勇氣が無い事があらうか。

更に予が演劇嫌ひの原因を索むるに、左の如き次第もある様だ。予は想像を逞しうする事が大好きだ。然るに演劇の脚色はほん前から判つて居るので、觀覽の間想像の餘地が無い。例へば華麗に装うたる刀、緻密に精巧に組立てられたる汽車、道様東西は最初の一瞥にこそ小兒を嬉ばしめるけれども、小兒は直ちに厭く、到底同一の玩具に長く慰められるものでない。其よりも寧ろ一本の棒を興へよ、棒は刀にも爲る、槍にも爲る、鐵砲にもなる、蕎麥屋を似ねて泥を打ち伸べることも能る、ホラ避けくと放尿の彈道に擬する事も能る。自在に想像上の形態を附加して、其用途を變化

せしめるの餘地が饒かである。予が演劇嫌ひなのは、小供が複雑精巧なる玩具を餘り喜ばないのと、半面の理を同じうするものではないか。

角力は双方士俵に現はるゝや、予をして希臘神話的の幾多の想像に入らしめる興味の外に、今一つ愉快なのは、比較的情實が無い。實力競争に依て、其勝敗と地位とを定めるのである。理窟は置いて、無茶苦茶に角力好きな予は、前年或處で太刀山、有明、錦洋等の數人と會したことが有つた。酒を飲んだ、碁を打つた、腕押しをした、指角力を取つた。無邪氣なる半日を過した末、予の軍帽に太刀山の印を押さしめた、彼が指環の金印で……。其時予はチト月並の感慨ではあるが、つくづく想つた——好漢彼れは、天下の力士として、上は王侯將相より下は走童歩卒に至るまで其名を識られ其實力を認められて居る、多分後世にも亦不朽の名を遺すであらう。予は如何、此の後幾十年の苦酸を嘗めた處で、官に在つても、商と爲つても、クライブ的冒險を行つても、フレーザー的事業を企てても、彼が角力壇上に占めるが如き地位に達することを得べきか。否々自己の従事する職業の社會に於て、二三十人の中に屈指せられることすら艱難だ。あゝ予は

遂に幕の中にも入ることは出来ないのだと、如何にも情けなく感じたのであつた。予が帽子には今も尙ほ太刀山の印は鮮かに其痕を存して居る、而して予が當時の感慨もまた消えないのである。

角力つて居る兵士の内に、抜群の體格力量を備へて、少なくとも此村に宿營せる總ての兵士に超越せる金井といふがある。其れが如何にも善く太刀山に背て居るかの様に思はれる。

部内の者も交々出る出で角力ふ。予にも一番如何と勸めるのであるが、予は決して角力は取らないことに決めて居る。實は先日取組んで、三番勝負に二番の勝を得た事があつたが、明かに故意と勝を譲られたのである。元來予が角力を取ると云ふのは、何も力自慢や瘦我慢では無い、運動の爲めだ、腸胃衰弱の豫防、赤痢、虎列拉の被の爲め、滯留中の惰氣を醒さん爲めなるに拘らず、殿様御相手と云ふ取り口をされては、先方は素より此方も身が入らぬ、力が入らぬ、つまり運動の爲めと云ふ本來の主義を没却する上に、故意敗けをすると云ふ相手は多少の徳を損する。故に爾來運動は機械體操で済することに



定めて居る。

澤山の土人が環視して居る、其内に脅力に富んだ苦力がある、昨日彼は兵士等が力持ちして居る處に来て、一人も擡げることの出来ずにあつた二百斤以上の大石を、安々と引抱へて頭上に高く差し上げた、武擧落第の馬賊かも知れない。其が爲め日本兵士は多少面目を損じた様の氣味もあつた。土俵の上の一兵士は、今しも此の苦力の姿を認めて昨日の名譽回復との考もあらず、備來々と戯れると、暫しは躊躇して居たが、苦力は深くも辭せず土俵に上つた。辨髪をクル〜と頭顱に捲きつけて、兩手の袖を爪繰つた。行司はブリキ製の軍配を持つて、眞面目に氣配を量つて居る。日清兩國の優劣如何にと見物一同堅睡を呑んで居る。ヤット立上つたが、サテ脆いもの、何といふ手知らぬがアツ氣なくも二番共、地響打つて苦力が投げ倒された。多分彼も予と同じく再び角力を取らぬであらう。

▲碧城君來訪、歸りに窓前の石竹を見て鉢ながら與れといふ。最初此家に來た時は、せめて此の石竹の花が咲くまで滞在すれば好いと祈つたに、何時の間にか花は咲き盡して、

残りの花も絶え〜に爲つて仕舞つた。休養も好いが、二月も三月も同じ所はおもしろくない、早く前進して呉れ、ば好いとおもふ。石竹の鉢に隣つて瓢の鉢がある、圓形の小瓢が生つて居る、多分直徑二寸以上に、生長しまい、若し此れが老ゆるまで此家に居つたら、杯に作つて裏面は漆を塗つて、外に何か紀念の文字を書かうとおもつて居ると話せば、碧城が己れにも一つ分けて呉れといふ。彼は物を貰ふべき最少の機會をも逸せしめぬ男である。

午後六時

ボヤ、富士登山、慰問袋、愛兒の消息、此から致しません、碧は鶴白紙は白紙

▲風呂が沸いたと報せて來た。此程漸く鑿を探し出して地中に埋め、其周圍を火氣の通ずる様にかまどを築いたのである。

▲ランプのホヤが破れた。内地で十錢位のが一圓近くも取られる、それでも此の近傍數里の處に賣る所はない。

▲郵便が來たが、何故か新聞は一枚も來ない。富士に登つた秋村から、頂上の印を捺した

葉書。郷里の村役場から慰問状。大袈裟な文句を用ひてゐるのは頗る閉口だが、同村出身の出征者人名隊號表に死傷者名簿を添へたのは大に好い。

「暫く御手紙いたゞき不申心配致候處暑の御障もなくす〜御健かに渡られ候由何よりも誠に喜ばしく奉存候。私共も昨今今無事に過し居候間御安心下され度候。直樹は毎日柔道に参り居り候が學科の方は餘り勉強致候はず習字はもとより本などは一度もおさらへ致候こと無之候何より運動が過ぎて馬鹿になりはせぬかと心配致し候。受持ちの先生にお供して日曜毎の様に山行き川行きなど致し居り候。友達は福島と申すが一番親しきやうに御座候此の人は或中學校先生のお子にて中々よく出来らるゝ様に候。

一番困り候は雪子のお友達にてこれにはほと〜持てあまし候。今がいたづら盛りにて中々のおてんばに相成り候。併し夜のやすむ時には屹度お寫眞の前にてお父様お休みなさいまし丈は申候。字は教へ候ても覚えず唱歌も出来不申候。いつも「品川乗り出す吾妻艦……」の歌と踊とを致し候。これはお隣のおば様に習ひ候ものに御座候。其歌は何んですかと聞き候へば「露西亞さんが食べた」との事にて何んの事やら解り不申皆々大笑ひ致し申候。

やう〜出来上り候二人の寫眞御覽下され度候。直樹は其頃病氣後にて少々まだ衰弱い様子見え申候。雪子はます〜肥え太りて御覽の如くに御座候。姿勢悪かりし爲め長い袖も後に隠れ筒袖の様に見え候。段々おデコが出て鼻の引込み候は寫眞に偽り無之候。幸に近所の人によりて可愛がられ居候。門前を通らるゝ書生さんには屹度おじぎ致し其答禮のあるまでは二度でも三度でも致し候。此節ではおなじみの書生さんは向より禮を爲され頭の一つもなで〜過ぎられ申候。』

封入の寫眞を見ると、成程立派なおデコに爲つて居る。斯んな所は、何にも苦しんで乃公に肖なくつて好いのだ。一體女といふものは萬事控目が好い、顔の如きは殊に出してやるに及ばぬことだ。  
半片紙に太郎も何か書いて来て居る  
『お父様、私は毎日柔道に行きます。雪子もたつしやであります。雪子は空にある星を益と云ひます。そして本を讀むことが好

まで、毎日日本を讀むといつて、何とかグチャクと云ひますが少しも分りません。雪子のカン、と私の繪本とか送つて来た時、直に箱をあけて見て頭にさへれないから髪を結つて下さいと云つて、結つてもらつてからは、さへすにすぐもみ碎いてしまひました。雪子は甚だすねることが上手でありますから困ります。』

すねるといふ事は大なる惡徳の一つだ。婦人に取つては殊更に宜しくない習癖である。これも乃公に肖たのであらう。大に矯正の法を講じなければならぬ。直樹の不勉強は、今年、十才か十一才の事だから格別責むることはない。母親などといふものは、育兒法か何かを、本で讀んだか、雜誌で覺えたか知らぬが、一概に其規則通りに行つて見やうとするから可かぬ。あまり煩雜な注文をするから反つて子供は何も云ふことを聞かぬ様になるのだ。何か著しい惡癖が有つたら先づ是れを一つ手厳しく滅めるのだ。而して容赦なく之に罰を加へるのだ。世の中には謝罪させて罰を免るすといふ親が屢々あるが、其は非常に惡い事だ。ツベエへ辯茶羅で胡麻化すといふ癖は此から養成される。

抑謝罪で罰を免れやうとは、甚だ不見識な、卑怯な根性である。卑怯な奴、汚い奴と呼ば

れるのは人間無上の恥辱だ、其恥辱を恥辱ともしなくなるのは「此から致しません、勘辨」を幼時に繰返さしめた結果である。「此から致しません」は將來に關することだから好いとて、其爲め過去に生じたる罪惡を勘辨することは決して相成らぬ。例へば今に大金儲けを致しますと言つたからとて、是迄の借財に棒を引くといふ理窟は無い筈だ。改心は爲せなければならぬが、罰は恕することは出来ぬ、鴉は鴉、白紙は白紙、是れ我家の法なり。宜しくしつかり取締るべしと妻に申遣はす。

午後七時

大馳走、征露丸は萬病の藥、輕業師には出する

▲今夜は意外な馳走だ。

蕎麥—乾燥蕎麥で、だしは小鰈、共に追送品。ピフテキ、ソースは營口より取寄せたるもの、焼茄子—茄子は今夜が初物。漬物—澤庵及び白菜漬。

酒、司令部より頒たれた葡萄酒、日本酒、朝、午、ともに不味いものばかりで、空腹に爲つて居た胃袋を十分に充實させる。

食事が了つて征露丸を一粒服じ。此の薬はケレオソートで殺菌の効が有るとか、傳染病豫防の爲め毎食後に一粒づゝ服用すべく支給せられるのである。初の中は此の薬の異様な臭を嫌つて服用を厭つた者もあつたが、眞面目に服み続けた者と否との間に、罹病者の數に非常の差があることが、争ふべからざる統計的證據に顯はれたので、今日では兵士中には殆んど迷信的に服用する様に爲つて來た。「私は昨日頭痛がしたから一粒服んだ」とか「風邪を引いた様だから四粒一緒にやつけたら直ぐに治つて仕舞つた」などといふ。

▲機械醜操、鐵棒の上に飛び登つて色々の動作をやつて居るのを見て、土人が何か饒舌つて居る。其一人を拉し來つて、登つて見よと強ふる。據なしに數回試みたけれども出來ない。他の支那人等は其同類が頻りにもがいて居るのを見て笑ひながら眺めて居たが一人が「吾々百姓に、どうして出來るものか」といふと、演損なひの土人がつぶやいて言ふ様「清國人だつて輕業師には能會」

△午後八時

土人の食卓、左利き、男軍女軍の眞相、燈、陣中の樂天家、星の動員

○避難民等が食事を始めた、室内は狭くて暑いからであらう、皆戸外に出て地上に筵を敷いて一家族づゝ各團坐して居る。高粱を食つて居るのは當然だが、中には白米飯を盛つて居るものもある。多分兵士から殘飯を貰つたのだ。副食物は生野菜、生味噌、或は牛の臟腑を煮つけたるものもある。左の手に箸を把つて居るのが三分の一以上ある。食ふとく、老人も小兒も婦女共も皆大食ひだ、一日炎天に働いてやつと夕方に歸つて來た男共が、どれ何の位の慰藉を得て居るかと觀るけれども、滿洲の婦女どもは甚だ横着なものだ、行水の水を取つてやるでもなく、團扇の風を送るでもなく、飯の給仕さへ爲てはやらない。食事が了ると男共は食卓や筵を取片付けて、やがて箸を持つて其處を掃き清める、女共は長い烟管を啣へながら其處の桶や石の上に腰かけて空打仰いで涼んで居る。支那は極度の男尊女卑の様に噂されて居るけれども、斯の如くなれば男尊ほど有難くないものはあるまいと感ぜられる。

○八時半過る頃、燈を點ける。

やがて日はトツブリと暮れる。裏庭の涼み臺に部内皆集まる。涼しい風が高梁から川原を